

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (62)

南九州西回り自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-VIII

(伊集院 I C ~ 市来 I C)

うえ の はら い せき
上 ノ 原 遺 跡

(日置郡市来町)

2003年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

序 文

この報告書は、南九州西回り自動車道鹿児島道路（伊集院 I C～市来 I C間）建設に伴い、鹿児島県立埋蔵文化財センターが実施した上ノ原遺跡の発掘調査の記録です。

この調査によって上ノ原遺跡では、縄文時代、古墳時代、古代～近世など各時代の遺構・遺物が発見されました。なかでも貝殻の入った土坑は、古墳時代の生業を考える上で貴重な資料を提供することになりました。

本書が地域の歴史研究や文化財の啓発・普及の一助として、多くの方々に活用していただければ幸いです。

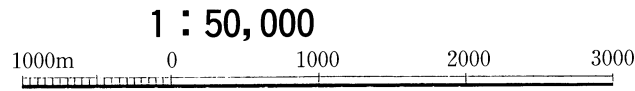
なお、この発掘調査を実施するにあたって、国土交通省九州地方整備局鹿児島国道事務所や地元の皆様に多大なご協力と、文化財に対する深いご理解をいただきました。ここに深甚の謝意を表します。

平成15年 3 月

鹿児島県立埋蔵文化財センター
所 長 井 上 明 文

報 告 書 抄 録

ふりがな	うえのはらいせき							
書名	上ノ原遺跡							
副書名	南九州西回り自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	Ⅷ							
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	62							
編著者名	繁昌 正幸・牛ノ濱 修・高岡 和也・拔水 茂樹・寺原 徹							
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター							
所在地	〒899-4461 鹿児島県国分市上ノ段1175番地1 TEL0995-48-5811							
発行年月日	西暦2003年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
うえのはらいせき 上ノ原遺跡	かごしまけん 鹿児島県 ひおきぐんいちきりょう 日置郡市来町 しまうちあざうえのはら 島内字上ノ原	463612	28-19	31° 40′ 20″	130° 19′ 30″	確認調査 19961112 ～ 19961128 本調査 19980708 ～ 19980924	50㎡ 2,000㎡	南九州西回り自動車道 鹿児島道路 建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
上ノ原遺跡	包含地	縄文時代早期 縄文時代前期以降 縄文時代晩期 古墳時代 古代 中世	集石1基・土坑8基 集石2基・土坑5基 石斧集積・ピット 堅穴1基・土坑1基		塞ノ神式土器 轟式土器・石斧 石匙・磨石・石皿 夜白式土器・組織痕 土器・土製加工品 スクレイパー 打製石鏃 成川式土器・貝殻 土師器・須恵器 青磁・滑石製石鍋		調査後の遺跡は消滅。ただし北側調査区外には遺跡が残存。	



第1図 上ノ原遺跡位置図

例 言

- 1 この報告書は、南九州西回り自動車道鹿児島道路（伊集院IC～市来IC間）建設に伴う上ノ原遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、建設省九州地方建設局鹿児島国道工事事務所（現国土交通省九州地方整備局鹿児島国道事務所）の受託事業として、鹿児島県立埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 整理および報告書作成作業は、平成14年度に県立埋蔵文化財センターにおいて実施した。
- 4 本書で用いたレベル数値は、すべて海拔絶対高である。なお、レベル数値は、日置郡東市来町湯田市ノ原に所在する三角点を基準として利用した。
- 5 本書の遺物番号は通し番号であり、本文および挿図・表・図版のものとすべて一致する。
- 6 発掘調査においては、東市来町教育委員会ならびに市来町教育委員会の協力を得た。
- 7 発掘調査における実測、写真撮影等は上之園健二・栗林文夫が、整理作業における遺構・遺物の実測・製図等は繁昌・牛ノ濱・高岡・抜水・寺原が分担して行った。
- 8 遺物の写真撮影においては、県立埋蔵文化財センター鶴田静彦・福永修一の協力を得た。
- 9 各執筆分担は次のとおりである。
第1章・第4章 第3節……牛ノ濱・抜水
第2章・第3章・第4章 第1節・第2節・第4節・第5章……繁昌
第4章 第5節……高岡・寺原
- 10 石器の実測・製図については、株式会社九州文化財研究所（旧文化財環境整備研究所）に委託した。
- 11 本書の編集は、繁昌・牛ノ濱・高岡・寺原が分担して行った。
- 12 各遺跡の出土遺物・図面・写真は、県立埋蔵文化財センターで保管・活用するほか、縄文の森展示館でも展示・活用する予定である。

目 次

序 文	
報告書抄録	
例 言	
目 次	
	ページ
第1章 はじめに	1
第1節 調査に至るまでの経過	1
第2節 遺跡の概要	1
第2章 発掘調査の経過	6
第1節 調査に至るまでの経緯と経過	6
第2節 調査の組織	6
第3節 調査の経過（日誌抄）	7
第3章 遺跡の位置および環境	9
第1節 地理的環境	9
第2節 歴史的環境	9
第4章 発掘調査の概要	13
第1節 発掘調査の方法	13
第2節 層 位	16
第3節 縄文時代	21
1 早期の遺構	21
2 早期の土器	26
3 前期～晩期の遺構	32
4 前期～晩期の土器	36
5 石斧デポ（集積）遺構	44
6 石 器	44
第4節 古墳時代	65
1 遺 構	65
2 土 器	70
第5節 古 代	74
1 調査の概要	74
2 出土遺物	74
第5章 ま と め	79
図 版	81

挿 図 目 次

	ページ		ページ
第1図 上ノ原遺跡位置図		第27図 石斧デポ（集積）遺構	43
第2図 西回り自動車道調査遺跡位置図	5	第28図 石斧（1）	43
第3図 上ノ原遺跡および周辺遺跡	12	第29図 石斧（2）	45
第4図 調査範囲図	14	第30図 石器（1）	47
第5図 グリッド図	15	第31図 石器（2）	48
第6図 土層柱状図	16	第32図 石器（3）	49
第7図 土層断面図（1）	17	第33図 石器（4）	51
第8図 土層断面図（2）	18	第34図 石器（5）	52
第9図 Ⅲ層検出遺構図	19	第35図 石器（6）	53
第10図 Ⅲ層上面コンター図	20	第36図 石器（7）	54
第11図 Ⅲ層検出集石	22	第37図 石器（8）	55
第12図 Ⅲ層検出土坑	24	第38図 石器（9）	56
第13図 Ⅲ層出土遺物分布図	25	第39図 石器（10）	57
第14図 縄文時代早期の土器（1）	26	第40図 石器（11）	58
第15図 縄文時代早期の土器（2）	27	第41図 石器（12）	59
第16図 縄文時代早期の土器（3）	28	第42図 石器（13）	60
第17図 縄文時代早期の土器（4）	29	第43図 石器（14）	61
第18図 縄文時代早期の土器（5）	30	第44図 Ⅱb層検出竪穴遺構	65
第19図 Ⅱb層検出遺構図	31	第45図 Ⅱb層検出貝殻混在の土坑	66
第20図 Ⅱb層検出集石	33	第46図 遺構出土の土器（1）	67
第21図 Ⅱb層検出土坑	34	第47図 遺構出土の土器（2）	68
第22図 Ⅱb層出土遺物分布図	35	第48図 古墳時代の土器（1）	69
第23図 縄文時代前期～晩期の土器（1）	36	第49図 古墳時代の土器（2）	70
第24図 縄文時代前期～晩期の土器（2）	37	第50図 Ⅱa層出土遺物分布図	73
第25図 縄文時代前期～晩期の土器（3）	38	第51図 古代の土器	77
第26図 縄文時代前期～晩期の土器（4）	39	第52図 上ノ原遺跡残存範囲図	78

表 目 次

	ページ		ページ
第1表 西回り自動車道調査遺跡一覧……………	4	第7表 石器計測表 (2)……………	63
第2表 周辺遺跡 (1)……………	10	第8表 石器計測表 (3)……………	64
第3表 周辺遺跡 (2)……………	11	第9表 古墳時代土器観察表 (1) - 遺構出土…	71
第4表 縄文土器観察表 (1)……………	41	第10表 古墳時代土器観察表 (2)……………	72
第5表 縄文土器観察表 (2)……………	42	第11表 古代の遺物 (土師器) 観察表……………	76
第6表 石器計測表 (1)……………	62		

図 版 目 次

	ページ		ページ
図版1 遺構検出状況・2号集石……………	81	図版12 石器 (3)……………	92
図版2 石斧デポ検出状況・石斧デポ断面…	82	図版13 石器 (4)……………	93
図版3 土層断面……………	83	図版14 石器 (5)……………	94
図版4 貝殻混在の土坑・貝殻検出状況…	84	図版15 石器 (6)……………	95
図版5 縄文土器 (1)……………	85	図版16 石器 (7)……………	96
図版6 縄文土器 (2)……………	86	図版17 石器 (8)……………	97
図版7 縄文土器 (3)……………	87	図版18 石器 (9)……………	98
図版8 縄文土器 (4)……………	88	図版19 古墳時代の土器 (1)……………	99
図版9 縄文土器 (5)……………	89	図版20 古墳時代の土器 (2)……………	100
図版10 石器 (1)……………	90	図版21 古墳時代の土器 (3)……………	101
図版11 石器 (2)……………	91	図版22 古代の土器……………	102

第1章 はじめに

第1節 調査に至るまでの経過

建設省九州地方建設局(中央省庁再編により平成13年1月より国土交通省九州地方整備局に改称)は、鹿児島～市来間に南九州西回り自動車道鹿児島道路の建設を計画し、事業区内の埋蔵文化財の有無について鹿児島県教育庁文化課(組織改革により平成8年度より文化財課に改称)に照会した。この計画に伴い、文化課が平成3年6月に伊集院ICと市来IC間の埋蔵文化財の分布調査を実施したところ、当事業区内には27か所の遺物散布地及び確認調査の必要な地点が存在することが判明した。

事業区間内の埋蔵文化財の取り扱いについては、建設省鹿児島国道工事事務所と文化課の協議に基づき、鹿児島国道工事事務所と鹿児島県知事との間で委託契約が結ばれ、埋蔵文化財の確認調査・本調査が実施されることになった。

これを受けて、平成8年度から平成12年度にかけて、毎年度、計画的かつ継続的に各遺跡の確認調査及び本調査を実施し、埋蔵文化財の記録保存を図ることになった。発掘調査は鹿児島県立埋蔵文化財センターが実施した。

事業区間内の遺跡の概要については、以下の通りである。なお、確認調査等によって遺跡でないと判明した11か所は除いてある。

第2節 遺跡の概要

- 1 一ノ谷……伊集院町下谷口字一ノ谷の飯牟礼台地から西側へ延びた標高約90～95mの丘陵端部に位置し、調査面積は1,250㎡である。中世～近世の古道・五輪塔及び染付や近世～近代にかけての掘立柱建物跡・溝状遺構・土坑・ピットが、青磁・染付・土師器・薩摩焼などと一緒に発見された。
- 2 永迫平……伊集院町下谷口字下永迫の恋之原台地から延びた支脈が盆地状の水田地帯に落ちる直前の標高約150m程の小台地上に立地している。調査面積は14,000㎡で旧石器時代ナイフ形石器文化の2か所のブロックと細石刃文化期の細石刃が出土し、縄文時代早期前半の前平式期には9軒の住居跡を始め、3基の連穴土坑と9基の集石、多数の土坑を検出。その他、古墳時代から近世にかけての遺物も出土している。
- 3 下永迫A…伊集院町下谷口字下永迫の標高約85～110mのやせ尾根に挟まれた谷間に立地する。調査面積は2,600㎡で、縄文時代後期の指宿式土器と石鏃、古墳時代の成川式土器、古代～中世の土坑・集石が検出され、青磁・白磁が出土した。
- 4 柳原……伊集院町下谷口の標高約90～100mの山間の谷間、傾斜地及び周辺のやや小高いテラス状の尾根部に立地する。調査面積は6,000㎡である。縄文時代早期の集石4基や後期の石匙、石鏃、古代の土坑、焼土跡と共に土師器・須恵器が発見された。
- 5 上山路山…伊集院町大田字上山路山の標高約130mのシラス台地上に位置する。舌状台地の端部にあたり、平坦面から続く緩やかな斜面と、谷頭を含んだかなり急な斜面とからなる。調査面積は6,000㎡である。旧石器時代細石刃文化の遺物と縄文時代(早期・後期)、

弥生～古墳時代の遺物が発見された。主になるのは縄文時代早期で、遺構は道跡や集石、遺物は岩本式・前平式・吉田式土器等が出土した。

- 6 大田城跡…伊集院町大田字下城山迫の標高約120mの台地上に所在する。調査面積は4,000㎡である。中世山城の可能性を指摘された遺跡であったが、山城の存在を示す遺構は検出されなかった。旧石器時代ナイフ形石器文化、細石刃文化の遺物と縄文時代早期の集石、土坑等の遺構と岩本式・前平式土器等の遺物が発見された。
- 7 堂平窯跡…東市来町美山の標高約85～92mの傾斜面にある江戸時代の薩摩焼の窯跡である。調査面積は3,500㎡で、窯、作業場、物原が発見された。窯は長さ約30m、幅1.2m、傾斜角17°の半円筒形をした単室傾斜窯である。陶器（甕・壺・徳利・土瓶・こね鉢・播鉢・動物形土製品）、瓦（軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・のし瓦）や窯道具が多量に出土した。
- 8 池之頭…東市来町美山字池之頭にあり、美山池北西部の標高約80～100mのシラス台地の尾根状部分に立地し、調査面積は7,500㎡である。旧石器時代のナイフ・台形石器・スクレイパー・細石刃核・細石刃、縄文時代早期の集石8基・前平式・吉田式・石坂式土器や中期の春日式・並木式・阿高式土器、晩期の入佐式や黒川式土器が出土した。また、古墳時代の成川式土器（甕・壺・高坏等）が多く発見された。
- 9 雪山…東市来町美山字雪山の標高約95mの台地東端に立地する。調査面積は2,700㎡で、旧石器時代の細石刃核・細石刃、縄文時代の集石2基と前平式・春日式土器・石鏃・石皿・磨石、古墳時代の成川式土器が出土したが、主体は近世～近代の薩摩焼の遺構・遺物で、炉跡・物原？・土坑等が薩摩焼（茶家・土瓶・播鉢・瓶・碗）、染付（碗・皿）や窯道具と一緒に発見された。
- 10 猿引…東市来町長里字猿引の標高約110～115mの尾根状の台地に立地する。調査面積は800㎡で、旧石器時代ナイフ形石器文化の礫群1基と三稜尖頭器・ナイフ・台形石器・敲石や細石刃文化の細石刃核・細石刃と縄文時代前期の曾畑式土器・黒曜石片が出土した。
- 11 犬ヶ原…東市来町伊作田字犬ヶ原の標高約66mの独立丘陵のシラス台地に立地する。調査面積は2,000㎡で、旧石器時代の細石刃核・細石刃、縄文時代の浅鉢・深鉢・石斧・石皿・石鏃・石匙、古墳時代の成川式土器（甕・壺・鉢）等が出土したが、主になるのは平安時代で、掘立柱建物跡（4間×4間・総柱）が製鉄に関する遺物（鞆羽口・鉄滓・鉄製品）・土師器・須恵器と共に多く発見された。
- 12 向栴城跡…東市来町伊作田の標高約50mの独立台地上に所在する。調査面積は14,000㎡である。旧石器時代ナイフ形石器文化の剥片尖頭器・ナイフ、縄文時代草創期の隆帯文土器が多量の石鏃と一緒に見つかった。また古墳時代の竪穴住居跡や中世～近世にかけての空堀・帯曲輪・堀切・竪穴状遺構・掘立柱建物跡・炉跡などが発見され、中世山城としての遺構が確認された。
- 13 堂園平…東市来町伊作田の遠見番山から下る斜面の裾部にあり、標高約50mの平坦地に立地する。調査面積は2,000㎡で、旧石器時代のナイフ形石器文化の礫群9基と剥片尖頭

器・ナイフ・台形石器と細石刃文化の細石刃核・細石刃，縄文時代の集石4基・吉田式・塞ノ神式土器や轟式土器等が発見されている。また古代の土師器・須恵器等も出土している。

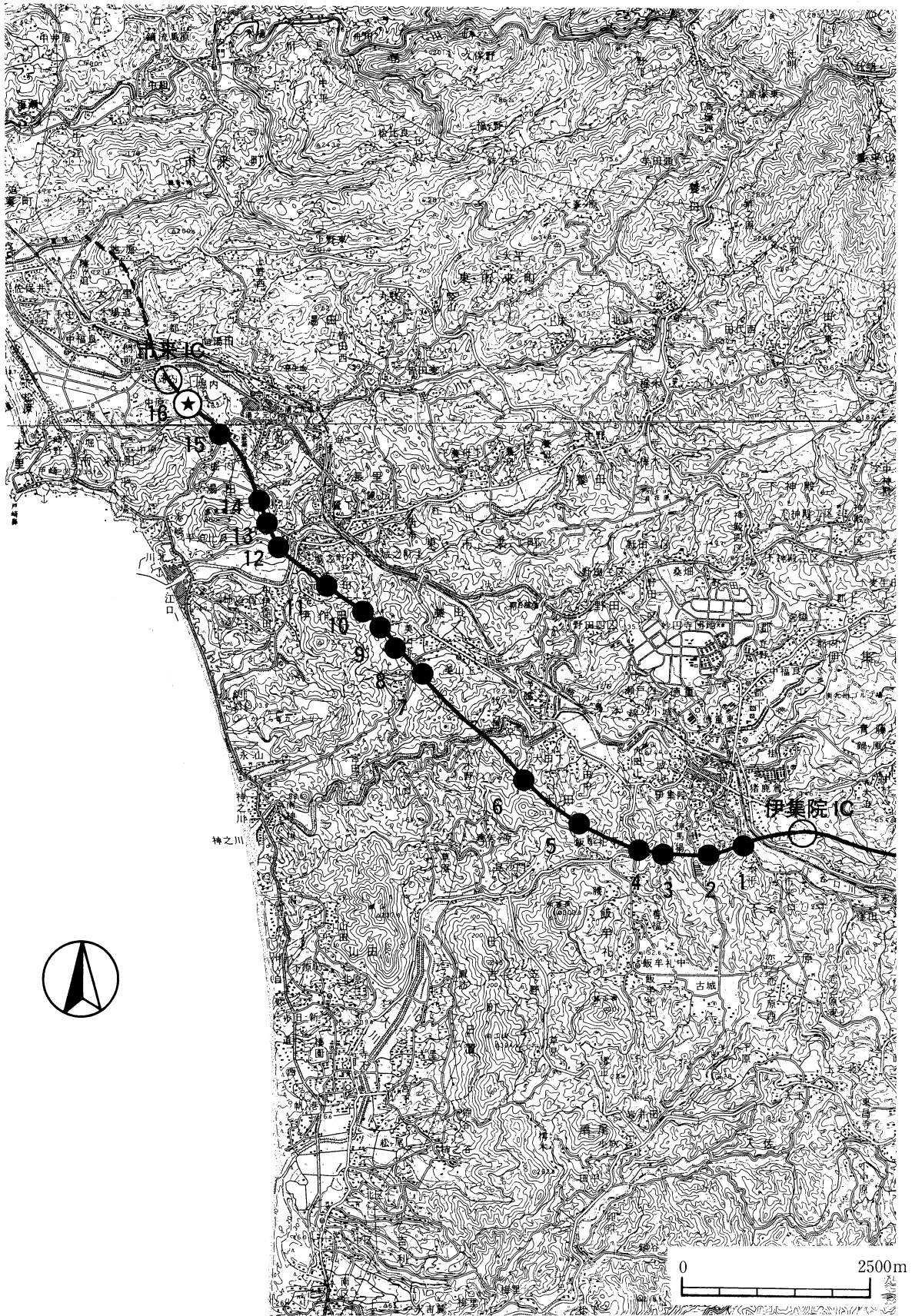
- 14 今里……………東市来町伊作田字今里の標高約65mの台地端の傾斜地に所在する。調査面積は14,000㎡で，旧石器時代ナイフ形石器文化の礫群，剥片尖頭器・ナイフ・台形石器や細石刃文化の細石刃核・細石刃・調整剥片が出土し，縄文時代の集石や前平式・深浦式・出水式・黒川式土器や石匙などの石器，古墳時代の成川式土器が発見された。
- 15 市ノ原……………市来町大里字上ノ原前から東市来町湯田字市ノ原に至る標高約50mの台地西側に所在する。調査面積は62,000㎡である。遺跡は第1地点から第5地点まであり，旧石器時代ナイフ形石器文化，細石刃文化，縄文時代（早期～晩期），弥生時代の住居跡・埋壺，古墳時代の住居跡，古代～中世，近世の街道跡など多時期に亘り，多種多様な遺構・遺物が発見された。
- 16 上ノ原……………市来町大里の東シナ海を望む標高40mの台地上に立地し，三方は急峻な傾斜面となっている。調査面積は2,000㎡で縄文時代の集石3基，土坑が検出され，塞ノ神式・轟式土器と石斧・石鏃・石匙などが出土した。古墳時代では竪穴式住居跡1基と土坑・成川式土器が，古代～中世は土師器・須恵器・青磁・滑石製石鍋が発見された。

(本報告書)

第1表 西回り自動車道調査遺跡一覧

番号	遺跡名	所在地	調査期間	調査面積	調査員	時代	備考
①	一ノ谷	伊集院町下谷口	確認 全面 H 8.10 H 8.10～11	1,250㎡	三垣・桑波田	中世 近世	掘立柱建物跡・土坑 陶磁器 県理文センター報告書31 2001刊行
2	永迫平	伊集院町下谷口	確認 全面 H 8.10～12 H 8.12～H10.7	14,000㎡	三垣・桑波田 繁昌・藤崎・三垣・中原 桑波田・川口・大窪	旧石器(ナイフ) 旧石器(細石刃) 縄文(早・後・晩) 古代 近世	礫群・剥片尖頭器・ナイフ・台形石器 細石刃 竪穴住居跡・集石・連穴土坑・前平式土器 土師器・青磁 土坑・集石・土師器・須恵器 青磁 土坑・焼土・土師器・須恵器・鉄製品 ピット・溝状遺構
3	下永迫A	伊集院町下谷口	確認 全面 H 9.10 H10.5～7	2,600㎡	池之園・栗林	古代 中世	土坑・集石・土師器・須恵器 青磁
4	柳原	伊集院町下谷口	確認 全面 H 9.11 H10.7～10	6,000㎡	池畑・三垣・元田 繁昌・中原・川口・大窪	古代～中世 中世～近世	土坑・焼土・土師器・須恵器・鉄製品 ピット・溝状遺構
5	上山路山	伊集院町大田	確認 全面 H 9.2 H 9.5～H10.3	6,000㎡	三垣・桑波田 寺原・桑波田	旧石器 縄文(早・後) 弥生～古墳	剥片・破片 道跡・集石・岩本式・前平式・吉田式 成川式
6	大田城跡	伊集院町大田	確認 全面 H 8.12～H 9.1 H 9.12～H10.3	4,000㎡	三垣・桑波田 湯之前・橋口	旧石器 縄文(早)	三稜尖頭器 集石・土坑・前平式・石鏃・磨石
7	堂平窯跡	東市来町美山	確認 全面 H10.2 H10.8～12	3,500㎡	池畑 元田・川口・大窪	江戸	窯・柱跡・粘土湖まり・土坑・物原 陶器・瓦・窯道具
⑧	池之頭	東市来町美山	確認 全面 H 9.8 H10.8～11 H12.7～8	7,500㎡	湯之前・橋口 宮田洋一・寺原 宮田洋一・三垣	旧石器(細石刃) 縄文(早・後・晩)	細石刃核・細石刃 集石・前平式・吉田式・石坂式 成川式土器 県理文センター報告書32 2002刊行
⑨	雪山	東市来町美山	確認 全面 H12.6 H12.6～8	2,700㎡	宮田洋一・三垣	縄文(早) 近世～近代	集石・前平式 陶磁器類・窯道具 県理文センター報告書53 2003刊行
⑩	猿引	東市来町長里	確認 全面 H12.5 H12.5～6	800㎡	宮田洋一・三垣	旧石器 縄文(前)	礫群・ナイフ・台形石器・三稜尖頭器・剥片 骨押式 県理文センター報告書53 2003刊行
⑪	犬ヶ原	東市来町伊作田	確認 全面 H 9.2, H10.6 H11.12～H12.2	2,000㎡	池畑・三垣 牛ノ瀬・橋口・大窪	旧石器 縄文(晩)	細石刃核・細石刃・黒川式 掘立柱建物跡・竪治炉・土師器・碓黄・滑石 県理文センター報告書50 2003刊行
12	向府城跡	東市来町伊作田	確認 全面 H 8.11～12 H 9.4～H10.3 H10.7～8	14,000㎡	池畑・西園 鶴田・勇 八木澤・横手	旧石器 縄文(草創・早・後) 古墳 中世～近世	剥片尖頭器・ナイフ 石鏃・隆帯文・前平式・市米式 竪穴住居・成川式 突楯・葺曲輪・曲輪・堀切・竪穴状遺構・掘立 柱建物跡・母跡・土坑・青磁・備前焼
13	堂園平	東市来町伊作田	確認 全面 H 8.11～12 H10.5～11	2,000㎡	池畑・西園 八木澤・横手	旧石器(ナイフ) 旧石器(細石刃) 縄文(早・前・後) 古代	尖頭器・ナイフ・台形石器・磨石 礫群・細石刃核・細石刃 集石・吉田式・壺ノ神式・轟式 土坑・土師器・須恵器
⑬	今里	東市来町伊作田	確認 全面 H 8.11 H 9.4～11	14,000㎡	池畑・西園 湯之前・橋口	旧石器(ナイフ) 旧石器(細石刃) 縄文(早・前・後・晩) 古墳	礫群・剥片尖頭器・ナイフ・台形石器 細石刃核・細石刃・フランク・調整剥片 集石・前平式・深浦式・出水式・黒川式・石匙 成川式 県理文センター報告書33 2002刊行
15	市ノ原	東市来町湯田 市来町大里	確認 全面 H 8.10～12 H 8.12～H11.7	62,000㎡	繁昌・西園・宮田茂 池畑・繁昌・西園・寺師 前野・森田・宮田洋一 八木澤・中原・藤野・三垣 元田・西村・寺原・宮田茂 松村・松崎	旧石器(ナイフ) 旧石器(細石刃) 縄文(早～晩) 弥生 古墳 古代～中世 近世	礫群・ナイフ・台形石器・尖頭器 細石刃核・細石刃 集石・土器・石器 竪穴住居跡・土坑・成川式 竪穴住居跡・土坑・溝状遺構・土師器・須恵器 御道跡・掘立柱建物跡・竪治炉 県理文センター報告書49 2003刊行
⑭	上ノ原	市来町大里	確認 全面 H 8.11 H10.7～9	2,000㎡	繁昌・宮田茂 上之園・栗林	縄文(早) 古墳 古代～中世	集石・土坑・壺ノ神式 竪穴住居跡・土坑・成川式・貝殻土坑 土師器・須恵器・青磁 県理文センター報告書62 2003刊行 本報告書

○印報告書刊行済



第2図 西回り自動車道調査遺跡位置図

第2章 発掘調査の経過

第1節 調査に至るまでの経緯と経過

建設省九州地方建設局（中央省庁再編により平成13年1月より国土交通省九州地方整備局に改称）は、鹿児島～市来間に南九州西回り自動車道鹿児島道路の建設を計画し、事業区内の埋蔵文化財の有無について鹿児島県教育庁文化課（組織改革により平成8年度4月より文化財課に改称）に照会した。この計画に伴い、鹿児島県立埋蔵文化財センターが平成3年6月に伊集院インターチェンジと市来インターチェンジ間の埋蔵文化財の分布調査を実施したところ、当事業区内には27か所の遺物散布地および確認調査の必要な地点が存在することが判明した。

事業区間内の埋蔵文化財の取り扱いについては、建設省鹿児島国道工事事務所と文化課との協議に基づき、鹿児島国道工事事務所と鹿児島県知事との間で委託契約が結ばれ、埋蔵文化財の確認調査と、その後の緊急発掘調査（以下本調査）が実施されることになった。

これを受けて、平成8年度に上ノ原遺跡の確認調査、平成10年度に同遺跡の本調査を実施し、埋蔵文化財の記録保存を図ることになった。調査対象面積は2,000㎡である。なお、発掘調査終了後、整理作業および報告書作成を平成14年度に鹿児島県立埋蔵文化財センターで行った。

第2節 調査の組織

発掘調査（平成10年度）

起因事業主体	建設省九州地方建設局鹿児島国道工事事務所		
調査主体	鹿児島県教育委員会		
企画・調整	鹿児島県教育委員会文化財課		
調査責任	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所 長	吉永 和人
調査企画	鹿児島県立埋蔵文化財センター	次 長 兼 総 務 課 長	尾崎 進
	〃	主任文化財主事兼調査課長	戸崎 勝洋
	〃	調査課長補佐兼第一調査係長	新東 晃一
	〃	主任文化財主事兼第三調査係長	池畑 耕一
調査事務担当	〃	主 査	政倉 孝弘
	〃	主 事	溜池 佳子
調査担当	〃	文 化 財 主 事	上之園健二
	〃	文 化 財 研 究 員	栗林 文夫

整理作業・報告書作成（平成14年度）

起因事業主体	国土交通省九州地方整備局鹿児島国道事務所		
整理作業主体	鹿児島県教育委員会		
企画・調整	鹿児島県教育委員会文化財課		
整理作業責任	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所 長	井上 明文
整理作業企画担当	鹿児島県立埋蔵文化財センター	次 長 兼 総 務 課 長	田中 文雄

	〃	総務係長	前田 昭信
	〃	調査課長兼縄文調査室室長	新東 晃一
	〃	課長補佐兼縄文調査室室長補佐	立神 次郎
整理作業事務担当	〃	主査	脇田 清幸
整理作業担当	〃	主任文化財主事兼第三調査係長	牛ノ濱 修
	〃	文化財主事	繁昌 正幸
	〃	〃	高岡 和也
	〃	〃	抜水 茂樹
	〃	文化財研究員	寺原 徹

発掘作業員（五十音順・敬称略）

有村なるみ・石田万里子・岩切ひとみ・柿内弘巳・金里美恵子・川口貞子・川畑けい子・木佐貫栄治・岸上正子・楠原操・隈元加代子・小林喜代江・白石時則・杉村しのぶ・中島蓉子・柳木紀子・西文江・東一夫・福岡優子・福留美喜子・福森隼人・藤寄ルリ・二俣幸子・前野かをる・前村国夫・松下弘美・松元チヅ子・南シヅ子・南ノブ子・嶺井やよい・森園カツヨ・森田トキ子・四元幸子

整理作業員

石田眞美・岩爪美津子・久米村美穂子・西中菌加代子

なお、発掘調査および報告書作成中、次の方々から指導、ならびに協力をいただいた。記して謝意を表します。

（五十音順，敬称略）

池畑耕一・黒川忠広・新東晃一・寺原 徹・中村耕治・橋口亘・彌榮久志（以上 埋文センター）

第3節 調査の経過（日誌抄）

確認調査は、平成8年11月12日から11月28日にかけて計13日間実施した。緊急発掘調査（本調査）は平成10年7月8日から9月24日までの間、計44日間実施した。以下、調査の経過を日誌抄により2週間毎にまとめた形で略述する。

確認調査

平成8年11月12日（月）～11月23日（金）

確認トレンチ1～4（2×5m）を設定し、人力による掘り下げ開始。古墳時代～中世の遺物出土。Ⅱ～Ⅳ層出土遺物取り上げ。

11月26日（月）～11月28日（水）

確認トレンチⅢ～Ⅳ層出土遺物取り上げ。断面実測，写真撮影。埋め戻しを行い，調査終了。

緊急発掘調査（本調査）

平成10年7月8日（水）～7月17日（金）

全域を伐採すると共に、プレハブからの上り道を設ける。確認トレンチ5を設定して掘り下げ開始。トレンチ内遺物を平板実測、取り上げ。

7月20日（月）～7月31日（金）

トレンチ調査での層の確認後、全体的な表土の剥ぎ取りを開始する。A・B-4～6区からⅡ層面で一旦整え、その後、包含層として掘り下げを開始。Ⅱ・Ⅲ層出土遺物を平板実測し、取り上げ。

8月3日（月）～8月12日（金）

A-3～6区、全体的に掘り下げを行い、Ⅱ層出土遺物を平板実測、取り上げ。A-4区でピット検出、平板で実測を行う。集石が確認され、検出を行う。

8月17日（月）～8月28日（金）

集石検出と並行して、終了したものから実測を開始する。また、実測ポイントを平板で押さえる。Ⅱb層の出土遺物の平板実測、取り上げ。Ⅲ層上面コンター図作成。

9月1日（火）～9月11日（金）

竪穴状の遺構を検出。掘り下げ、実測。ピットを個々に実測していく。Ⅲ層出土遺物、平板実測、取り上げ。B・C-2～3区、掘り下げを行う。土坑検出、実測開始。

9月14日（月）～9月25日（金）

A～C-1～4区、掘り下げ。土坑検出、実測。同じく土坑の実測ポイントを平板で押さえる。

10月1日（木）～10月2日（金）

土坑実測。石斧の集積（デポ）検出。実測及び同ポイントの平板実測。調査終了後、トレンチなどの深い箇所を中心として埋め戻しを行い、完全に上ノ原遺跡の調査を終了する。

整理作業

整理作業は、平成14年11月～平成15年1月にかけて、国分市上之段の県立埋蔵文化財センターで行った。大まかな整理作業および報告書作成作業の経過は下記のとおりである。なお、平成10年度の本調査の後、調査担当者の栗林が概略的な整理を行った。

平成14年11月………実測図点検。遺物接合、実測用遺物選別。実測開始。

12月………実測、拓本。現場の実測図によりドット図および遺構図等作成、トレース作業。

平成15年1月………拓本、トレース、レイアウト。観察表作成。周辺地形図等作成。トレース。文章作成。

第3章 遺跡の位置および環境

第1節 地理的環境

上ノ原遺跡の所在する市来町は薩摩半島にあり、日置郡の北西部、吹上浜の北端に位置する。北は串木野市、東および南は東市来町と接するほか、北東の一部は薩摩郡樋脇町に接し、南西は東シナ海に面している。河川は八房川・重信川・大里川の三河川が流れている。八房川は北西部から南西部に流れ、大里川は南東部から北西に流れて湊町で合流し、東シナ海へ注いでいる。重信川は大里川に合流する。東シナ海に面する南西部は三河川の下流の沖積低地からなり、北東部は八重山山塊に属する旧期の火山岩を基底とする丘陵で、重平山付近に源を発する八房川が、狭い谷底平野を形成しつつ流れており、流域には集落が点在する。

第2節 歴史的環境

この地域には、樋脇町上牛鼻、市来町平木場など黒曜石の原産地が点在しており、町内および近隣市町の遺跡からもこれらが原産地と考えられる石器や剥片などが出土している。松尾平遺跡からは多くの石器が出土したほか、東市来町の堂園平遺跡からも旧石器時代の遺物が出土している。

市来町には縄文時代後期の著名な遺跡として市来（川上）貝塚がある。八房川中流左岸の河岸段丘縁辺部斜面にあり、大正10年、有村栄助・山崎五十磨によって発見された。本格的な発掘調査は、昭和36年に河口貞徳氏によって行われ、土器と人骨3体が発掘された。ここから出土した土器は南九州の縄文時代後期の標式土器とされ、市来式土器と命名されている。

南九州西回り自動車道川内道路（市来IC～串木野IC間）の建設に伴って平成9年～平成13年度に調査された安茶ヶ原遺跡では、四面廂建物跡2棟や片廂建物跡1棟をはじめ掘立柱建物跡6棟などの遺構が検出されたほか、「日置厨」と墨書された須恵器などが出土している。

中世には城も多く築かれており、上城跡・詰城跡・重信城跡などが市来町に、また、隣の東市来町には向椿城跡や伊作田城跡・鶴丸城跡などが知られており、古代から中世・近世にかけて、当地域が政治・経済上の重要な地域であったことが知れるのである。

参考・引用文献

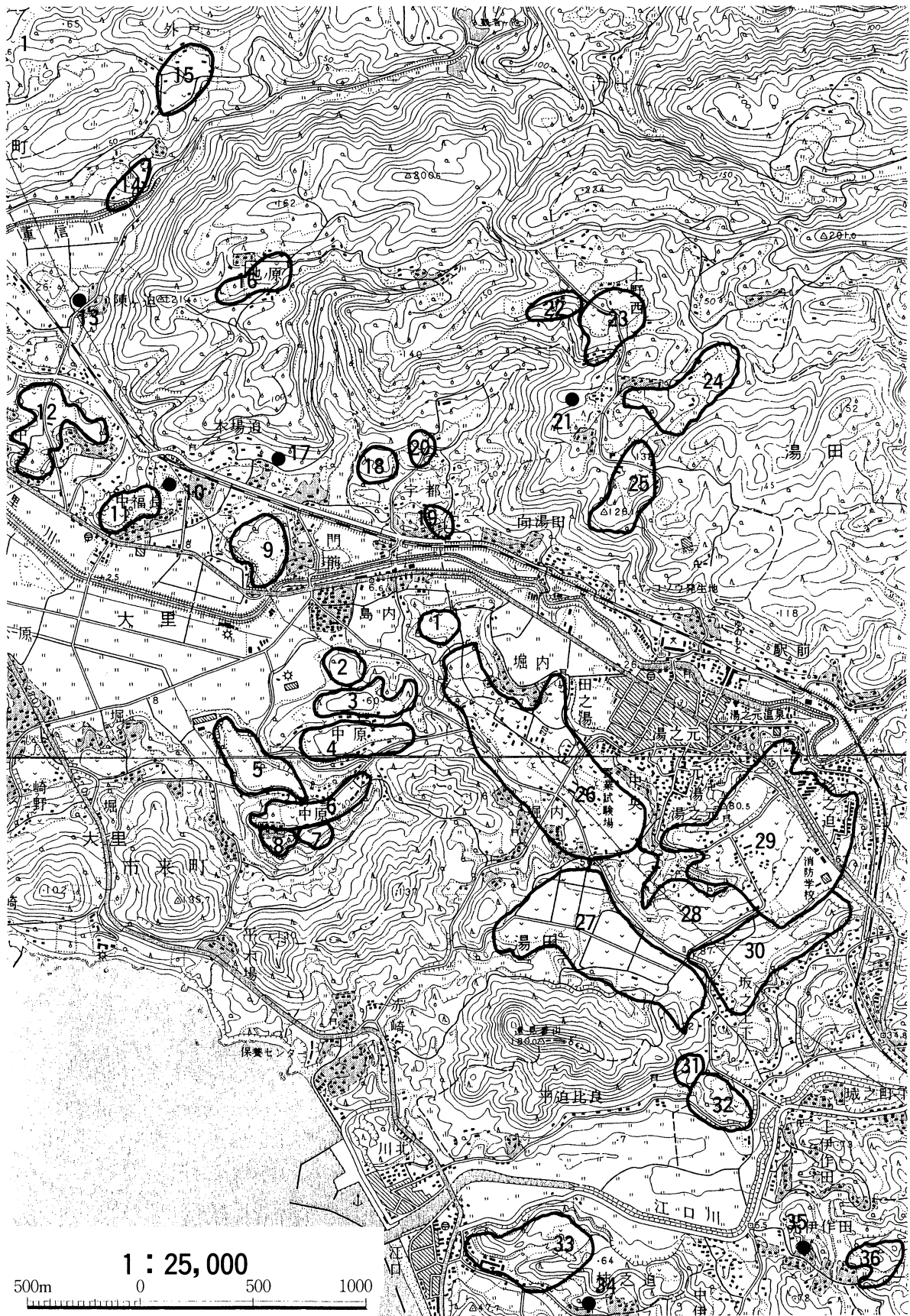
- 『市来町郷土史』 昭和57年3月 同書編集委員会
- 『市ノ原遺跡（第1地点）』 鹿児島県立埋蔵文化財発掘調査報告書(49)2003年3月
鹿児島県立埋蔵文化財センター
- 『上城跡・詰城跡』 市来町埋蔵文化財発掘調査報告書(7)1999年3月 市来町教育委員会
- 『川上（市来）貝塚』 市来町埋蔵文化財発掘調査報告書(1)1991年3月 市来町教育委員会
- 『松尾平遺跡・安徳遺跡』 市来町埋蔵文化財発掘調査報告書(3)1995年3月 市来町教育委員会
- 『角川日本地名大辞典46鹿児島県』 昭和58年3月 同書編纂委員会

第2表 周辺遺跡(1)

番号	遺跡名	所在地	地形	時代・時期	出土遺物	備考
1	上ノ原	日置郡市来町 大里島内上ノ原	台地	縄文・古墳 古代	打製石斧・土器片	町郷土誌 本報告書
2	来迎寺跡墓塔群	市来町大里島内	台地	10～15C	墓塔	S42, 3, 31 県指定
3	妙見前	市来町大里妙見前ほか	台地	10～15C	土師器・青磁・陶器	
4	東園	市来町大里 東園ほか	台地	古墳・中世・ 近世	土器・土師器・ 陶器	
5	半崎堀	市来町大里 半崎堀ほか	台地	弥生・古墳・ 中世	土器・土師器・ 陶器	
6	西ノ鼻	市来町大里 西ノ鼻ほか	台地	弥生・古墳・ 中世	土器・土師器・ 陶器	
7	中諏訪	市来町大里中原中諏訪	台地	古墳	土師器・須恵器	町郷土誌
8	下諏訪	市来町大里中原下諏訪	台地	縄文	土器片・打製石斧	町郷土誌
9	鍋ヶ城 惟宗広言の墓	市来町大里 木場迫	台地	10～13C	墓塔1基	S36, 4, 1 町指定
10	詰城跡	市来町大里詰城	台地	10～13C		市来氏
11	上城跡	市来町大里上城	台地	鎌倉		市来氏・ 土塁
12	中尾東原	市来町大里 中尾東原ほか	台地	中世・近世	土師器・青磁・ 染付・陶器	
13	重信城跡	市来町大里重信上城	台地			
14	草り田平	市来町湊草り田平	段丘	中・近世	土師器・陶器	
15	外戸山口	市来町湊外戸山口	段丘	弥生・古墳・ 中世	土器・土師器	
16	原ノ園原	市来町大里 原ノ園原ほか	台地	弥生・古墳・ 中世・近世	土器・土師器・ 陶器	
17	金鐘寺跡	市来町大里 木場迫	山麓	13C～幕末	墓塔	S36, 4, 1 町指定
18	池原前	市来町大里池原前ほか	丘陵	13C～	幕末墓塔	
19	安徳	市来町大里安徳	丘陵	縄文～古墳		町埋文報(3)
20	松尾平	市来町大里 松尾平	丘陵	古墳・中世・ 近世	土器・土師器・ 陶器・旧石器	町埋文報(3)
21	大谷山	市来町川上大谷山	斜面		石器・土器片	町郷土誌
22	松尾平	市来町大里 松尾平	丘陵	古墳・中世・ 近世	土器・土師器・ 陶器	
23	平波江	東市来町 湯田平波江	丘陵	古墳	土器	H3, 北薩 伊佐分布
24	麻畑	東市来町湯田麻畑ほか	丘陵	弥生・古墳	土器・土師器	〃

第3表 周辺遺跡(2)

番号	遺跡名	所在地	地形	時代・時期	出土遺物	備考
25	市右衛門堀	日置郡東市来町 湯田市右衛門堀ほか	丘陵	弥生・古墳・ 中世	土器・土師器・ 染付・陶器	H3, 北薩 伊佐分布
26	市ノ原	東市来町 湯田上市ノ原ほか	台地	縄文・弥生・ 古墳・古代・ 中世	土器・土師器・ 白磁・青磁	H8・9・10年 度県発掘
27	今里	東市来町 伊作田今里ほか	台地	古墳・中世・ 近世	土器・土師器・ 陶器・磁器	H9年度 県発掘
28	森蘭平	東市来町 長里森蘭平ほか	台地 斜面	弥生・古墳・ 中世	土器・土師器・ 須恵器	H9年度 県発掘
29	諏訪原	東市来町 湯田諏訪原ほか	台地	古墳・中世・ 近世	土師器・陶器・ 染付	H9年度 県発掘
30	浦田	東市来町 長里浦田(1)ほか	台地	古墳・中世	土師器	H9年度 県発掘
31	堂園平	東市来町 伊作田堂園平	丘陵	旧石器・縄文 中世	黒曜石・土師器・ 染付	H10年度 県発掘
32	向椿城跡	東市来町 伊作田上椿	丘陵 平地	旧石器・縄文 中世		中世城館跡調査 H9・10年度県 発掘
33	伊作田城跡	東市来町 伊作田字浜之丸	丘陵 平地	南北朝～ 室町		中世城館跡 調査
34	柿之迫	東市来町伊作田柿之迫	台地	弥生	弥生式土器片	
35	伊作田道材 の墓	東市来町 伊作田北蘭	丘陵	鎌倉	宝塔・五輪塔・ 木片(木像)	S48, 2, 22 町指定
36	金木山	東市来町 伊作田金木山ほか	丘陵	古墳・近世	土器・陶器	H3, 北薩 伊佐分布



第3図 上ノ原遺跡および周辺遺跡

第4章 発掘調査の概要

第1節 発掘調査の方法

平成8年10月1日から平成9年3月15日まで行った市ノ原遺跡及び上ノ原遺跡の確認調査を受けて、平成10年度には本調査を行った。

上ノ原遺跡の調査区域は約60m×40mの台形状であることから、北側の用地境のラインを東西方向の基準線として設定し、そこから10m毎の線を設定した。南北方向の基準線は、西の端から概略30mを計りだし、東西方向の基準線に直交するラインを基準として設定し、東および西に向けて10m毎に線を設定することで10m毎のグリッドとして区画して調査を行なった。グリッドの名称は、南北方向を北側からA、B…としてDまでを付け、東西方向を西側から1、2……として7までを付け、A-2区、C-4区のように呼称することとした。

調査は、平成8年度に行なわれた4本のトレンチによる確認調査の結果に基づいて行なった。表土を重機によって除去した後、一旦面を整えて遺構の有無を確認した。その結果、柱穴と考えられる小ピットが確認されたため、埋土の色調などを確かめながら掘り下げを行なった。平面的な位置を実測すると共に、深さなどの計測を行なった。

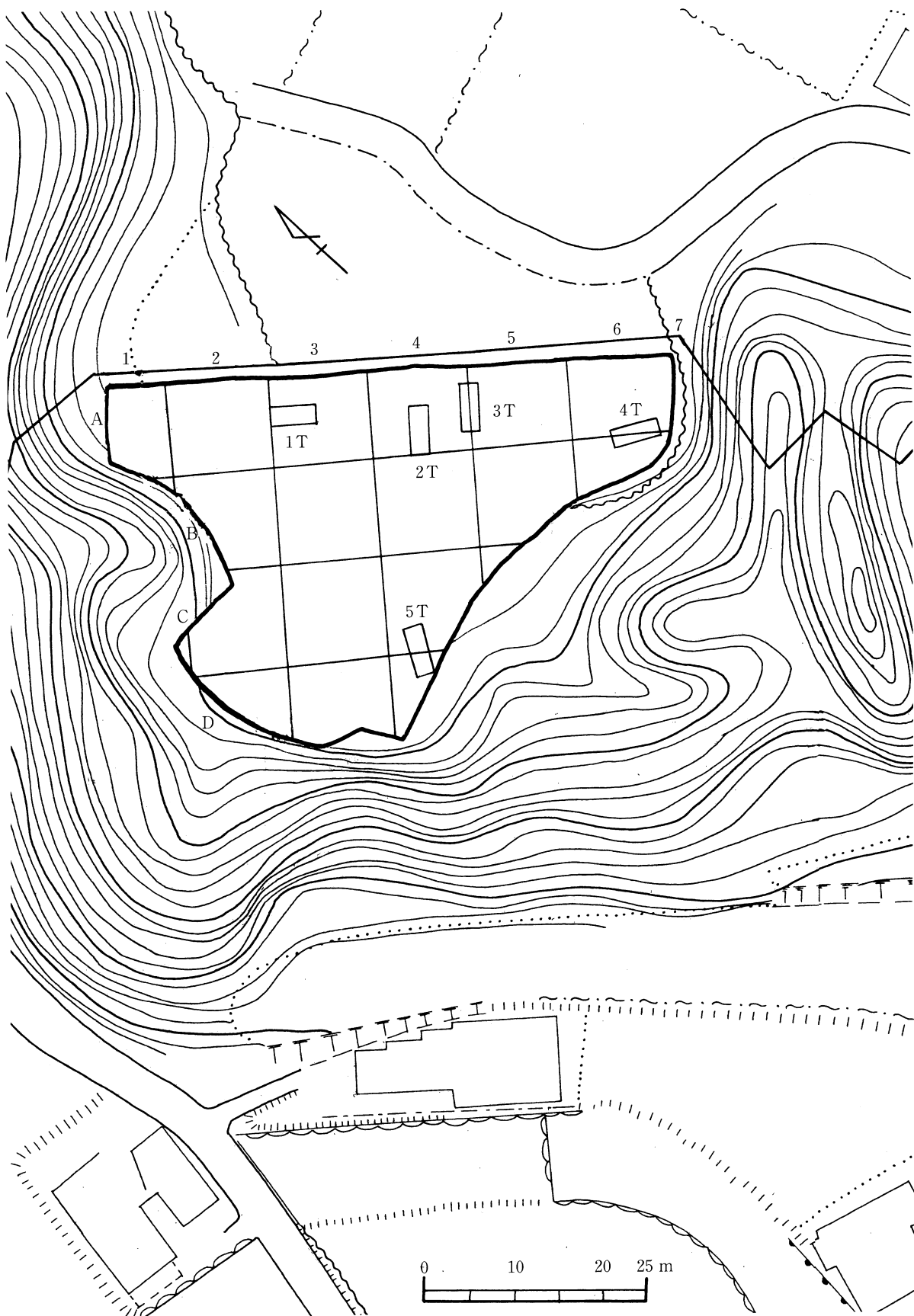
その後、山鉾などにより包含層の掘り下げを行ない、出土した遺物については平板により実測を行なうとともに、レベルを測定して遺物台帳に記載した。その過程で礫の集積が見られたため、丁寧に検出を行なった結果、縄文時代の集石と判明し、実測を行なった。また、その礫を観察して、火熱を受けているか否かや重量などを記録した。

さらにその後、下の層の上面で遺構検出を試みた。その上で、包含層の掘り下げを行なった。一部に遺物が出土したため、平板実測を行ない、レベルを記録して取り上げを行なった。

それより下層は、平成8年度の確認調査で遺物・遺構共に発見されていなかったものの、最終的な確認のために掘り下げを行なった。その結果、遺構・遺物ともに見つからなかったため、調査終了となった。



第4図 調査範囲図



第5図 グリッド図

第2節 層位

上ノ原遺跡の層序は、概ね以下の通りであり、I層からV層までに分層できる。

本遺跡の地形は、市ノ原の台地が北西に延びているその終焉の小台地に当たっているため、全体的にほぼ平らではあるものの、詳しく見ると東側が若干高く、そこから西側にかけて徐々に下がっている小台地の尾根状の部分と言える。この部分を、それほど遠くない過去に果樹園として扱いやすいように平らに造成してあった。そのため、現状はほぼ平らであっても、東側と西側には迫が入り、また、南側に向かっては谷へと下るといふ地形であることが判明した。つまり、南側へ全体的に下ると共に、東及び西側へも次第に下っていくという三方向傾斜の地形となっているということである。

先ほど述べたように、造成によって平らになっているため、造成土がかぶっている部分は厚く、そうでない部分は薄くなっている。ただ、本調査対象地域全体が、この造成を受けた果樹園の最南部に当たるため、全体的に造成土が厚くかぶっているようである。造成土を含む表土の厚さは、40～80cmである。また、B・C-3～5区の一部は攪乱されているとともに、C・D-2～4区にかけては削平によるものか、包含層は残存していない。

I層 黒褐色土。表土。造成土とその耕作土及び旧来からの耕作土。
色調等により分層できるが、直接遺構等とは無関係なため分層は行わなかった。

II層 黄白色土。下へ行くほど黄味が強くなる。
鬼界カルデラ起源のアカホヤ火山灰及び火山軽石と考えられる。
大きく2層に分層できる。

II a層 黄白色火山灰。腐植度は弱い。
縄文時代晩期～古墳時代の遺物包含層。

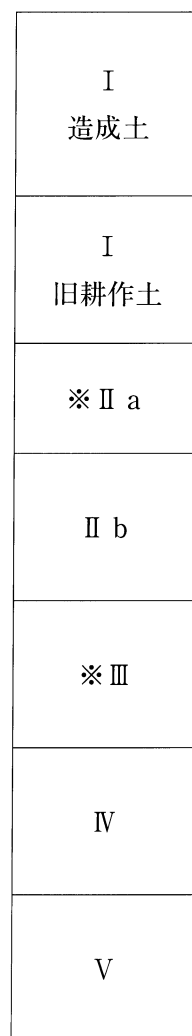
II b層 黄色火山灰及び火山軽石。アカホヤの一次推積。

III層 黒褐色土。
縄文時代早期を主とする遺物包含層。

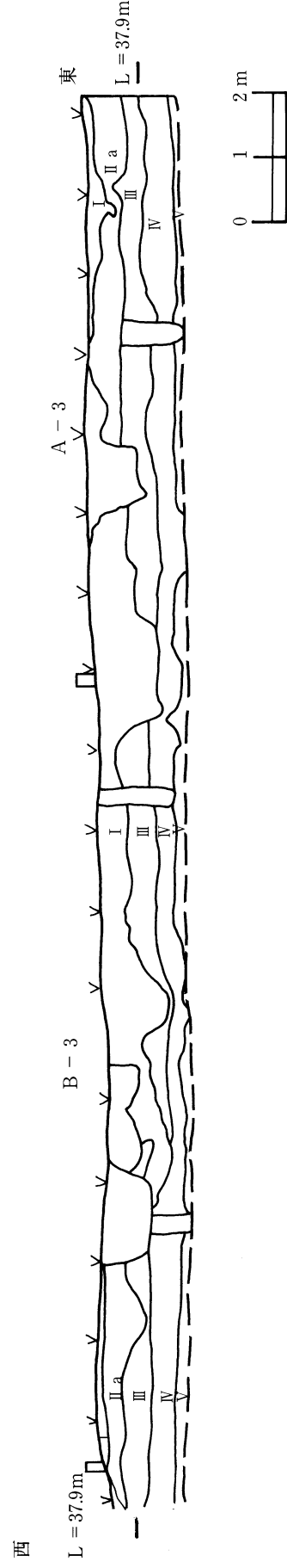
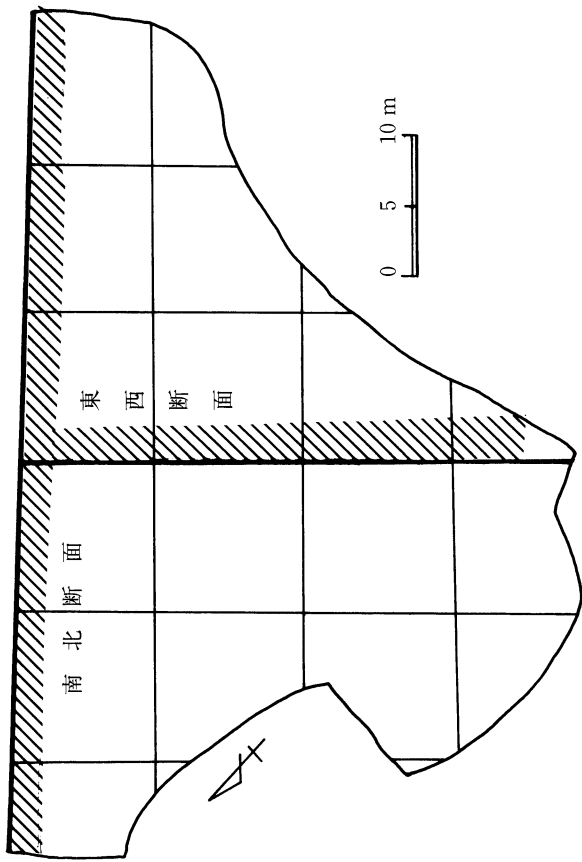
IV層 暗褐色土。強粘質土。
いわゆるチョコ層であるが、本遺跡では無遺物層である。

V層 白色火山灰。砂質。
いわゆるシラスで、無遺物層である。

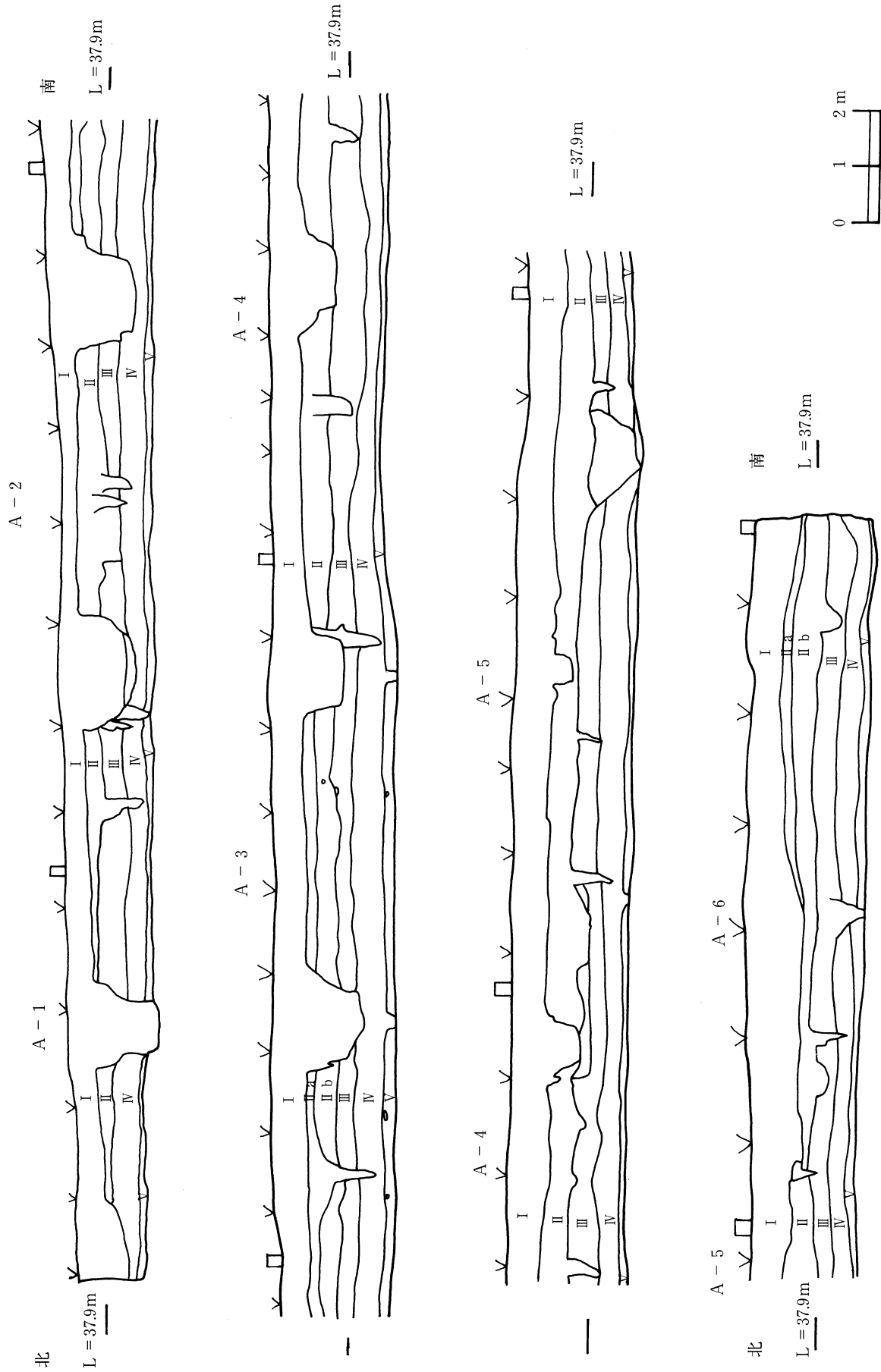
※：遺物包含層



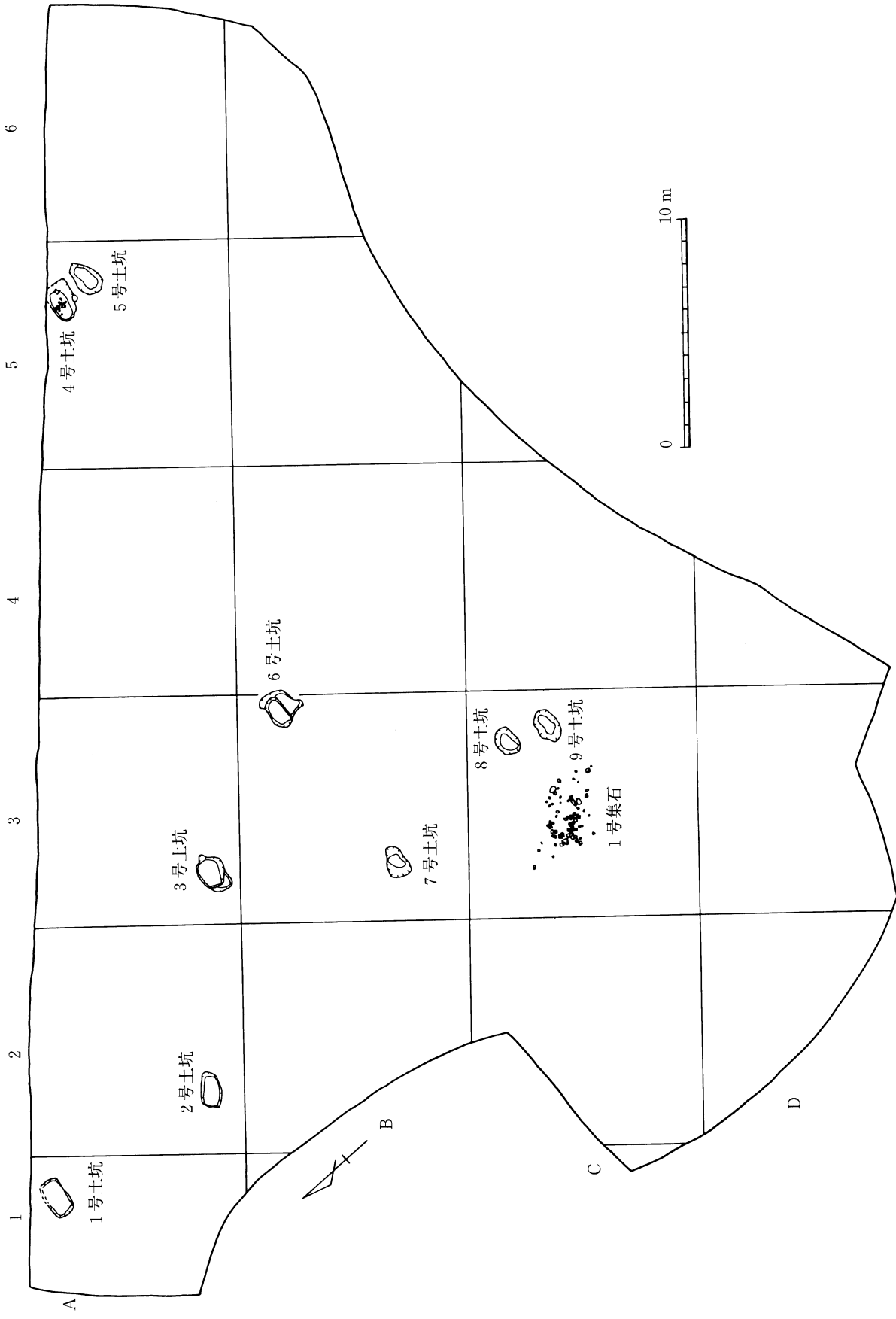
第6図 土層柱状図



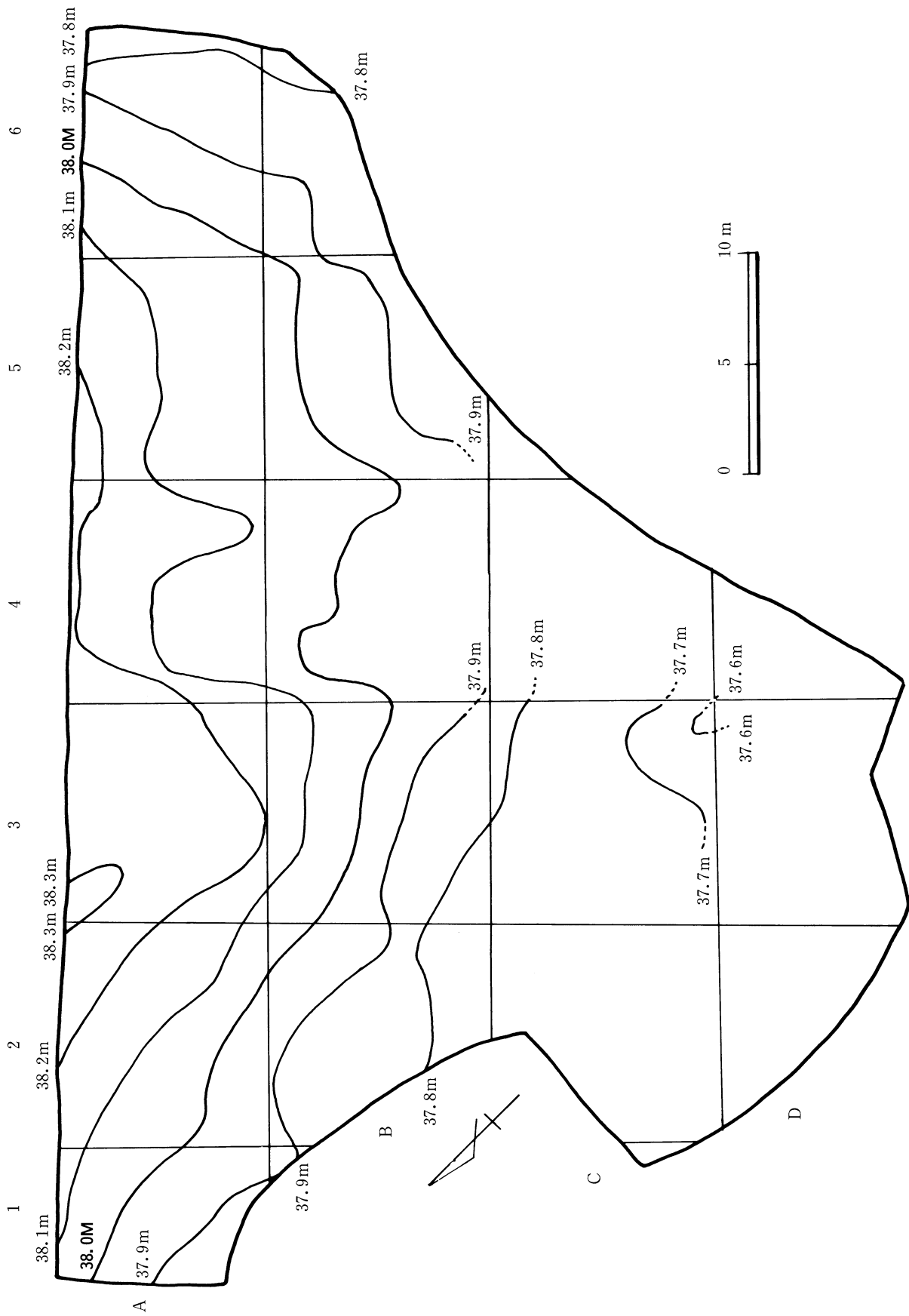
第7图 土层断面图(1)



第8图 土层断面图(2)



第9图 Ⅲ层检出遺構図



第10図 III層上面コンター図

第3節 縄文時代

縄文時代の調査は、確認調査の結果を基に表土（耕作土）を除去したのち、Ⅱ～Ⅲ層の各層毎に行った。その結果、Ⅲ層から縄文時代早期の遺構・遺物、Ⅱb層から縄文時代前期・晩期の遺構・遺物が検出された。

1 早期の遺構

Ⅲ層検出の遺構は集石1基と土坑9基である。

集石（第11図）

集石は、C-3区で安山岩を主体とした角礫が東西を長軸とした200cm×100cmの範囲に74個集中して検出された。掘り込み等はみられなかったが、63cmの高低差があり、第11図の集石断面図でわかるように中央部がくぼんだ状況で検出されている。炭化物等はみられなかったが、礫は焼成を受けているようである。

土坑（第12図）

土坑は遺跡全体の広範囲に点在し、9基検出された。検出面からの掘り込みは各土坑によって差があり、33～78cmを測る。

土坑1

遺跡の北西部標高38mの調査地域の一番小高いA-4区で検出され、長径は169cm、短径が105cmで掘り込みは隅丸方形を呈し63cmを測る土坑である。埋土は黒色土・白色微細軽石・黄澄パミス等が混在していたが、遺物等は出土しなかった。

土坑2

土坑2は土坑1の南8mのA-2区にあり、151cm×91cmを測る東西方向に長い隅丸方形の土坑で、掘り込みは44cmを測る。埋土は黒褐色土で遺物等は出土しなかった。

土坑3

土坑3は土坑2の南東10mのA-3区にある複合した土坑である。135cm×123cmの略円形を呈し、63cmとやや深い掘り込みがみられるものである。やはり、埋土は黒褐色土で遺物等は出土しなかった。

土坑4

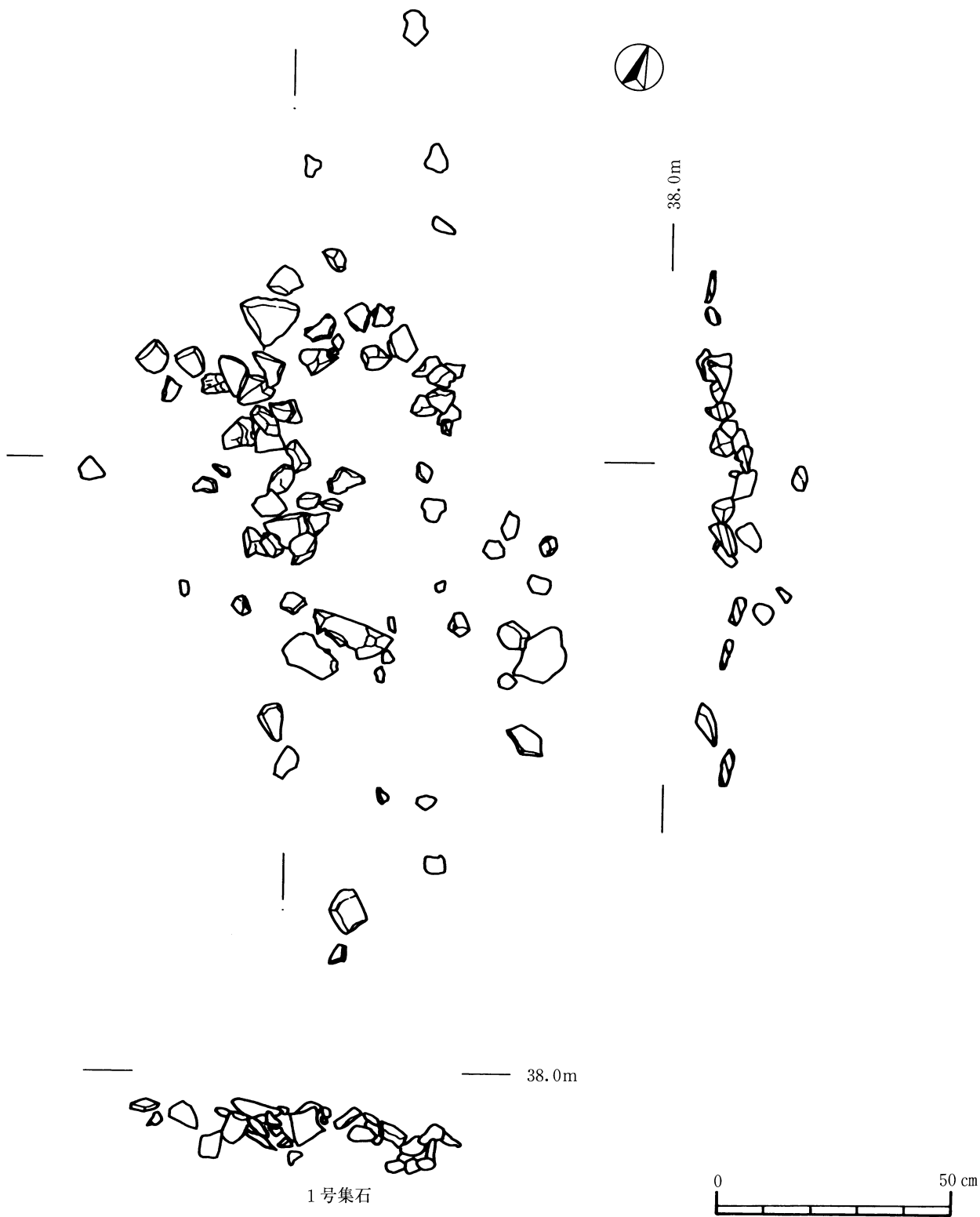
土坑4は土坑3の南東25mのA-5区にあり、東西方向に長軸を持ち、164cm×116cmを測る楕円形の土坑である。掘り込みは45cmで、埋土は下部が暗褐色土で上部は黒色土・黄澄パミス・白色微細軽石が混在しており、埋土中に安山岩角礫が20数点出土した。礫は土坑の中央部に集中し、一部は下部にもみられた。

土坑5

土坑5は土坑4に隣接し、やはり東西方向に長軸を持つ162cm×109cmを測る楕円形の土坑である。掘り込みはやや浅く、33cmを測る。埋土は黒色土で遺物等は出土しなかった。

土坑6

土坑6は土坑5の西20mのB-3区にあり、複合した土坑である。長軸が東西方向の140cm×78cmの隅丸方形の土坑と長軸200cmの不整形の土坑である。掘り込みは78cmと一番深く、埋土は黒褐色土であるが、遺物等は出土しなかった。



第11図 III層検出集石

土坑 7

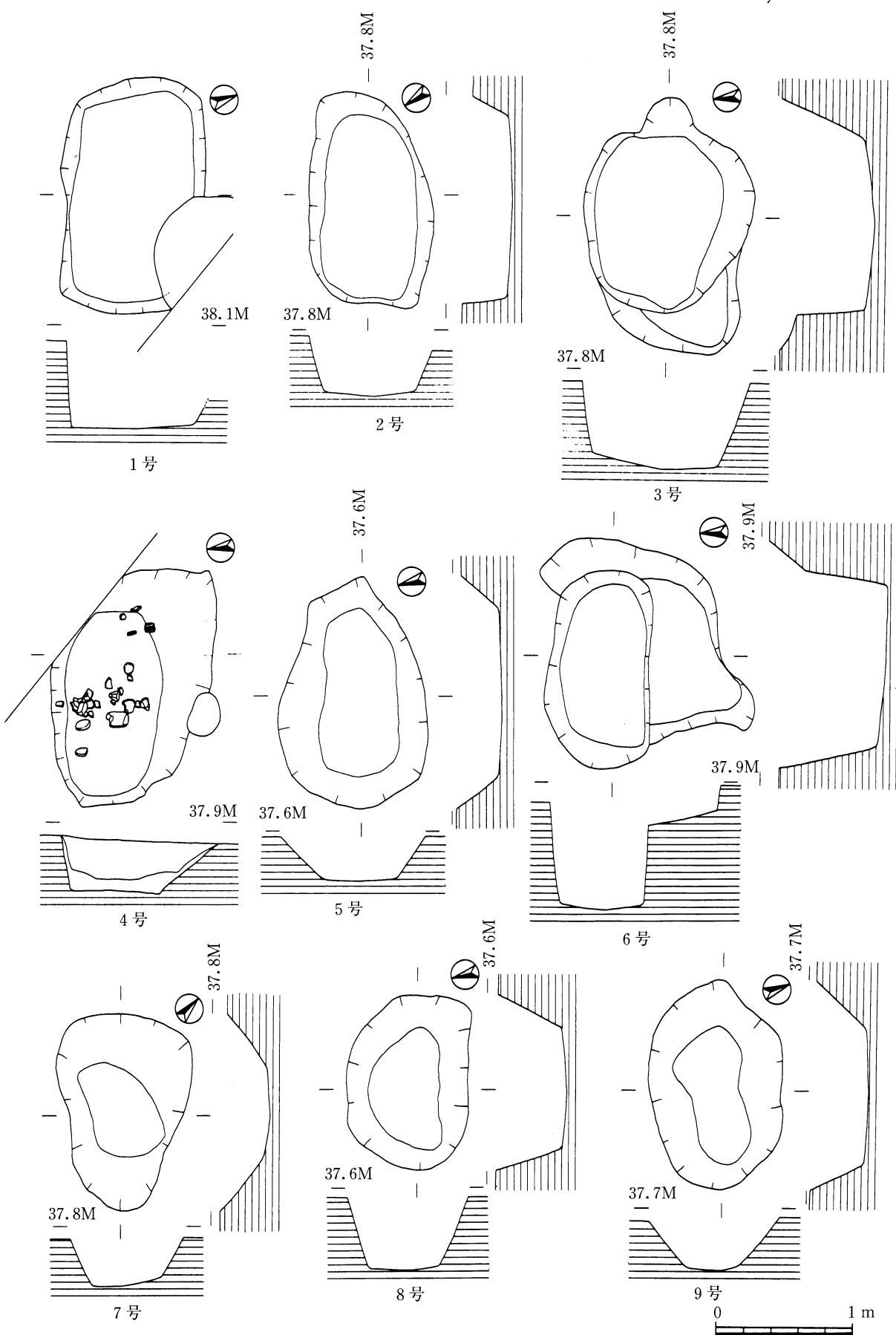
土坑 7 は土坑 6 の西 8 m の B - 3 区にあり、略台形を呈する土坑である。140cm×100cmを測り、掘り込みも35cmとやや浅いものである。埋土は黒色土であり、遺物等は出土しなかった。

土坑 8

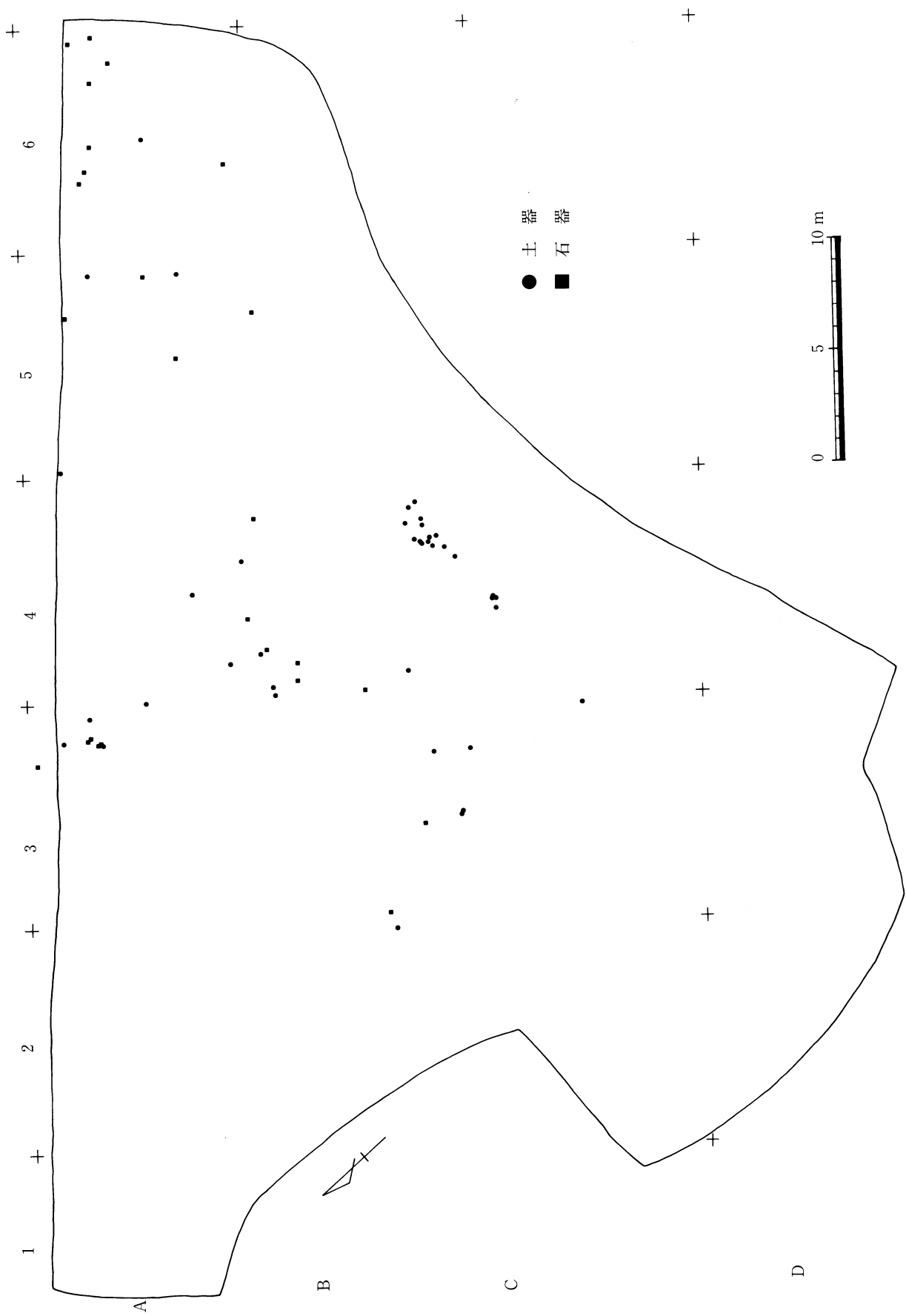
土坑 8 は土坑 7 の南 7 m の C - 3 区にあり、128cm×89cmの隅丸方形を呈する土坑である。掘り込みは52cmで、遺物等は検出されなかった。

土坑 9

土坑 9 は土坑 8 の南 2 m の C - 3 区にあり、長軸を東西方向に持つ141cm×98cmを測る楕円形の土坑である。掘り込みは38cmあり、埋土は黒褐色土で、遺物等は検出されなかった。



第12図 Ⅲ層検出土坑



第13図 Ⅲ層出土遺物分布図

2 早期の土器

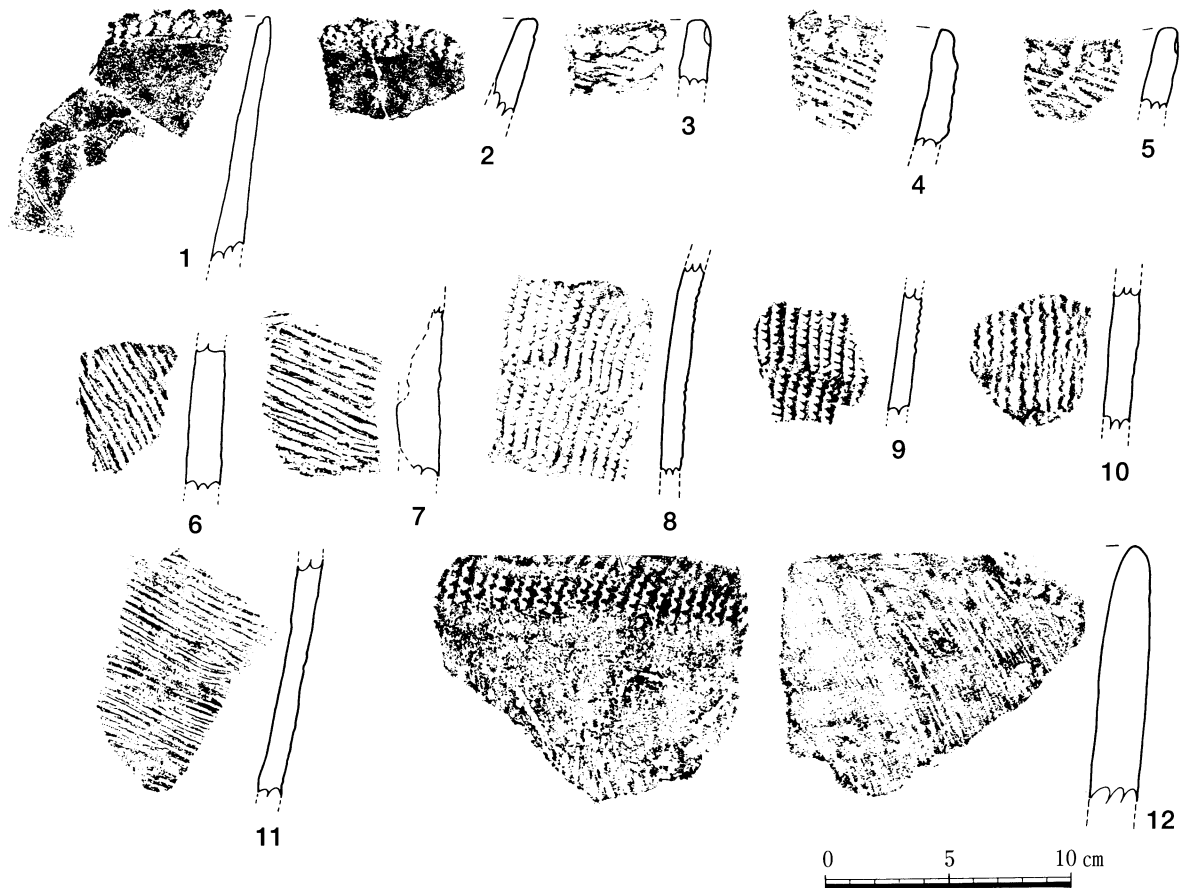
Ⅱ～Ⅲ層から出土の土器は小破片が多く、第13図の分布状況のように遺跡全体に点在して見られた。

I類土器（1，2）

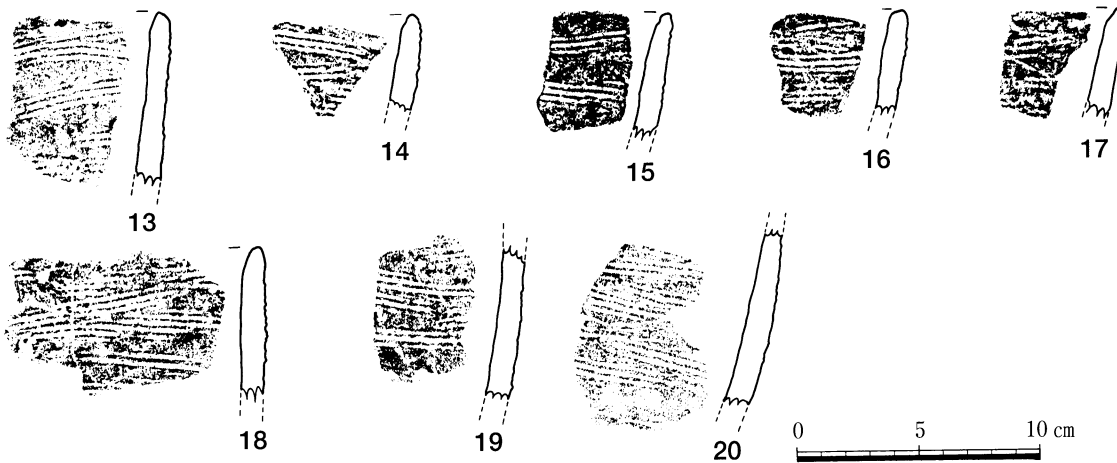
1と2は、胴部から直線的に外傾しながら口縁部に至っているものである。口唇部には貝殻腹縁の押圧による刻み目が施され、内面には段が見られる。仕上げは丁寧なミガキ仕上げである。これらの特徴からI類土器は岩本式土器であると思われる。

Ⅱ類土器（3～7，11，12）

口縁部に貝殻の押圧が連続して施文されており、胴部には貝殻条痕がやや斜めに施されている。胎土にパミスの小粒子が混入する。内面はナデ仕上げである。11は7と文様が類似しており、同じ系統の土器と考えられる。外面に煤の付着が見られ、内面はナデ仕上げである。12は貝殻腹縁の押圧が連続して縦方向に施されている口縁部で、口径は約40cmである。内面はハケ調整の後にナデ仕上げをしており、さらに化粧土で仕上げていることが土器断面の観察からわかる。これらⅡ類土器は前平式土器である。



第14図 縄文時代早期の土器(1)



第15図 縄文時代早期の土器(2)

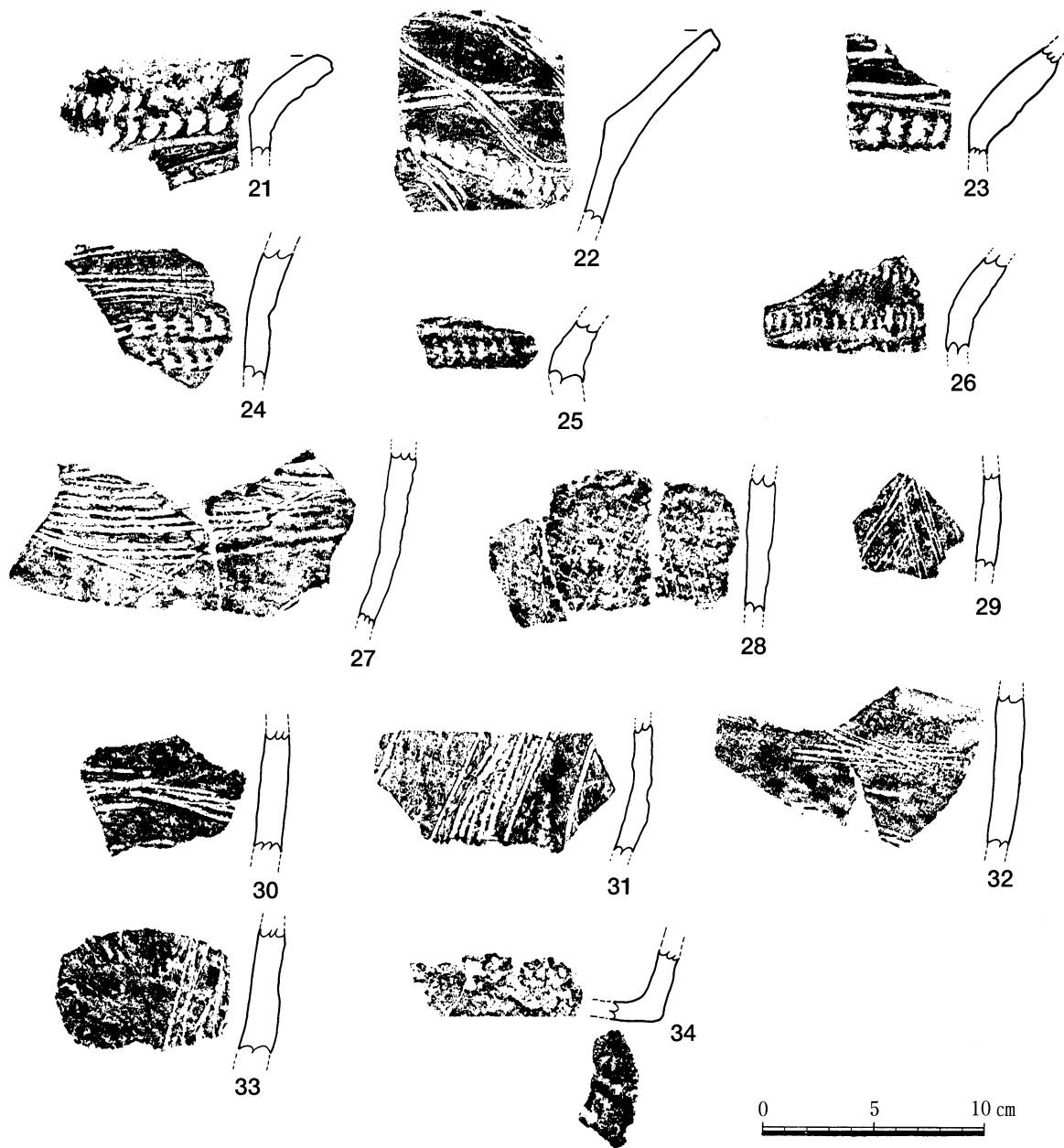
Ⅲ類土器 (8～10)

貝殻腹縁の押引文が連続して縦方向に施文されている。8はわずかに外反する円筒形土器の頸部であり、煤が薄く付着している様子が観察される。内面は丁寧なナデ仕上げである。9と10は煤が濃く付着していることから部位は胴部の下位付近と思われる。10は内面はナデ仕上げで煤が付着している。これらのⅢ類土器は吉田式土器の特徴を有している。

Ⅳ類土器 (13～52)

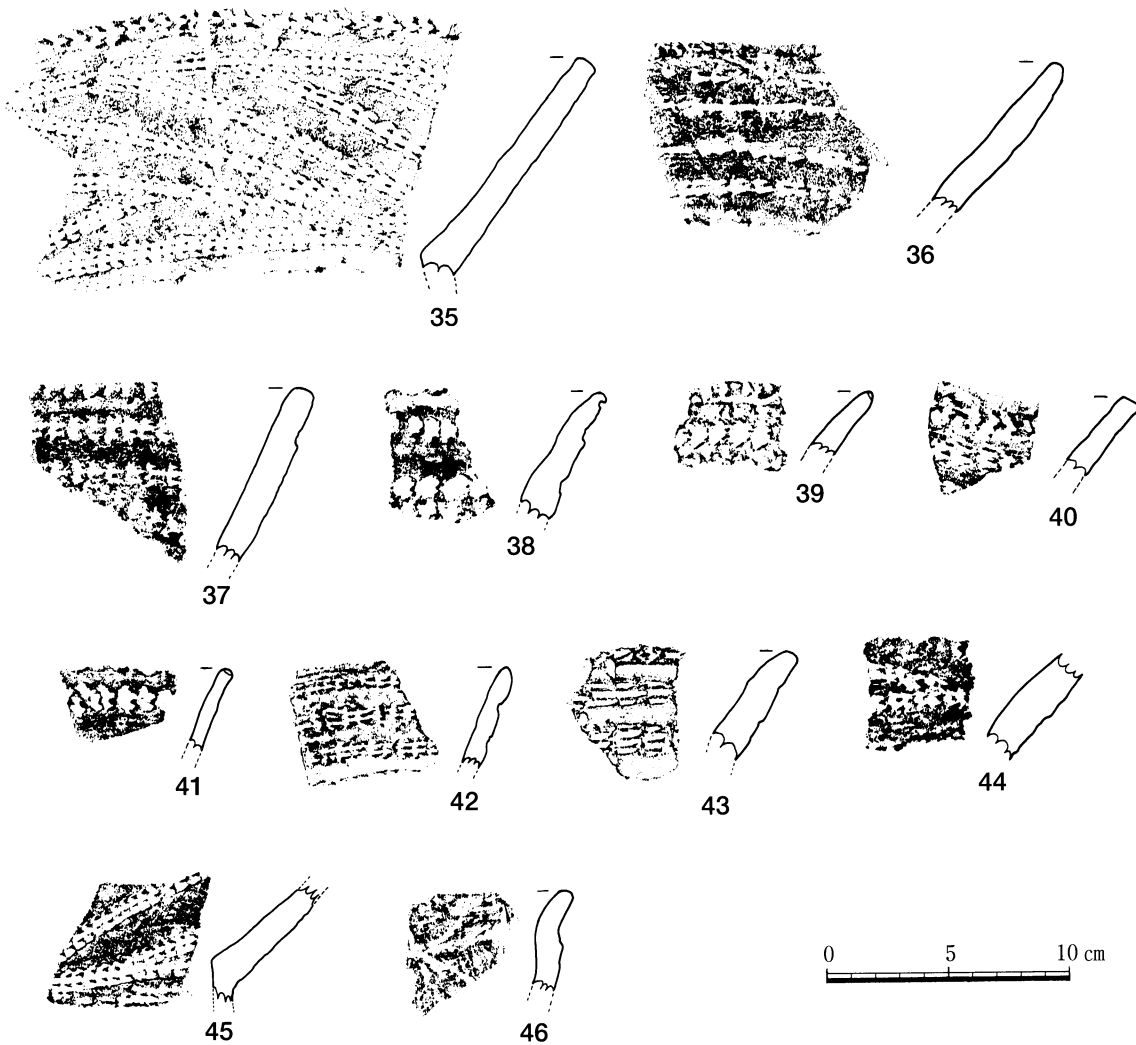
13～20は胴部からわずかに外反しながら口縁部に至っている土器群である。外面の文様は貝殻条痕文が数本単位で口縁部に対して水平に、あるいはやや斜めに施されている。口唇部には特徴的な形状変化は認められず、外面内面共にナデ仕上げをしている。

21は大きく外反した口縁部である。刺突が口唇部を含め3条施されており、その下位に沈線文がある。沈線文の断面形はV字状である。内面は丁寧なナデ仕上げである。22も21と同様に外反した口縁部である。口縁形態が波状であるか確認できない。口唇部に貝殻腹縁の刺突があり、その下位に貝殻の放射肋を利用した2条の平行沈線が斜格子状に施文されている。胴部上半には貝殻腹縁の刺突が巡らされており、その下位に再び2条の平行沈線が施されている。沈線の断面形は浅いU字状である。23は頸部の直上と思われる。数条の凹線文と1条の沈線が巡らされた下位に、施文具による刺突文が施されている。内面はナデ仕上げである。24は煤の付着が見られる頸部である。数条の沈線が巡らされた下位に、貝殻腹縁の刺突文が施されている。内面はナデ仕上げである。25と26は貝殻腹縁の刺突が巡らされている頸部である。27は胴部上半にあたると思われる。貝殻の放射肋を利用した沈線が口縁部と平行に数条ありその下位に1条の沈線が斜格子状に施文されている。煤の付着が見られ、胎土には小礫を含んでいる。28～32はいずれも深鉢の胴部の中央付近と思われ、沈線が口縁部と平行に、あるいは斜め(角度は多様)に施文されている。28は胎土に多くの小礫を含む。33は胴部の下位付近であると思われる。34は外面がかなり剥落した底部である。底径は約4.5cmを測る。35～46は貝殻腹縁の刺突のみが施文された土器であるが、文様には様々なヴァリ



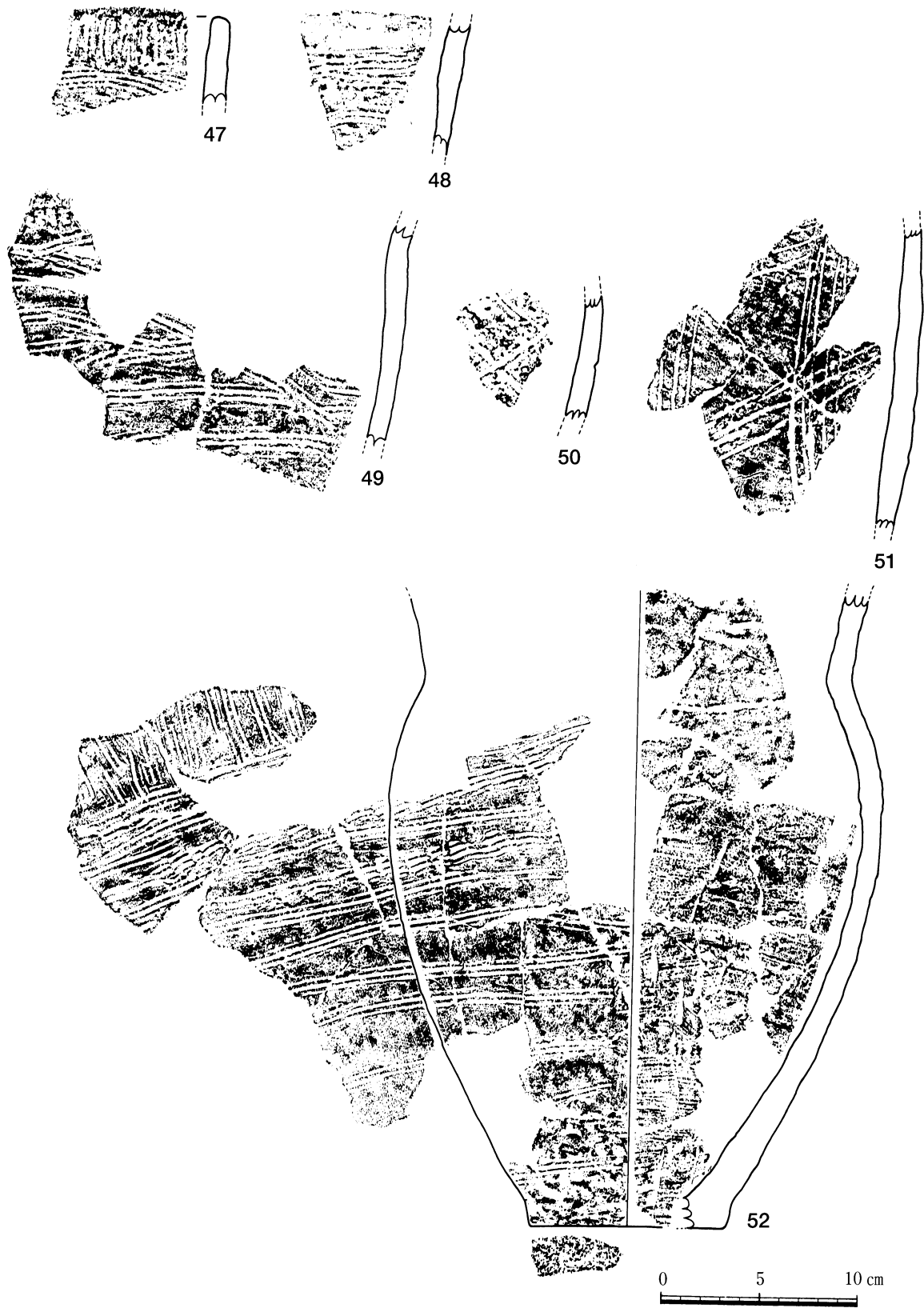
第16図 縄文時代早期の土器(3)

エーションがある。35は口唇部に貝殻腹縁で刺突を施し、口径は約44cmを測る。外面も刺突文が口縁部と平行に2条巡らしてあり、その間に同様の刺突文が右下がりに巡らしてある。内面はナデ仕上げである。36は貝殻腹縁の刺突文が口縁部と平行に4条施されている。口唇部には文様は施されていない。37~43, 46はいずれも口縁部であり、貝殻腹縁の刺突を口縁部と平行に数条巡らし、口唇部の上面や外面にも刺突を施しているのが特徴である。37は胎土に石英を多く含んでいるものである。42には煤の付着がある。焼成はいずれも良好で、内面はナデ仕上げである。44と45は頸部の直上部である。ともに35と同様の施文であると思われる。47は深鉢形の口縁部である。口唇部から胴部にかけて縦長の刻目文があり、その下に貝殻条痕を横方向に施文してある。時期は早期前半

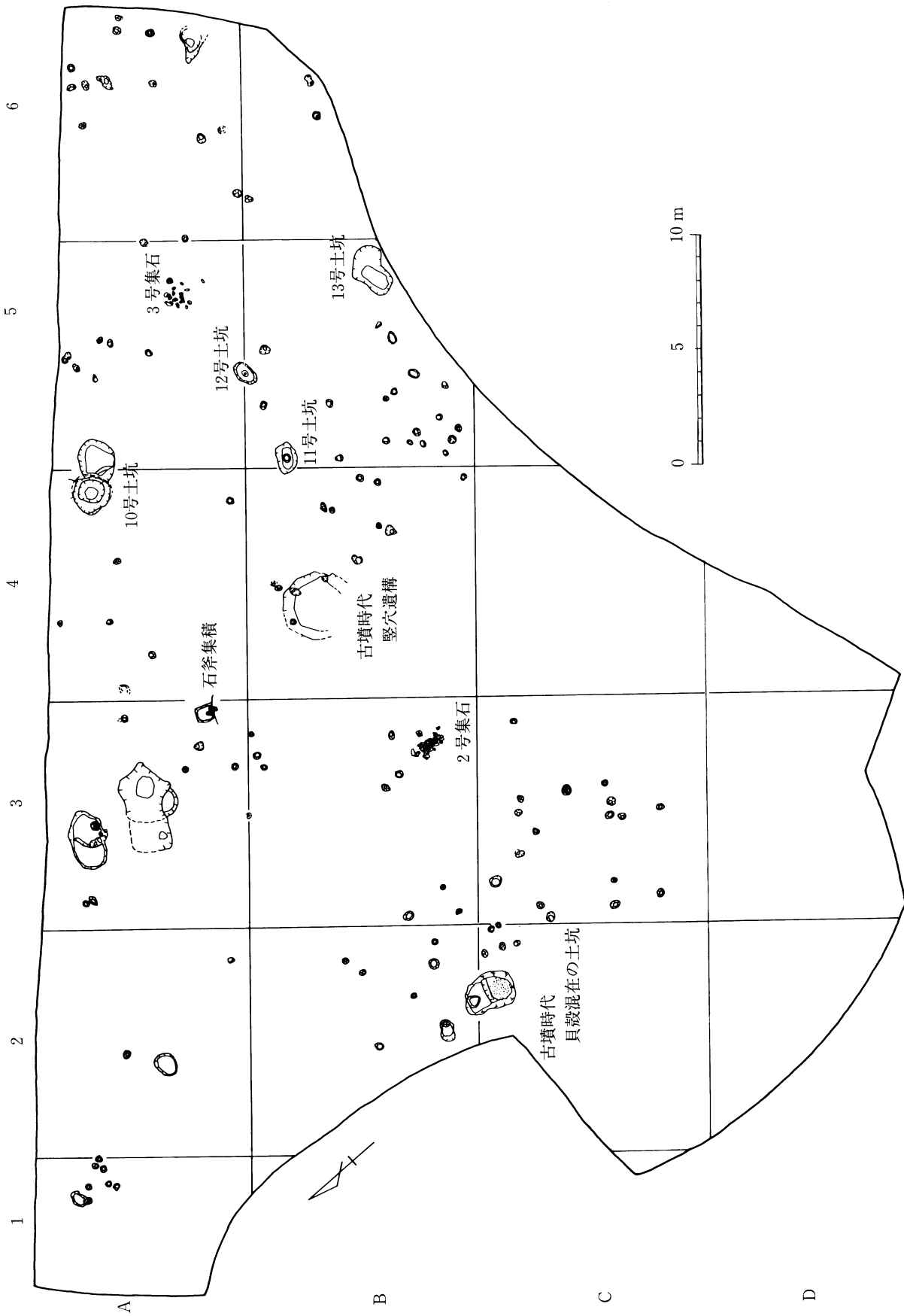


第17図 縄文時代早期の土器(4)

と考えられる。48は「く」の字状にくびれ、外反する深鉢の頸部直下の破片と考えられるものである。外面は数本単位で横位の沈線が施文してある。49は胴部の中央付近と思われ、施文については48と同じである。50, 51も胴部の中央付近と思われ、数本単位の沈線が斜めの格子状に施されている。51は外面に煤が色濃く付着している。胎土には小礫を多く含む。52は深鉢の口縁部下から底部にかけての部位である。口縁部下位の外反面は貝殻条痕が縦位に施され、頸部から胴部の中央付近までは貝殻押しと横位の3本単位の貝殻条痕が交互に繰り返されている。中央付近から底部にかけては3本単位の貝殻条痕が繰り返し施文され、内面はヘラ削りで器面調整されている。IV類土器は施文と器形から塞ノ神B式土器と考えられる。



第18図 縄文時代早期の土器(5)



第19図 II b 層検出遺構図

3 前期～晩期の遺構

Ⅱ b層検出の遺構は集石2基と土坑4基である。

集石 (第20図)

2号集石はB-3区で安山岩を主体にした角礫が30個、70cm×50cmの範囲に集中して検出された。炭化物・掘り込み等は見られなかったが、礫は焼成を受けて脆くなっている。

3号集石はA-5区でやはり安山岩礫を用いたものである。21個の礫が50cm内外の範囲に集中して見られた。やはり、炭化物、掘り込み等は見られなかった。

土坑 (第21図)

土坑10

土坑10は調査区域の一番小高い標高38.2mのA-4区で検出されたものである。180cm×167cmで深さ80cmの円形土坑と157cm×156cm、深さ53cmの円形土坑が複合したものである。

土坑11

土坑11は土坑10の南西9mのB-5区にあり、東西方向に長軸を持つ137cm×87cmの隅丸方形を呈する土坑である。掘り込みは46cmを測り、中央部に径35cm、深さ35cmの小ピットをもつもので、小ピット内及び土坑埋土は黄褐色土であり、遺物等は出土しなかった。

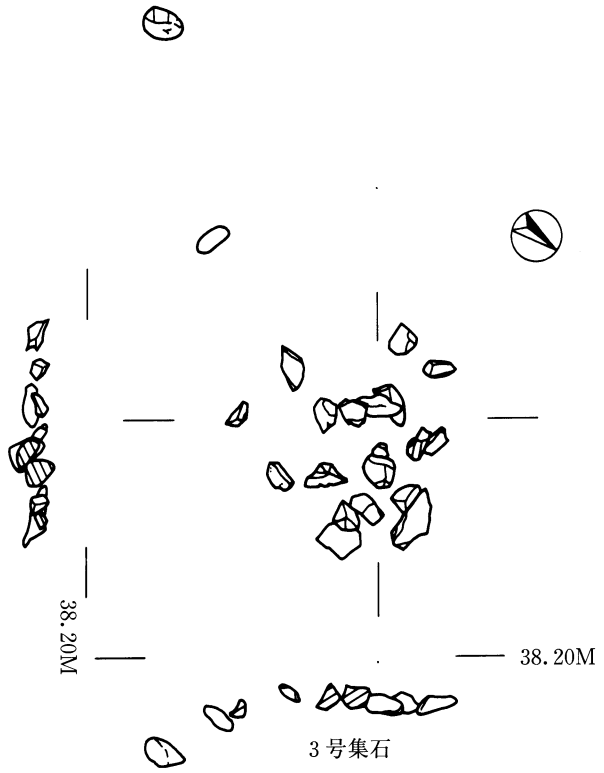
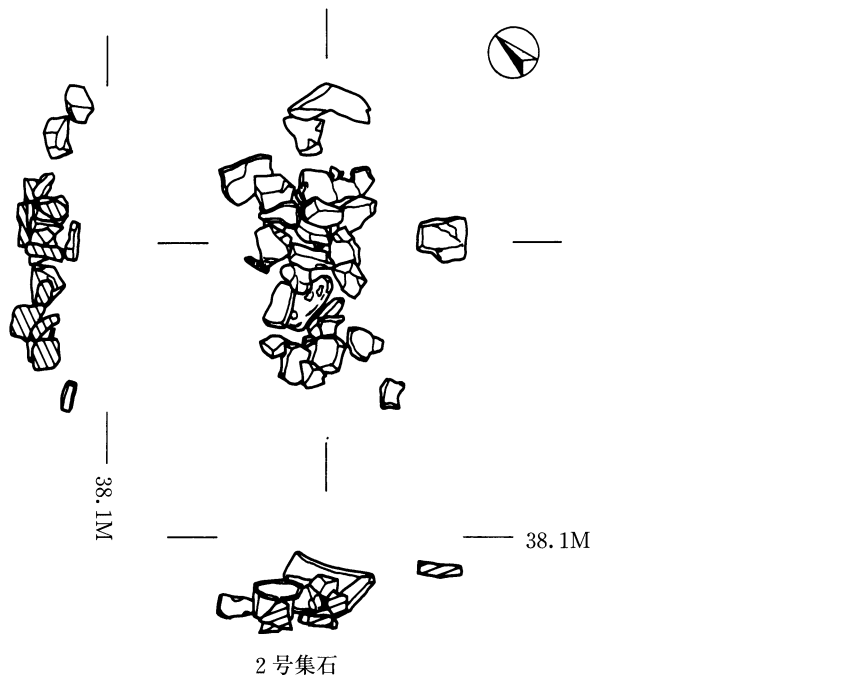
土坑12

土坑12は土坑11の東4mのA・B-5区にあり、土坑11同様の小ピットを有する土坑である。土坑は隅丸方形を呈し、114cm×68cmで深さ57cmである。中央部の小ピットは径24cm、深さ57cmで、やはり、黄褐色土の埋土である。

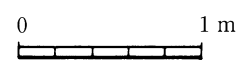
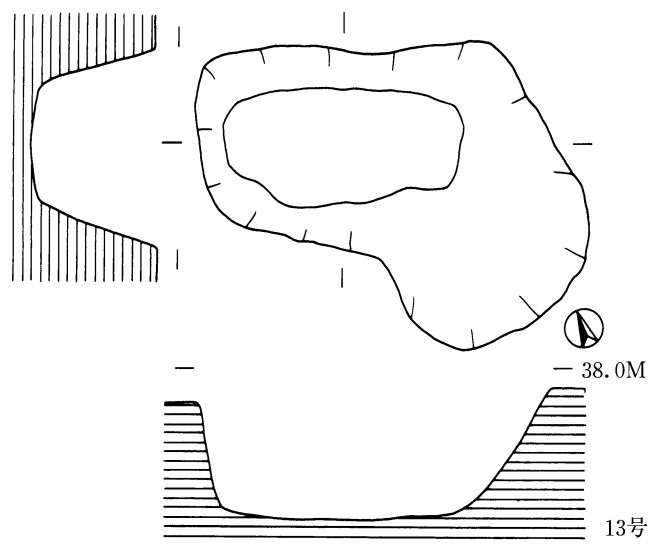
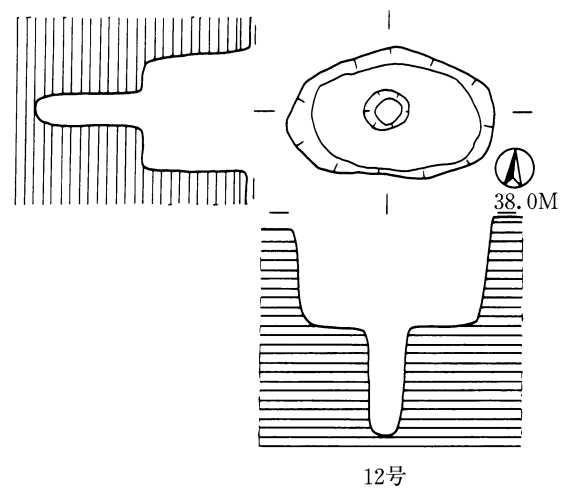
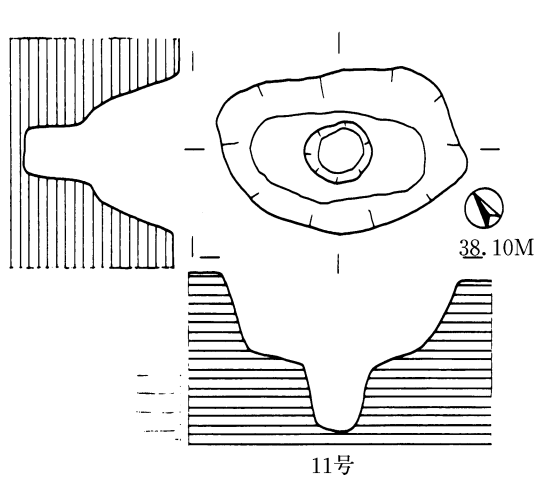
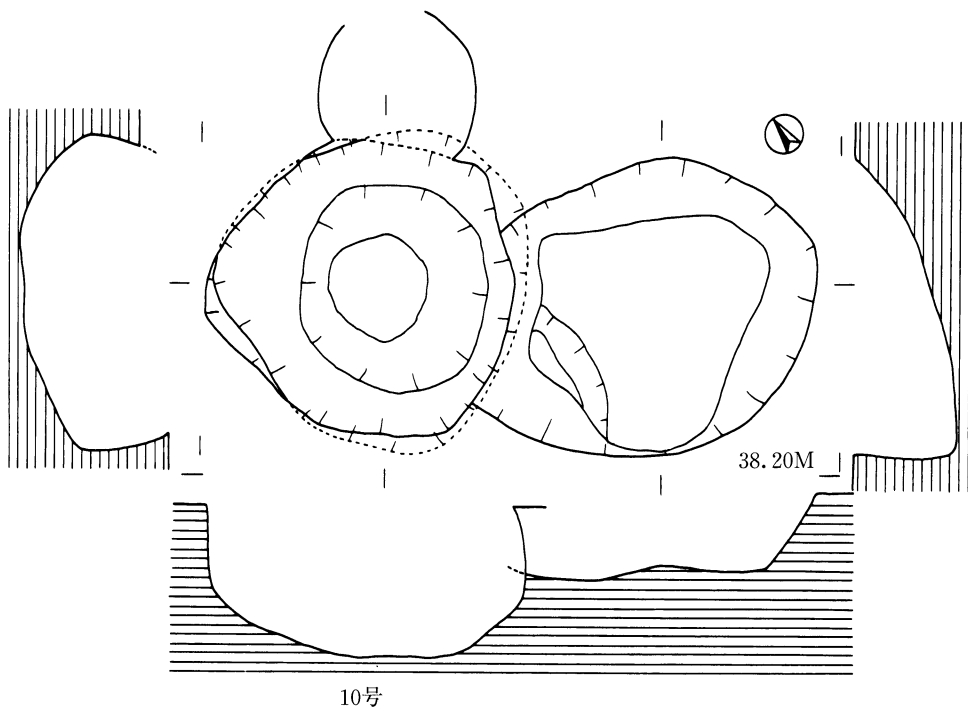
土坑11・12は第10図の地形図でわかるように、迫状の地形上にあり、逆茂木等の痕跡は見られなかったが、中央部の小ピットの位置等から落とし穴の可能性が高い。

土坑13

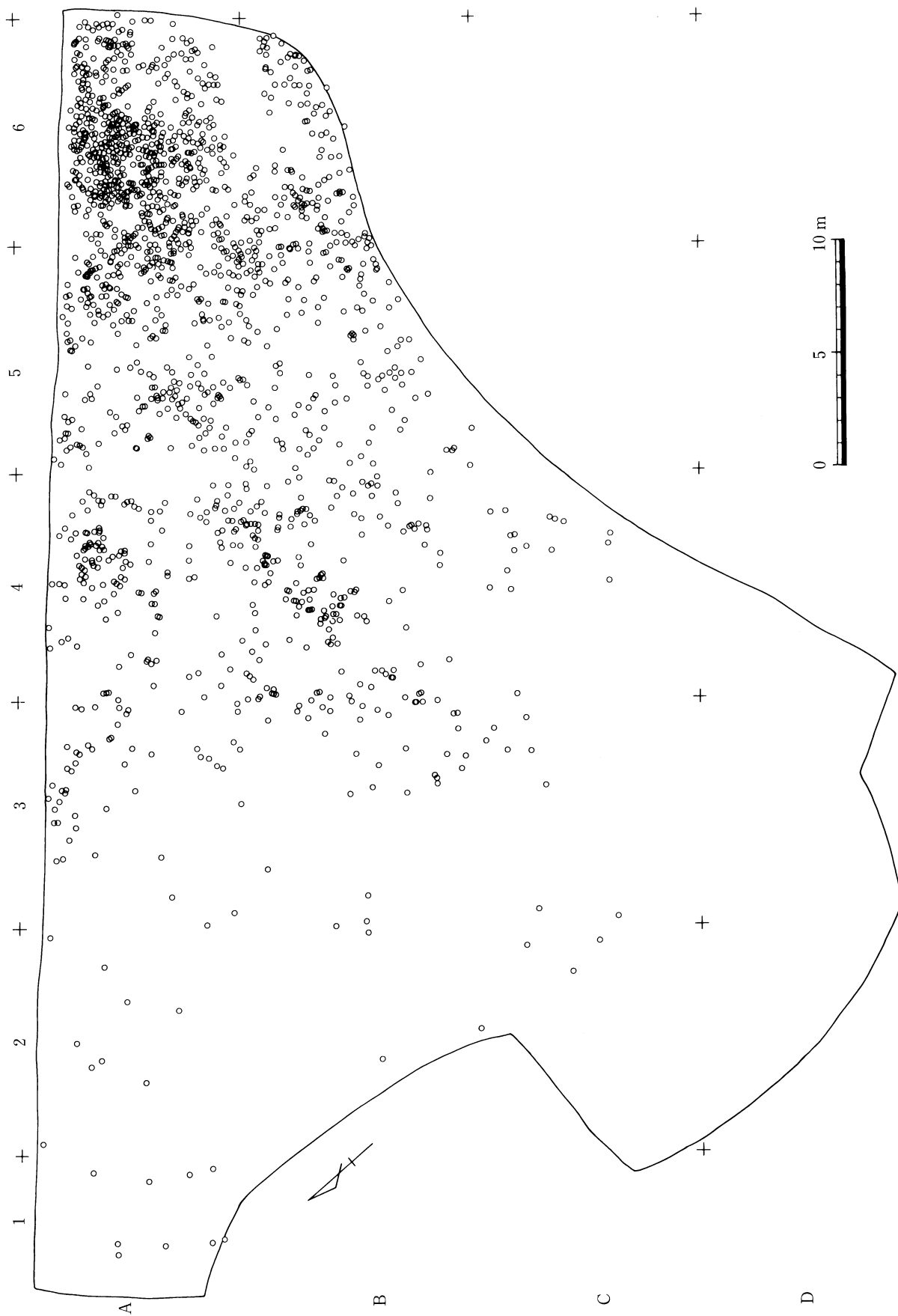
土坑13は土坑12の南7mのB-5区にある不整形の土坑である。東西方向に長軸を持ち、221cm×168cmで下面は隅丸方形を呈し、深さ68cmを測るものである。埋土は、黄褐色土・微細軽石・炭化物が混在していたが、遺物は出土しなかった。



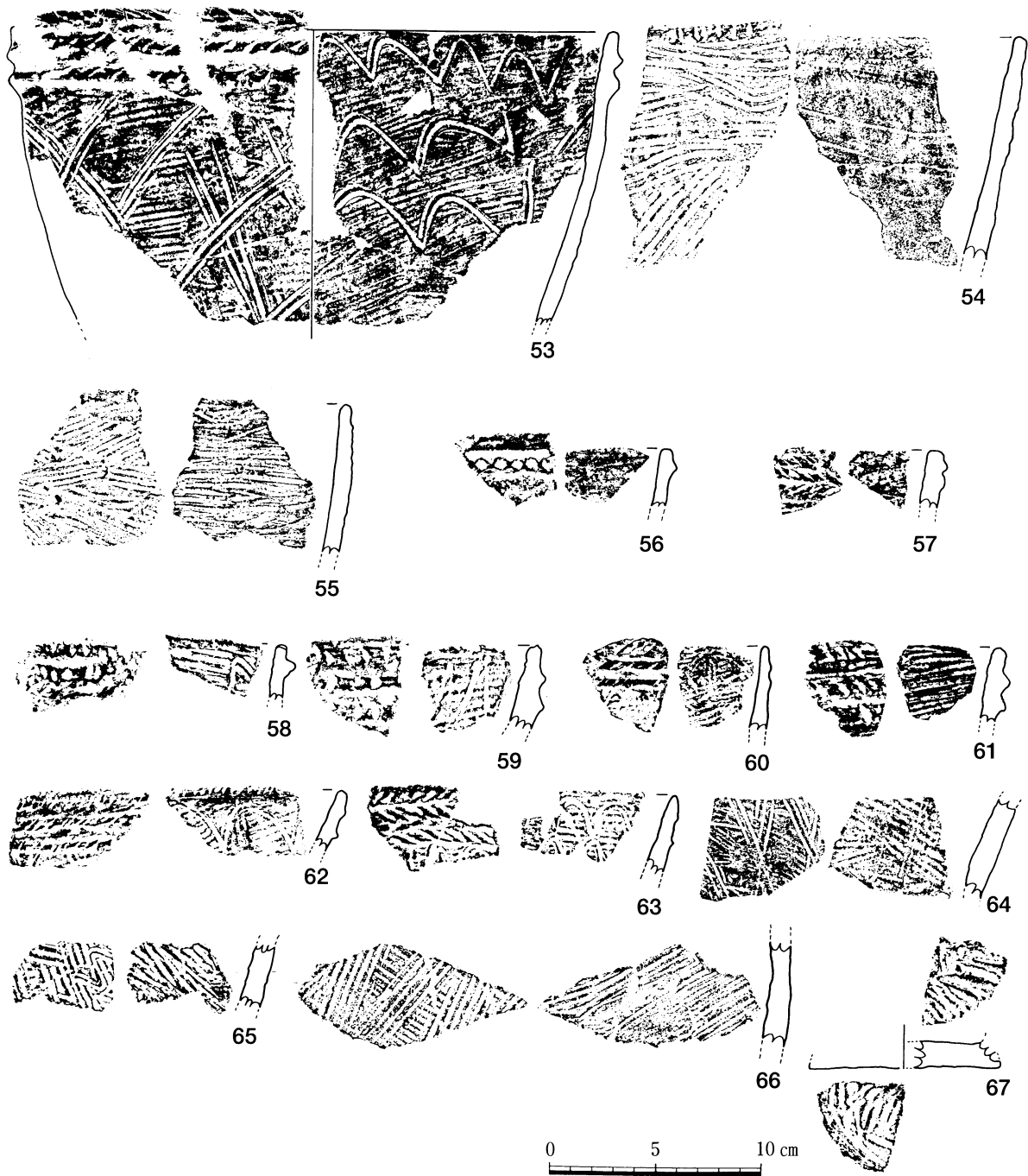
第20图 II b 層検出集石



第21图 II b層檢出土坑



第22图 II b 层出土遗物分布图



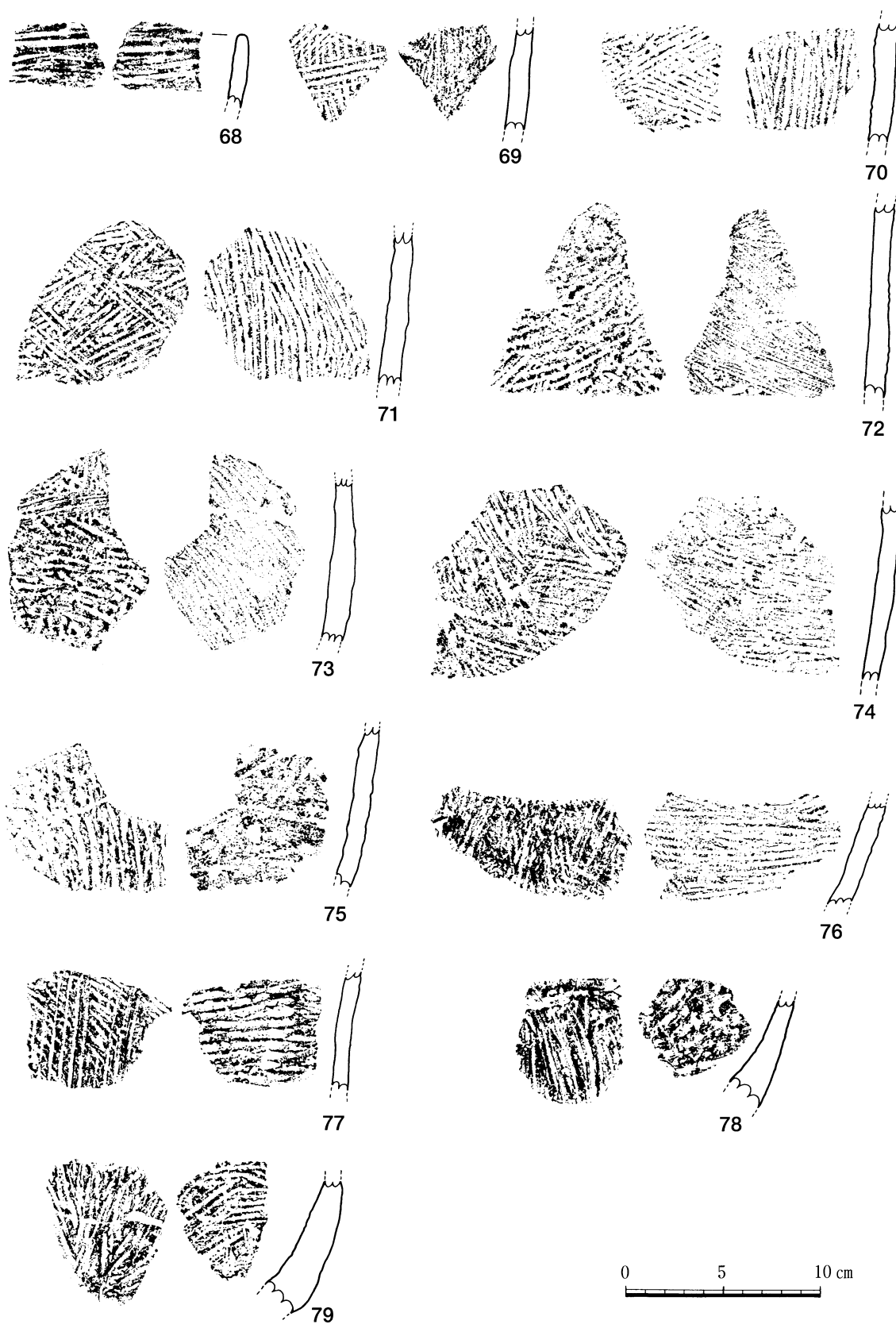
第23図 縄文時代前期～晩期の土器(1)

4 前期～晩期の土器

Ⅱ b層の遺物出土状況は、第22図のように遺跡の南東部に集中し、傾斜に沿って遺物が出土している。遺物は、縄文時代前期の轟式土器と縄文時代晩期の土器が中心であった。

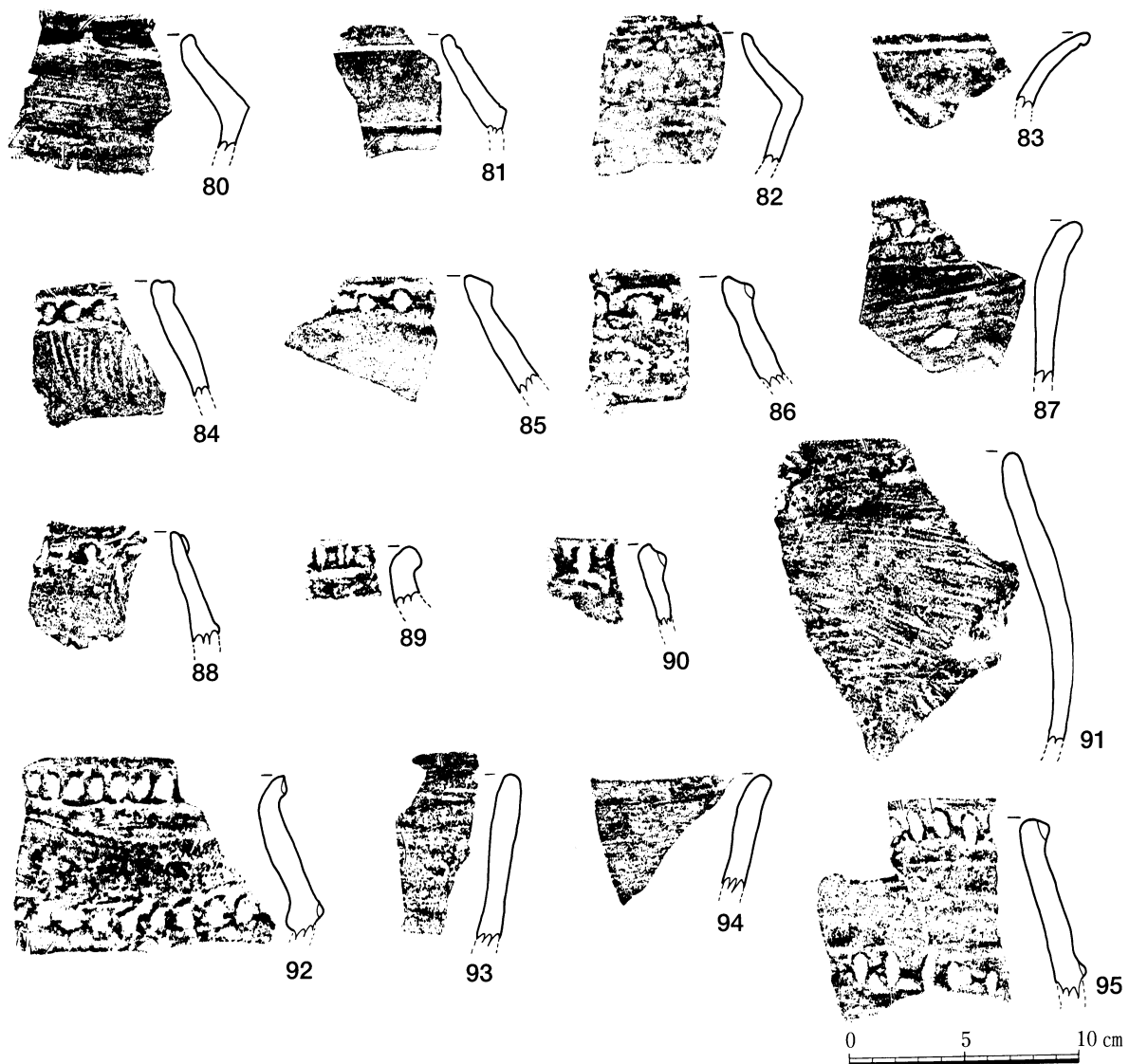
V類土器 (53～67)

これらの土器焼成はいずれも良好である。53は丸底の深鉢形土器と思われる。外面は口唇部に斜

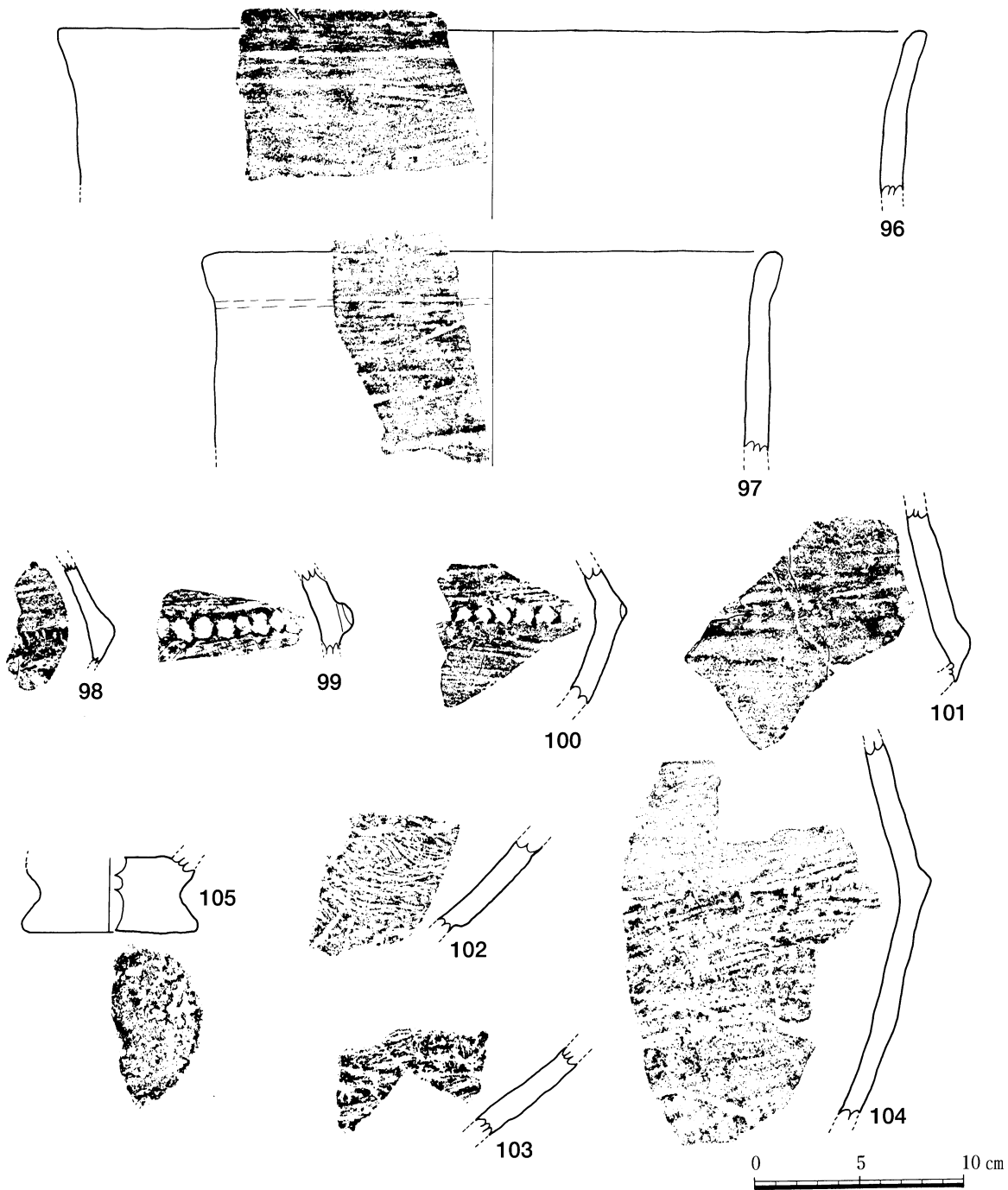


第24図 縄文時代前期～晩期の土器(2)

めに刻目を施し、その下位に口唇部とは逆向きの斜め方向の刻目を付けた突帯が2条巡らしてある。胴部は貝殻腹縁で器面調整をした後、3条の貝殻腹縁の条痕で菱形文様を構成している。内面は貝殻で器面調整をした後、2条の貝殻腹縁の条痕で波形の文様を表わしている。口径は約35cmを測る。54, 55は口唇部外側に刻み目を入れた深鉢である。胴部外面は貝殻条痕を様々な角度で斜行に施文してある。54の内面は丁寧なナデ仕上げであり、55は貝殻条痕で器面調整してある。時期は前期と考えられるが、型式は不明である。56~63はいずれも口縁部である。口唇部外側に刻み目を入れ、その下位に刻み目入りの突帯が1~2本巡らされている。刻み目の方向や突帯間の距離は様々である。内面調整については58, 59, 62, 63は53と同様であり、59の波形文様は鋭く高い。64~66は胴部である。内外面共に貝殻条痕文を横方向に巡らした後、さらに斜めに条痕で調整してある。67は同様な調整を施した底部であるが、胎土に砂粒を多く含む。54, 55を除くV類の土器は轟式土



第25図 縄文時代前期~晩期の土器(3)



第26図 縄文時代前期～晩期の土器(4)

器であると思われる。

VI類土器 (68～79)

貝殻条痕を規則性なく様々な角度で施文した土器である。68のみは条痕を施した後、内外面共にナデ仕上げしてある。そのほかは内面も条痕文で器面調整してあるが、全体的に粗い仕上げであるものの、焼成は良好である。72, 75, 76は胎土に砂粒を含み、77は雲母を含む轟式である。70, 71, 76, 78は内面に煤の付着が見られる。底部に近い79の外面は白く塗布されている。

68, 77以外のⅥ類の土器は轟式土器の系統と考えられる土器である。

Ⅶ類土器 (80~105)

80~86, 91は浅鉢の口縁部である。このうち81~83は精製土器で胎土にも砂粒等の混入が殆ど見られない。83はローリングを受けている。また内外面に黒色の研磨を施しているのは81, 82で, 80は外面にのみ黒色の研磨を施している。84~86は粗製で刻目突帯を有している。91は口縁部に文様がなく, 外面に煤が付着している。87~90, 92, 95は口唇部に刻目突帯のある深鉢の口縁部である。95の内面は丁寧なナデ仕上げがしてある。87は内外面ともヘラ状工具による横方向へのナデ仕上げである。93, 94は口縁部に文様がない。93は外面に炭化物が付着している。96~104は全て深鉢である。96, 97は93, 94と同様に文様のない口縁部で, 外面は横方向へのナデ仕上げが確認できる。98~101, 104は「く」字状に張る胴部の破片である。このうち98~100には刻目突帯が付いており, 残り2点は無文の突帯が付く。102, 103は蓆目圧痕が残る胴部の破片である。緯糸は整然としていない。105は深鉢の底部であるが, いわゆる円盤貼付けの底部である。Ⅶ類土器はいずれも形状はシンプルで施文がなく, 外見上の特徴としては突帯と蓆目圧痕ぐらいである。これは縄文晩期の土器の特徴といえる。

第4表 縄文土器観察表(1)

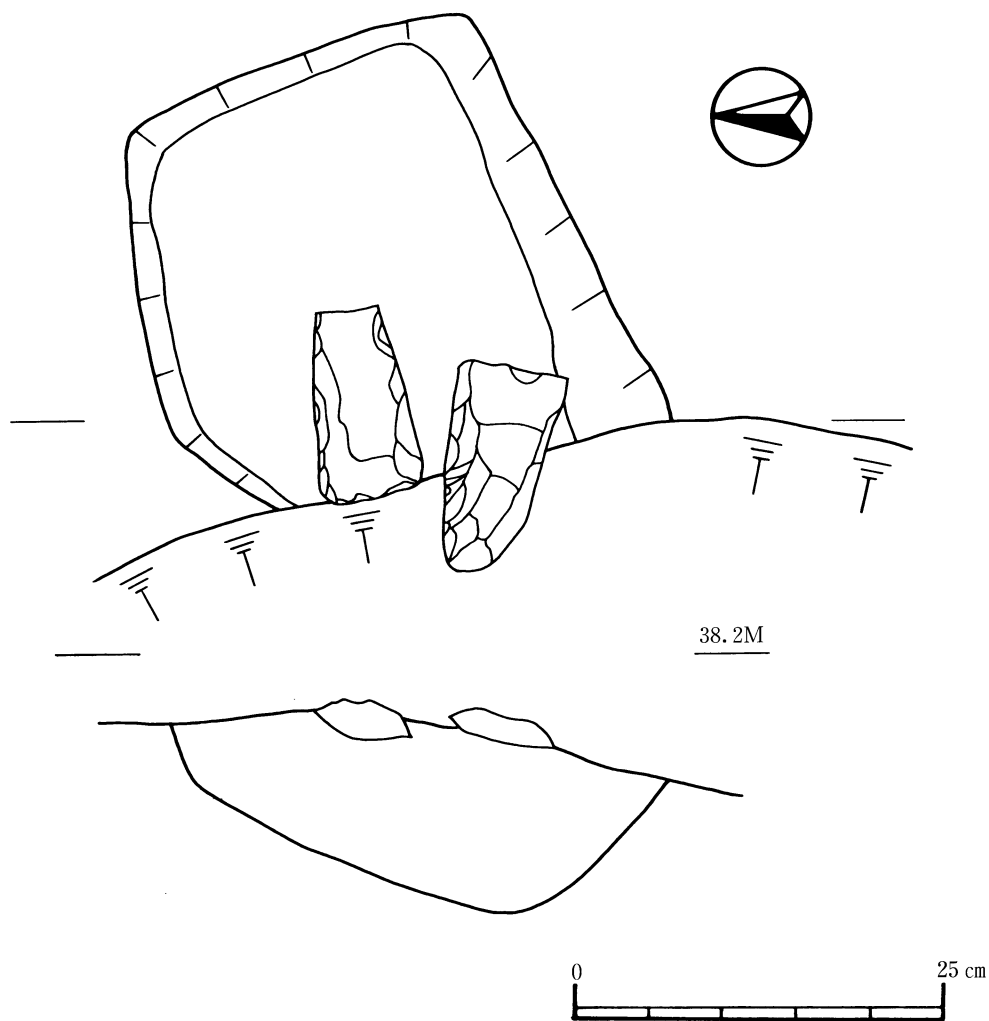
石英→Q, 長石→FL, 輝石→HY, 角閃石→HO, 雲母→B

番号	器種	出土区	層	遺物番号	分類	色調	胎土	調整	焼成	備考
1	深鉢	表探	表土	—	岩本式	薄茶褐色	Q	丁寧なナデ	良好	口縁部, 外面に木口状工具痕あり
2	深鉢	表探	表土	—	岩本式	薄茶褐色	Q	丁寧なナデ	良好	1と同一個体
3	深鉢	B-5	II b	—	前平式	明茶褐色	Q, HO	ナデ	良好	口縁部
4	深鉢	A-4	II b	—	前平式	明茶褐色	Q, HO	ナデ	良好	3と同一個体
5	深鉢	B-4	III	2278	前平式	明茶褐色	Q, HO	ナデ	良好	4と同一個体
6	深鉢	B-4	III	2281	前平式	明茶褐色	Q, HO	ナデ	良好	5と同一個体
7	深鉢	B-4	III	2286	前平式	明茶褐色	Q, HO	ナデ	良好	6と同一個体
8	深鉢	B-4	II b	1109	吉田式	薄茶褐色	FL, 礫	ナデ	良好	
9	深鉢	A-3	II b	—	吉田式	薄茶褐色	FL, 礫	ナデ	良好	8と同一個体
10	深鉢	B-5	II b	1913	吉田式	薄茶褐色	FL, 礫	ナデ	やや不良	内面に煤付着
11	深鉢	表探	表土	—	前平式	薄茶褐色	礫, パミス	ハケ→ナデ	良好	口縁部
12	深鉢	B-3	II b	6987	前平式	薄茶褐色	HY, パミス	ナデ	良好	
13	深鉢	B-4	II b	744	塞ノ神B式	明茶褐色	FL, 礫	ナデ	良好	口縁部
14	深鉢	B-4	II b	752	塞ノ神B式	明茶褐色	FL, 礫	ナデ	良好	13と同一個体
15	深鉢	B-4	II b	743	塞ノ神B式	明茶褐色	FL, 礫	ナデ	良好	14と同一個体
16	深鉢	B-4	II b	787	塞ノ神B式	明茶褐色	FL, 礫	ナデ	良好	15と同一個体
17	深鉢	B-4	II b	—	塞ノ神B式	明茶褐色	FL, 礫	ナデ	良好	16と同一個体, 竪穴状遺構より出土
18	深鉢	B-4	II b	745	塞ノ神B式	明茶褐色	FL, 礫	ナデ	良好	17と同一個体
19	深鉢	B-4	II b	786	塞ノ神B式	明茶褐色	FL, 礫	ナデ	良好	18と同一個体
20	深鉢	B-4	II b	787	塞ノ神B式	明茶褐色	FL, 礫	ナデ	良好	19と同一個体
21	深鉢	A-6	II b	1495	塞ノ神B式	明茶褐色	Q, HY, 礫	ナデ	良好	口縁部
22	深鉢	A-4	II b	971	塞ノ神B式	明茶褐色	Q, 礫	ナデ	良好	口縁部
23	深鉢	A-3	II b	2293	塞ノ神B式	淡茶褐色	Q, FL, HY	ナデ	良好	
24	深鉢	A-3	II b	2053	塞ノ神B式	淡茶褐色	Q, FL, HY, 砂粒	ナデ	良好	外面に煤の付着
25	深鉢	B-4	II b	1126	塞ノ神B式	明茶褐色	Q, FL, HY	ナデ	良好	
26	深鉢	A-6	II b	1681	塞ノ神B式	明茶褐色	Q, FL, HY, 砂粒	ナデ	良好	
27	深鉢	B-2	—	—	塞ノ神B式	明茶褐色	FL, HY, 礫	ナデ	良好	土壙1より出土, 煤の付着
28	深鉢	A-4	II a	432	塞ノ神B式	明茶褐色	FL, 礫	ナデ	やや不良	
29	深鉢	表探	表土	—	塞ノ神B式	灰茶褐色	Q, FL	ナデ	良好	
30	深鉢	A-4	II a	22	塞ノ神B式	茶褐色	Q, FL	ナデ	良好	外面に煤の付着
31	深鉢	A-5	II b	335	塞ノ神B式	茶褐色	Q, FL	ナデ	良好	
32	深鉢	A-1	II b	989	塞ノ神B式	灰茶褐色	Q	ナデ	良好	
33	深鉢	A-6	II b	1797	塞ノ神B式	明茶褐色	Q, HY, 礫	ナデ	良好	
34	深鉢	B-4	II b	2189	塞ノ神B式	茶褐色	Q, FL	ナデ	良好	内面に煤の付着, 底部
35	深鉢	A-6	II b	1708	塞ノ神B式	灰茶褐色	FL	ナデ	良好	口縁部
36	深鉢	表探	表土	—	塞ノ神B式	明茶褐色	FL	ナデ	良好	口縁部
37	深鉢	表探	表土	—	塞ノ神B式	灰茶褐色	Q, 砂粒	ナデ	やや不良	口縁部, 石英を多く含む
38	深鉢	B-6	II b	2014	塞ノ神B式	灰茶褐色	Q, FL	ハケ→ナデ	良好	口縁部
39	深鉢	B-5	II b	2078	塞ノ神B式	明茶褐色	FL, 砂粒	ナデ	良好	口縁部
40	深鉢	A-4	II b	977	塞ノ神B式	明茶褐色	FL	ナデ	良好	口縁部
41	深鉢	A-4	II b	756	塞ノ神B式	灰茶褐色	FL, 礫	ナデ	良好	口縁部
42	深鉢	B-4	II b	1466	塞ノ神B式	灰茶褐色	FL, 砂粒	ナデ	良好	口縁部, 外面煤の付着
43	深鉢	A-4	II b	943	塞ノ神B式	灰茶褐色	Q, パミス	ナデ	良好	口縁部
44	深鉢	A-6	II b	1819	塞ノ神B式	灰茶褐色	Q	ナデ	良好	
45	深鉢	表探	表土	—	塞ノ神B式	淡茶褐色	Q	ナデ	良好	頸部
46	深鉢	A-4	II b	944	塞ノ神B式	淡茶褐色	Q, FL, 砂粒	ナデ	良好	口縁部
47	深鉢	表探	表土	—	不明	暗茶褐色	Q	条痕	良好	口縁部
48	深鉢	B-4	II b	703	塞ノ神B式	明茶褐色	Q, 砂粒	ナデ	良好	
49	深鉢	B-5	II b	2315	塞ノ神B式	明茶褐色	Q, 砂粒	ナデ	良好	
50	深鉢	C-4	II b	1921	塞ノ神B式	明茶褐色	Q, 砂粒	ナデ	良好	
51	深鉢	A-4	II b	988	塞ノ神B式	暗茶褐色	Q, FL, 礫	ナデ	良好	外面煤の付着
52	深鉢	B-4	II b	2340	塞ノ神B式	明茶褐色	Q	ナデ	良好	

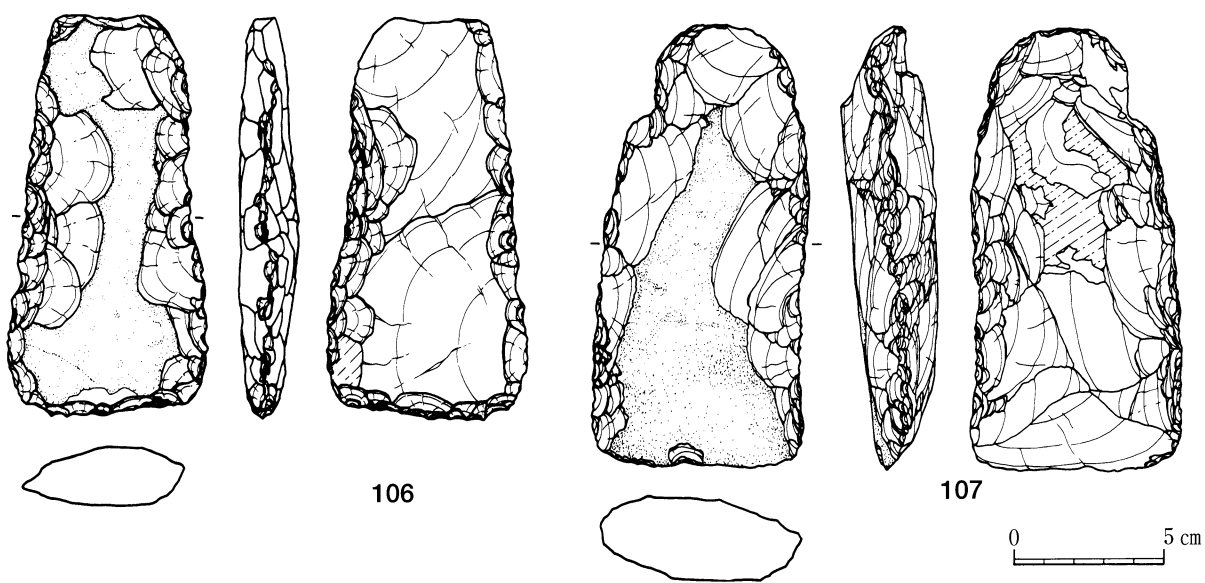
第5表 縄文土器観察表(2)

石英→Q,長石→FL,輝石→HY,角閃石→H0,雲母→B

番号	器種	出土区	層	遺物番号	分類	色調	胎土	調整	焼成	備考
53	深鉢	A-6	II b	458	縄式	暗茶褐色	Q, パミス	条痕→ナデ	良好	内外面煤の付着
54	深鉢	A-4	II b	755	不明	暗茶褐色	Q	条痕	良好	口縁部
55	深鉢	表採	表土	—	不明	暗茶褐色	Q, FL	条痕	良好	口縁部
56	深鉢	B-4	II b	1467	縄式	暗茶褐色	Q	ナデ	良好	口縁部
57	深鉢	B-6	II b	—	縄式	明黄褐色	Q	ナデ	良好	口縁部
58	深鉢	B-6	II b	1998	縄式	暗黒褐色	Q, 砂粒	ナデ	良好	口縁部
59	深鉢	A-5	II a	—	縄式	灰茶褐色	Q, 礫	ナデ	良好	口縁部
60	深鉢	B-6	II b	2071	縄式	明灰褐色	Q, 砂粒	ナデ	良好	口縁部
61	深鉢	B-5	—	—	縄式	暗茶褐色	Q, FL, 砂粒	ナデ	良好	口縁部, 54号ピットより出土
62	深鉢	B-6	II b	2017	縄式	暗茶褐色	パミス	ナデ	良好	口縁部, 煤の付着
63	深鉢	B-4	II b	789	縄式	灰茶褐色	Q, 砂粒	ナデ	良好	口縁部
64	深鉢	B-6	II b	2073	縄式	明灰褐色	Q, 砂粒	条痕	良好	内外面煤の付着
65	深鉢	A-6	II b	1275	縄式	暗黒褐色	Q, 砂粒	条痕	良好	
66	深鉢	A-5	II a	136	縄式	暗黒褐色	Q, FL	条痕	良好	
67	深鉢	A-5	II b	1187	縄式	灰茶褐色	Q, 砂粒	条痕	良好	底部, 内外面煤の付着
68	深鉢	表採	表土	—	縄式	暗茶褐色	Q, FL	条痕→ナデ	良好	口縁部
69	深鉢	A-6	II b	1838	縄系統	明赤褐色	Q, HY	条痕	良好	
70	深鉢	A-5	II b	175	縄系統	明茶褐色	Q, FL, 砂粒	条痕	良好	内面煤の付着
71	深鉢	B-6	II b	1742	縄系統	明茶褐色	Q, FL, 砂粒	条痕	良好	内面煤の付着, 70と同一個体
72	深鉢	A-5	II b	1444	縄系統	明茶褐色	Q, FL, 礫	条痕→ナデ	良好	
73	深鉢	A-6	II b	1456	縄系統	明茶褐色	Q, FL, 礫	条痕→ナデ	良好	72と同一個体
74	深鉢	A-6	II b	2146	縄系統	明茶褐色	Q, FL, 礫	条痕	良好	
75	深鉢	B-4	II a	—	縄系統	明茶褐色	Q, FL, 礫	条痕	良好	74と同一個体
76	深鉢	B-6	II a	102	縄系統	淡茶褐色	Q, 礫	条痕→ナデ	良好	内面煤の付着
77	深鉢	B-3	II b	2245	縄式	淡茶褐色	FL, 礫, B	条痕	良好	
78	深鉢	A-6	II b	1696	縄系統	明茶褐色	Q, FL, 礫	条痕	良好	75と同一個体
79	深鉢	A-6	II b	1296	縄系統	灰茶褐色	Q, 砂粒	条痕	良好	外面に白色物塗彩
80	浅鉢	表採	表土	—	晩期	黒色	Q, パミス	磨研	良好	口縁部, 外面に黒色磨研
81	浅鉢	表採	表土	—	晩期	黒色	Q	磨研	良好	口縁部, 精製, 内外面に黒色研磨
82	浅鉢	A-6	II b	490	晩期	黒色	Q	磨研	良好	口縁部, 精製, 内外面に黒色研磨
83	浅鉢	表採	表土	—	晩期	灰茶褐色	Q	磨研	良好	口縁部, 精製
84	浅鉢	A-6	II b	459	晩期	明茶褐色	Q	ナデ	良好	口縁部
85	浅鉢	B-6	II a	43	晩期	明茶褐色	Q	ナデ	良好	口縁部, 内外面煤の付着
86	浅鉢	A-6	II a	451	晩期	明茶褐色	パミス	ナデ	良好	口縁部, 内外面煤の付着
87	深鉢	—	II a	123	晩期	茶褐色	Q, パミス	ヘラ横ナデ	良好	口縁部
88	深鉢	B-5	II a	78	晩期	茶褐色	Q, FL	ナデ	良好	口縁部
89	深鉢	A-5	II b	—	晩期	茶褐色	Q, 砂粒	ナデ	良好	口縁部
90	深鉢	B-5	II a	61	晩期	淡茶褐色	Q, 砂粒	ナデ	良好	口縁部
91	浅鉢	表採	表土	—	晩期	茶褐色	Q, 砂粒	ヘラ横ナデ	良好	口縁部, 外面煤の付着
92	深鉢	B-6	II a	103	晩期	淡黒褐色	Q, パミス	ナデ	良好	口縁部
93	深鉢	表採	表土	—	晩期	茶褐色	Q, 砂粒	ヘラ横ナデ	良好	口縁部, 外面煤の付着
94	深鉢	表採	表土	—	晩期	灰茶褐色	Q, 砂粒	ヘラ横ナデ	良好	口縁部
95	深鉢	B-5	II b	548	晩期	灰茶褐色	Q, 砂粒	ナデ	良好	口縁部
96	深鉢	A-5	II a	181	晩期	茶褐色	Q, 砂粒, 礫	ナデ	良好	口縁部, 外面煤の付着
97	深鉢	A-6	II a	302	晩期	灰茶褐色	Q, 砂粒	ヘラ横ナデ	良好	口縁部
98	深鉢	A-6	II a	197	晩期	暗茶褐色	Q, パミス	ナデ	良好	
99	深鉢	表採	表土	—	晩期	暗茶褐色	Q, 砂粒	ヘラ横ナデ	良好	
100	深鉢	B-4	II b	1130	晩期	灰茶褐色	Q, 砂粒, 礫	ヘラ横ナデ	やや不良	
101	深鉢	A-6	II a	209	晩期	淡茶褐色	Q, 砂粒, 礫	ヘラ横ナデ	良好	
102	深鉢	表採	表土	—	晩期	明茶褐色	Q, 砂粒	ナデ	良好	外面に組織痕
103	深鉢	表採	表土	—	晩期	明茶褐色	Q, 砂粒	ナデ	良好	102と同一個体
104	深鉢	A-5	II a	181	晩期	淡茶褐色	Q, 砂粒	ヘラ横ナデ	良好	外面煤の付着
105	深鉢	B-6	II a	105	晩期	淡茶褐色	Q, 砂粒	ナデ	良好	底部



第27図 石斧デポ (集積) 遺構



第28図 石斧(1)

5 石斧デポ（集積）遺構（第27・28図，106～112）

B-4区Ⅱb層埋土の土坑から打製石斧が2点出土した。また攪乱を受けている西側のみかん畑の攪乱土坑内から5点が出土した。土坑は残存している長径が60cm，短径60cmの方形で，深さは20cmを測る。埋土は黄褐色土である。土坑内から出土した2点と攪乱土坑から出土した5点は類似点が多く，この7点が土坑内に集積されていたものと想定される。

106・107は頁岩を素材に用いた短冊状の打製石斧である。側辺部を左右側縁からの平坦な荒い調整によって，厚みを取り除くように全面を加工したものである。108も同様のものであるが，刃部が一部研磨され，局部磨製石斧である。109は基部が鋭利で刃部が広がる磨製石斧である。全周調整剥離により形成されている。110は一部厚みを残したままのものであるが，他のもの同様荒い調整剥離を加えて整形されている。111は粘板岩を素材にしたもので，112は安山岩を素材に用いている。

6 石器

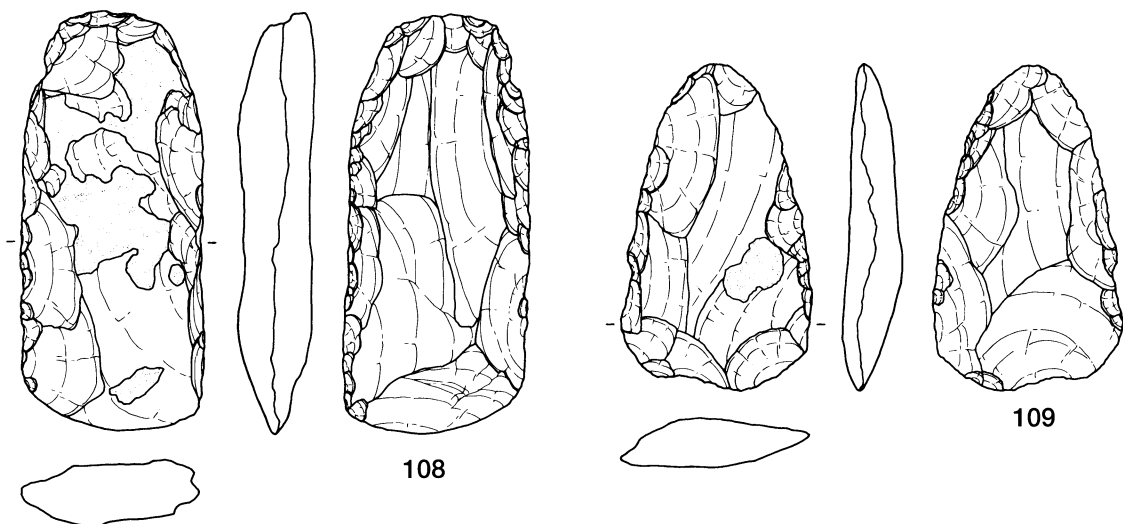
石器は三稜尖頭器・石鏃・石槍・石匙・スクレイパー・石斧・双角状石器・礫器・敲石・凹石・磨石・石皿・剥片など多種多様なものが出土した。また，石材については黒曜石・ハリ質安山岩・鉄石英・頁岩・安山岩・砂岩がみられた。

三稜尖頭器（113）

113は上牛鼻原産の黒曜石で，厚みのある横長剥片を素材にしている三稜尖頭器である。一面に剥離面をもち，二面に調整剥離のあるもので先端部と基部は欠損している。Ⅱb層からの出土であるが旧石器時代の遺物である。

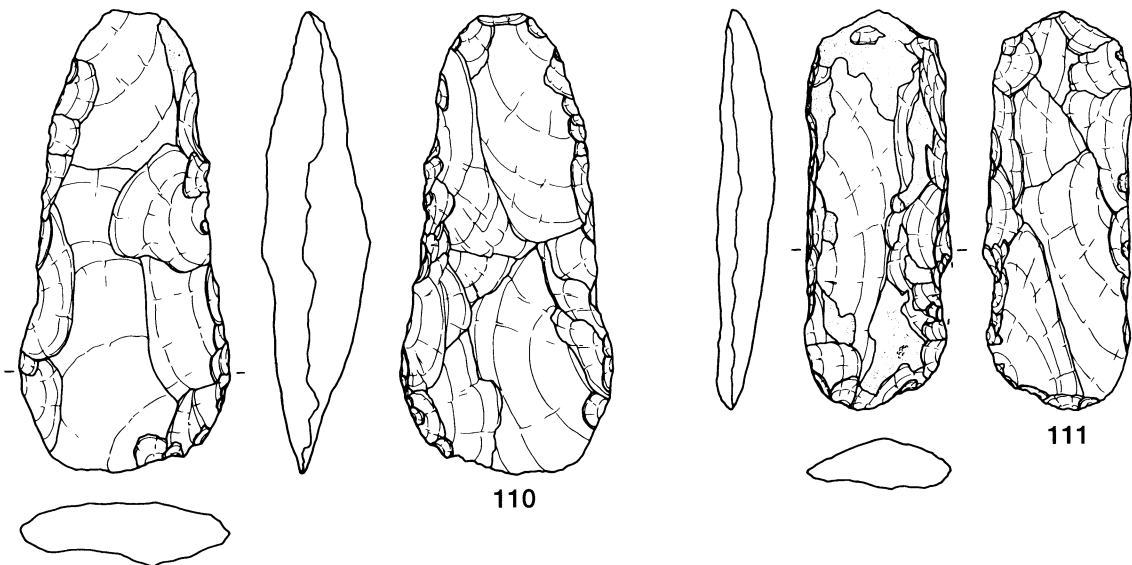
石鏃（114～151）

114は腰岳の黒曜石を石材に用い先端部は欠損しているが，側辺は鋸歯状を呈し，まっすぐで三角形である。基部は抉りが深い。115は先端部は欠損しているが側辺は鋸歯状を呈し，基部の逆刺が鈍く抉りが極めて深いものである。針尾の黒曜石を素材に用いている。116は上牛鼻の黒曜石を用い，先端部が鋭く側辺はまっすぐで三角形を呈しているが鋸歯状である。基部は逆刺が鈍く抉りが深い。117は先端部は欠損しているが，側辺が鋸歯状を呈するもので抉りが深いものである。やはり上牛鼻の黒曜石を石材にしている。118は腰岳の黒曜石を石材に用いたもので，一部自然面が残っている。先端部は普通で側辺に一部鋸歯状がみられ，基部は逆刺が円く抉りが深い。119～131は長崎県の針尾の黒曜石を石材に用いている。119は先端部が鋭く，側辺はまっすぐで鋸歯状を呈し，基部は逆刺が鈍く抉りが深い。120は本遺跡出土石鏃で最大の幅を持つもので，先端部は欠損しているが側辺の側面が外湾し最大幅は下端にある。基部は逆刺が鋭く抉りが深い。121は先端部が鋭く側辺がやや外湾し，基部の逆刺は鋭く抉りが深いものである。122は先端部が円く，側辺が鋸歯状を呈するものである。基部は欠損している。123は先端部が鋭く側辺がやや外湾し，基部は逆刺が円く抉りが深いものである。124は片側辺・先端部が欠損しているが，側辺の側面はまっすぐで鋸歯状を呈し，基部は逆刺が鋭く抉りが深いものである。125は先端部が鋭く，側面はまっすぐで鋸歯状を呈し基部は逆刺が鋭く抉りが深いものである。126は片側辺が欠損しているが，先端部が鋭く側辺の側面はやや外湾し，基部の逆刺は鋭く抉りが深いものである。127も片側辺・先端部が欠損しているが，側辺の側面はやや外湾し，基部の逆刺は鈍く抉りがやや浅いものである。128



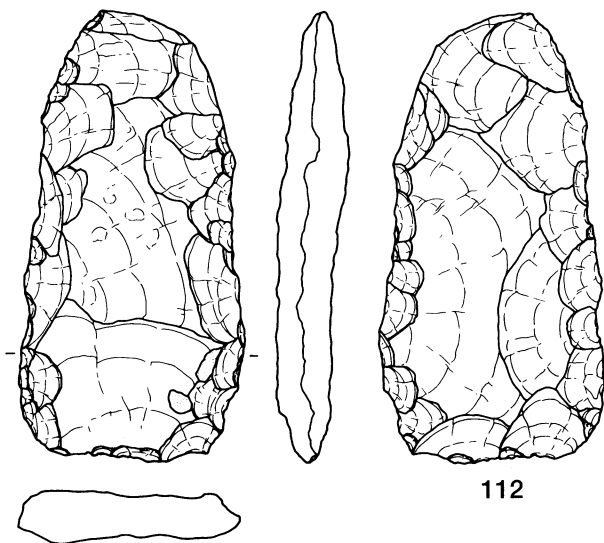
108

109



110

111



112



第29圖 石 斧(2)

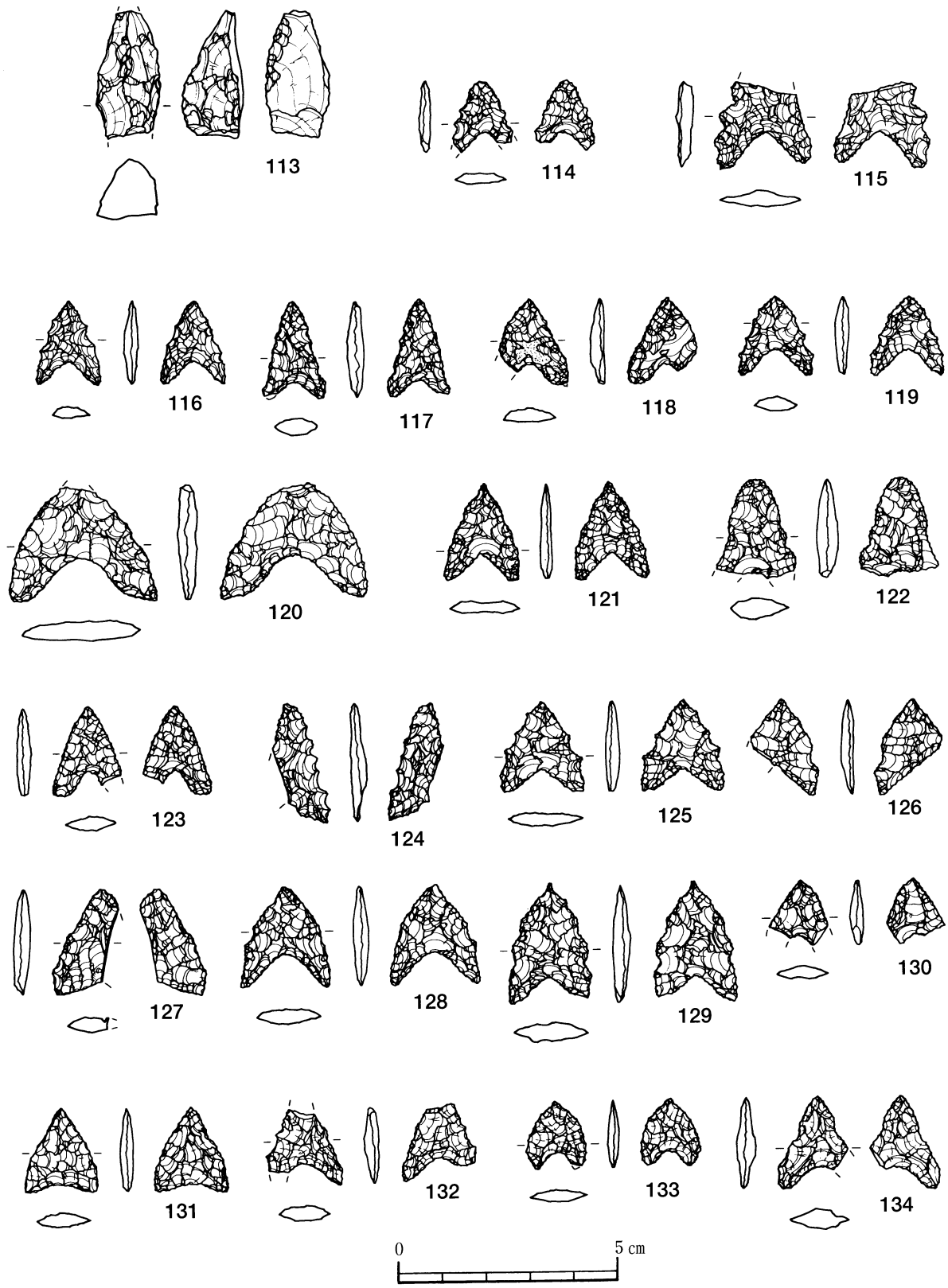
は先端部はふつうで、側辺の側面が外湾し最大幅が下端にあるもので、基部の逆刺が鋭く抉りは極めて深いものである。129は先端部が鋭く側辺にやや抉れた部分をもつもので、基部は片脚が極端に違っている。逆刺は鋭く抉りは深い。130は基部が欠損しているが、先端部は鋭く側辺の側面はまっすぐで三角形を呈している。131は先端部が鋭く側面は外湾し、基部の逆刺は鈍く抉りは浅い。132は頁岩を石材に用いたもので、先端部と片脚が欠損している。側辺は鋸歯状を呈し、基部の逆刺は鋭く抉りは深い。113は針尾の黒曜石を石材に用いたもので、先端部は鋭く側辺の側面は外湾し最大幅が下方にある。基部の逆刺は鋭く抉りは深い。134はハリ質安山岩を石材に用いたもので、片脚を欠損しているが先端部が鋭く側辺の中程に浅い抉りで段をつけている。基部の逆刺は円く抉りは浅い。135は鉄石英を石材に用いたもので、先端部は鋭く側辺の側面はまっすぐで鋸歯状を呈し、基部は欠損しているが抉りは浅い。136・137はハリ質安山岩を石材に用いたもので、136は先端部が欠損しているが側面はやや外湾し、基部は平基である。137は先端部・基部を欠損した剥片鏃である。やや厚みのある剥片を用い裏面にも若干の剥離痕はあるが整形のためであろう。側面はまっすぐで三角形を呈す。138は針尾の黒曜石を石材に用いたもので、先端部が欠損しているが側面が鋸歯状を呈したもので、基部の逆刺は鋭く抉りは深い。139は上牛鼻の黒曜石を石材に用いたもので、先端部は鋭く側面はやや外湾し、基部の逆刺は鋭く抉りは深い。140は基部を整形していることから石鏃に入れたが縄文時代晩期によく出土する特殊石器に分類される可能性もある。石材はハリ質安山岩で先端部が幅広いうえに円味を帯びている。側辺の側面はやや外湾し、基部の逆刺は鋭く抉りは浅い。141もハリ質安山岩を石材に用いている。先端部を欠損しているが側辺の側面はまっすぐで三角形を呈し、基部の逆刺は鋭く抉りは浅い。142は針尾の黒曜石を用い、先端部はやや円く側面は外湾し、基部の片脚が極端に違うが、逆刺はやや円く抉りは浅い。143はハリ質安山岩を石材に用い、先端部は鋭く側辺の側面はまっすぐで三角形を呈し、基部の逆刺は鋭く抉りは浅い。114は針尾の黒曜石を用い、先端部は鋭く側面はまっすぐで三角形を呈し、基部の逆刺は鋭く抉りは深い。145はハリ質安山岩を石材に用い、先端部はふつうで、側面はまっすぐで三角形を呈し、基部の逆刺は鋭く抉りは浅い。片脚を欠損している。146は腰岳の黒曜石を石材に用いたもので、先端部は鋭く側辺の側面はまっすぐで三角形を呈し、基部の逆刺は円く抉りはやや深い。147は針尾の黒曜石を用いたもので、先端部は欠損しているが基部の逆刺は鋭く抉りは深い。148～151は石鏃の未製品である。148～150は針尾の黒曜石を石材に用いたものである。148は周縁部に交互剥離による調整を行っているが、基部調整の段階で欠損したらしく、また先端部付近での調整もこの付近で止めている。149も同様で基部調整が施されていない。150も調整剥離の段階で作業を中止している。151はハリ質安山岩を石材に用いたもので、片面の調整剥離を施し基部調整の段階で欠損したらしく片脚が欠損している。

石槍 (152)

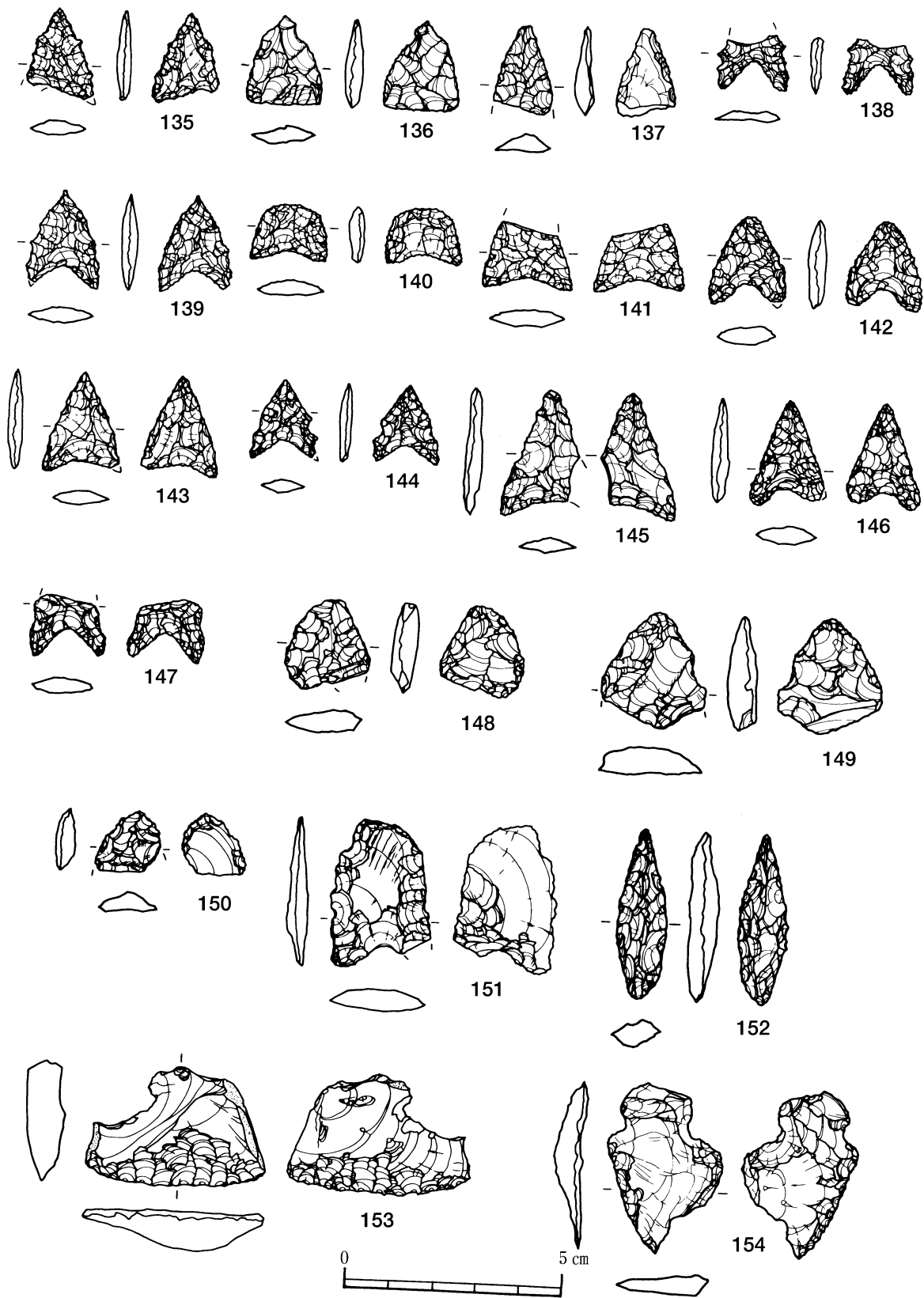
152は厚みのあるハリ質安山岩の剥片に、丁寧な交互剥離による調整を施した石槍である。先端は鋭く基部まで調整が施されている。

石匙 (153～157)

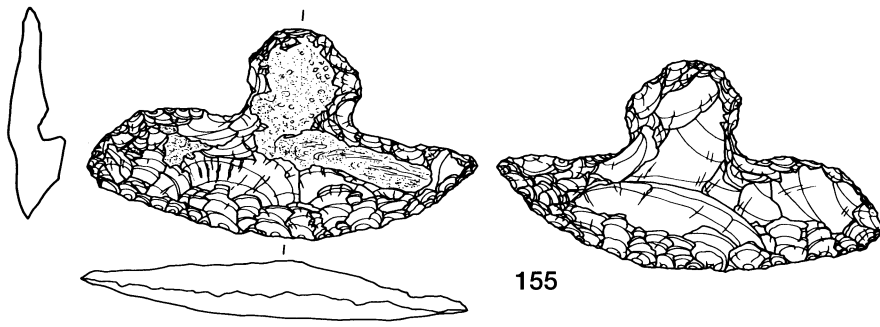
石匙は5点出土した。石材は153・154が針尾の黒曜石で、155～157がハリ質安山岩を用いている。153はつまみ部が顕著でないが下縁部を丁寧な交互剥離により調整を施している。154は縦型



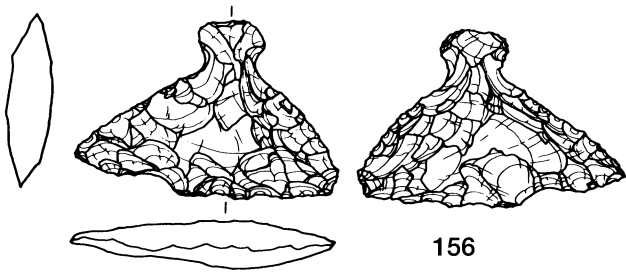
第30図 石器(1) 尖頭器・石鏃



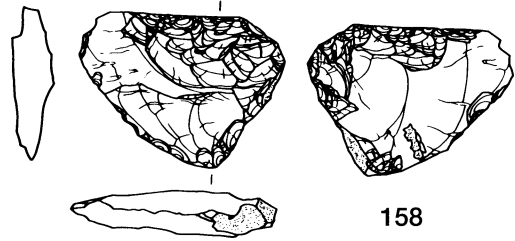
第31圖 石器(2) 石鏃・石匙



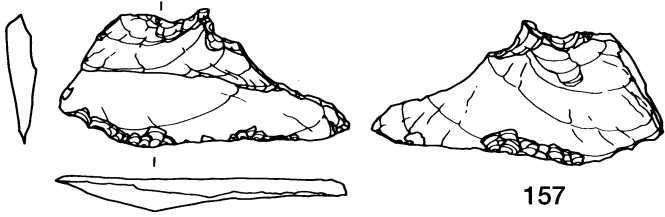
155



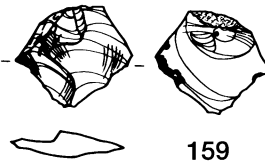
156



158



157



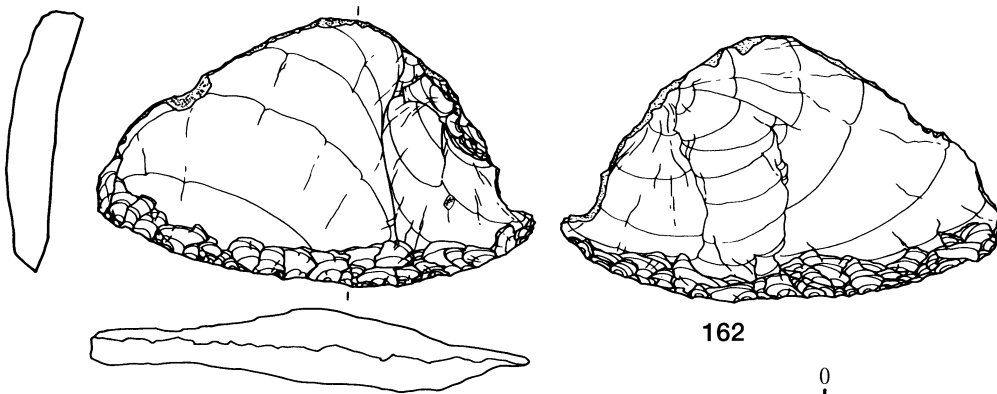
159



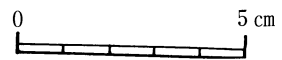
160



161



162



第32図 石器(3) 石匙・スクレイパー

で、側辺面だけに交互剥離による調整が施されている。155～157は横型石匙で、155のつまみ部は身部に対して大きく、左右に両面からの調整で挟りが入る。刃部は両刃で外湾する。156も横型で身部は刃部が平坦で三角形を呈する。刃部は荒い調整を加え鋸歯状を呈する。157はつまみ部が極端に小さなもので、つまみ部周辺のみ調整しつまみ部を整形している。刃部はやや内湾するものである。

スクレイパー (158～168・174)

158は針尾の黒曜石を石材に用いたもので、一側縁部に丁寧なブランディングを施している。159は腰岳の黒曜石で、一側縁部に片面からのブランディングを施している。160は上牛鼻産の黒曜石を用いたもので、自然面を残した厚みのある剥片を素材にし、一側縁部にブランディングを施したものである。161～163はハリ質安山岩を用いたもので、161は自然面を残したやや厚みのある剥片を素材にし下縁部に片面からのブランディングを施したものである。162は側縁部に自然面を残す大型の横剥ぎ剥片で、下縁部に丁寧な交互剥離調整を施して外湾した刃部を形成している。163は横剥ぎの大型剥片を用い、周縁部に調整剥離を加え下縁部に交互剥離を加えて外湾状に刃部を形成している。164は頁岩で一側縁部にブランディングを施したものである。165は安山岩の大型礫で一側縁部に荒い調整を施したものである。166は上牛鼻の黒曜石を石材に用いたもので、一側縁部に片面からのブランディングを施している。167はハリ質安山岩で一側縁部に片面からのブランディングを施したものである。168は安山岩の大型剥片で両側縁部に荒い交互剥離を施したもので、礫器の可能性もある。174は安山岩を石材に用い、全周を交互剥離調整したもので一部突出した部位があり、これにも調整を施している。スクレイパーに分類したが用途不明の石器である。

二次加工のある剥片 (169・170)

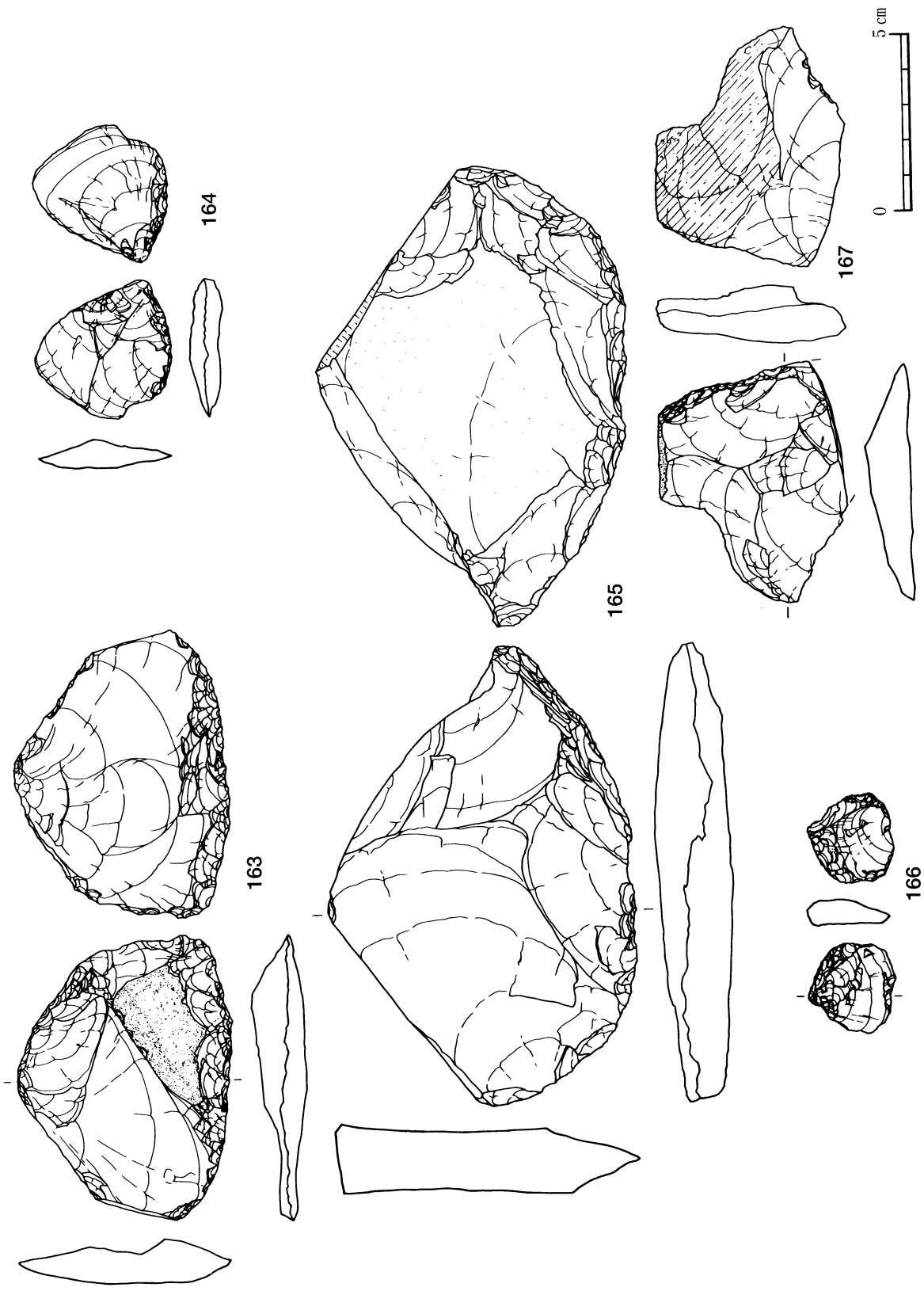
169・170は上牛鼻の黒曜石を石材に用いた縦長剥片である。側縁部の一部に片面からのブランディングがみられるものである。

剥片 (171～173・175)

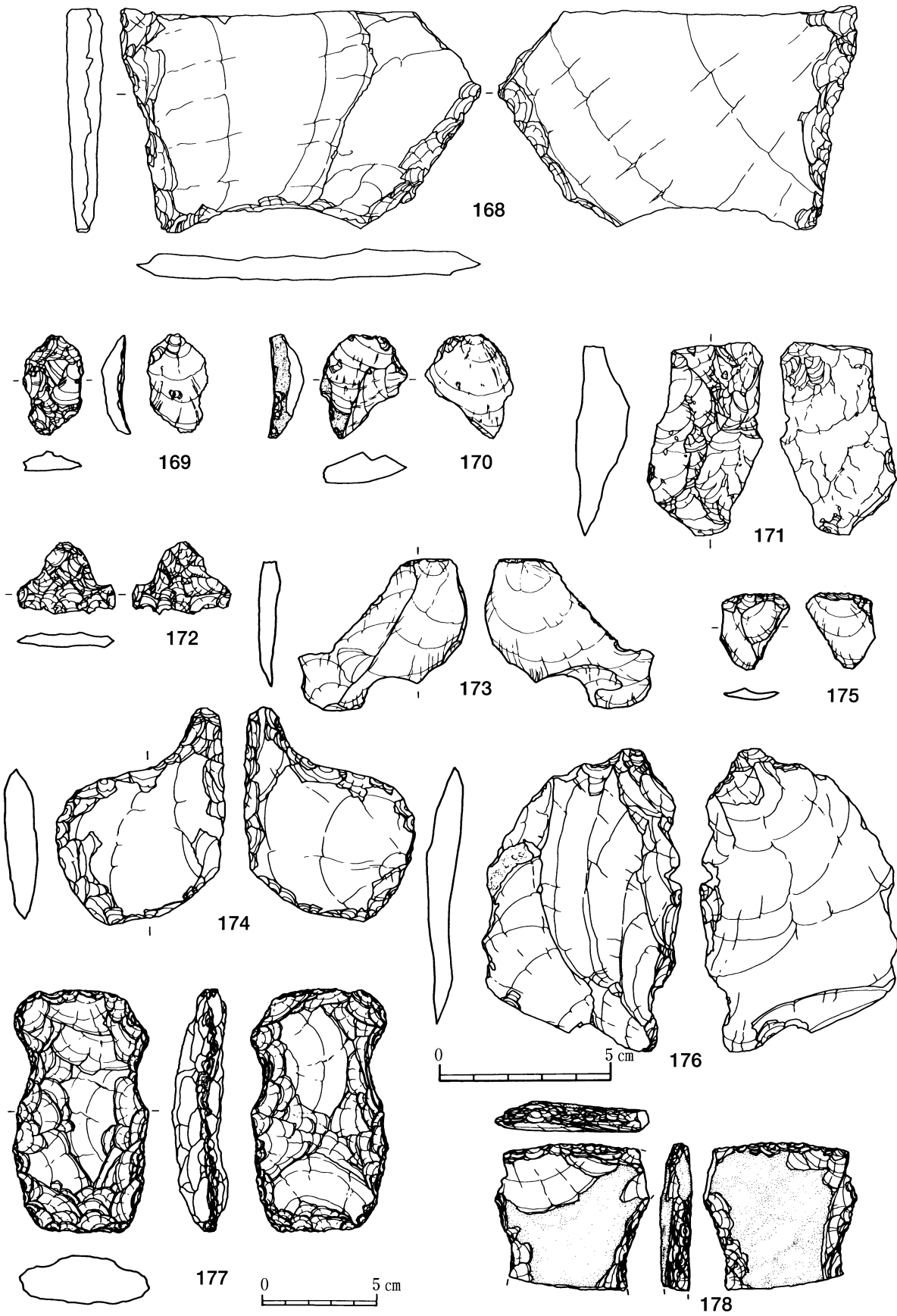
171は上牛鼻の黒曜石を石材に用いた厚みのある剥片である。172は針尾の黒曜石を用いたもので、一部調整剥離がみられ石鏃の製作途中とも考えられる。173はハリ質安山岩で一側縁部に使用痕が認められる。175は鉄石英で一側縁部に交互剥離の調整がみられることから、これも石鏃の未製品の可能性がある。176は頁岩の大型剥片である。

石斧 (177～184)

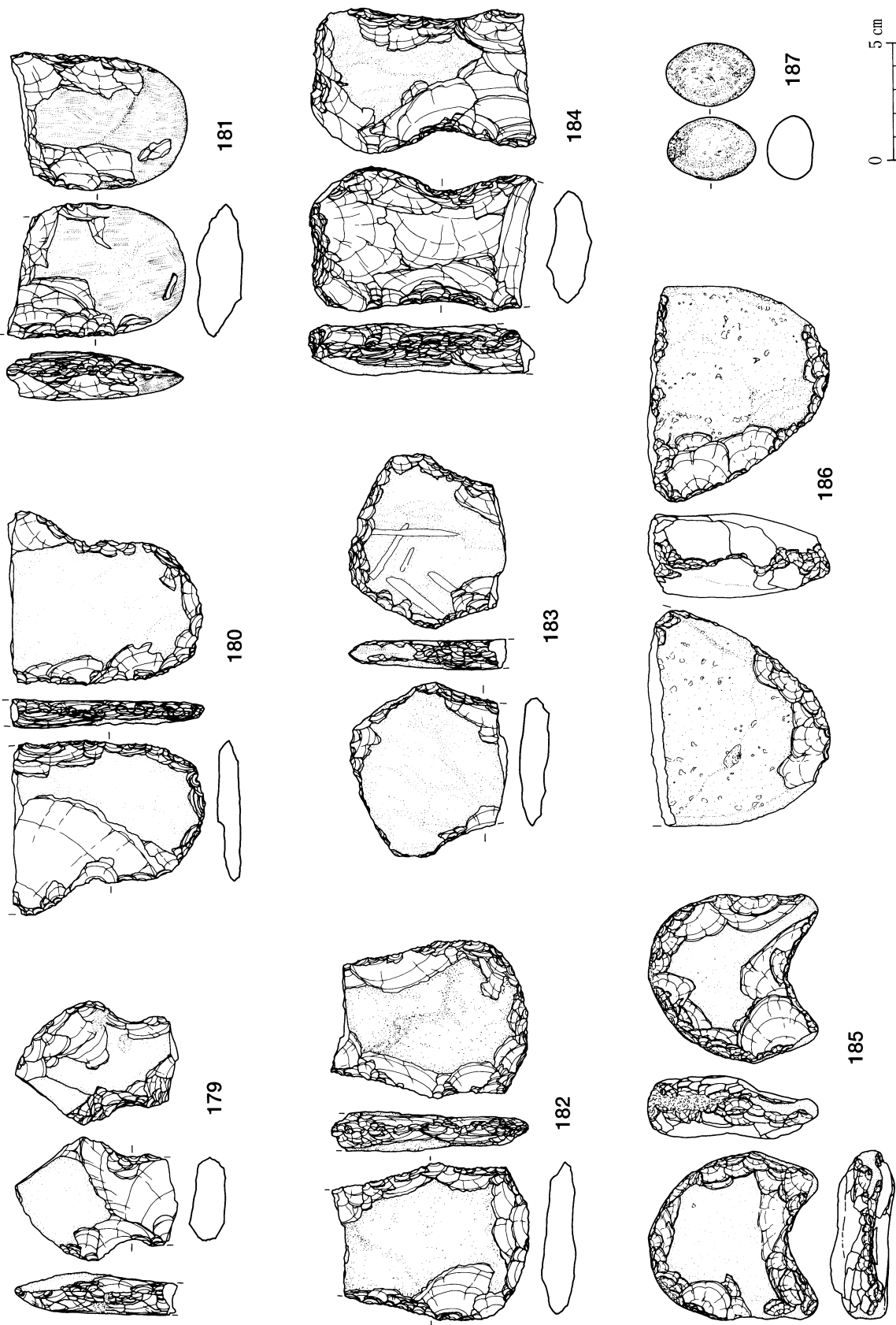
177～180・182～184は有肩石斧と呼ばれる打製石斧で、184の頁岩以外は全て安山岩を石材に用いている。177は完形品で側辺部を左右両側縁からの平坦な粗い調整によって、厚みを取り除くように全面を加工したもので刃部は片刃である。178は扁平な安山岩礫を用いたもので、両面からの剥離により挟りを施した石斧の基部である。179も挟りを施した石斧の基部で、一部石材の剥離面がみられる。180・182も扁平な安山岩礫を用いた石斧の刃部である。183は同様の石材を用いた基部である。184は頁岩の大形剥片を石材に用いたもので、側辺部を粗い調整によって整形した刃部が欠損したものである。181は安山岩を石材に用いた磨製石斧である。側辺を調整剥離により整形し、刃部周辺を研磨しているものである。刃部は蛤刃で若干片刃になっている。



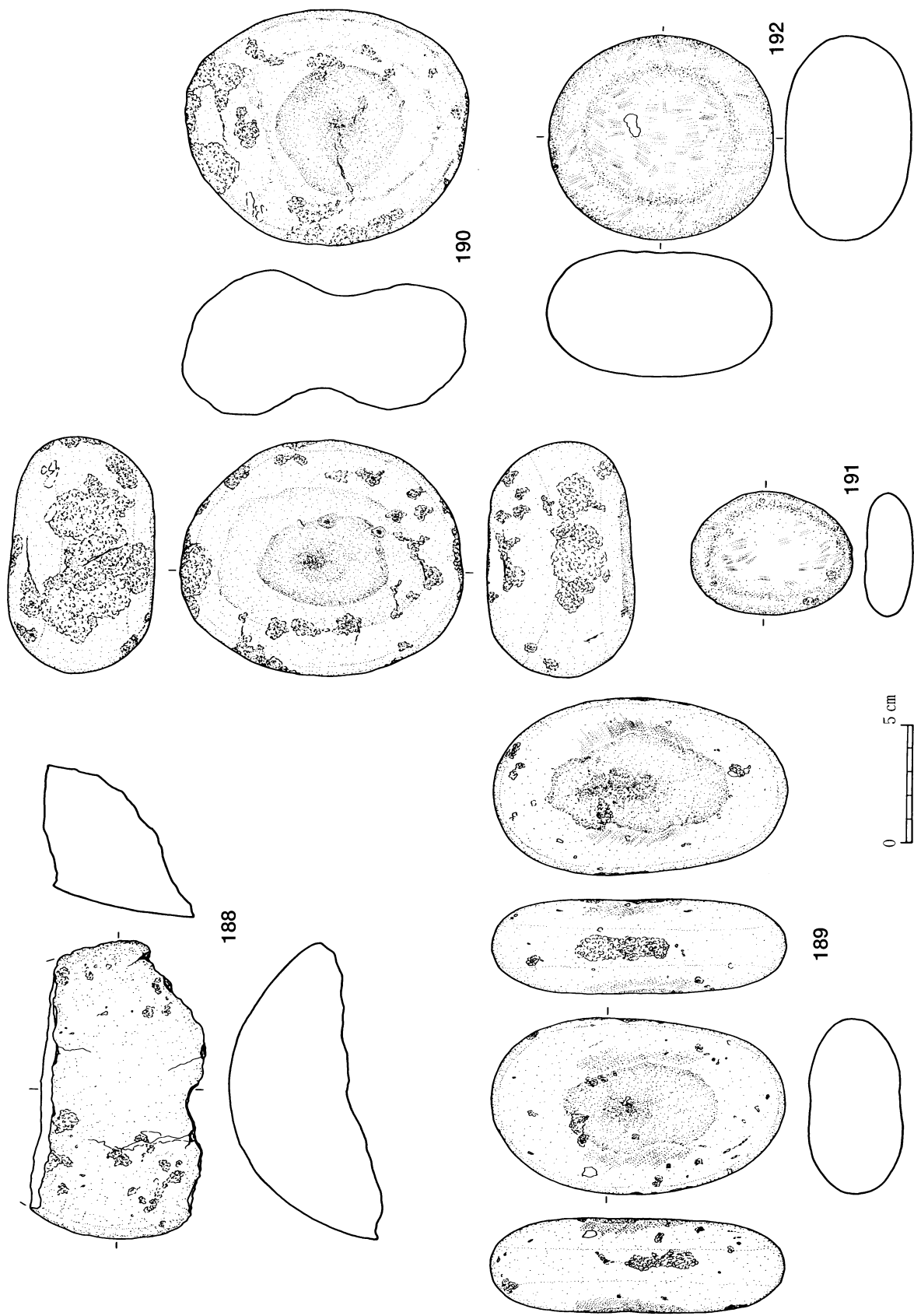
第33図 石器(4) スクレイパー



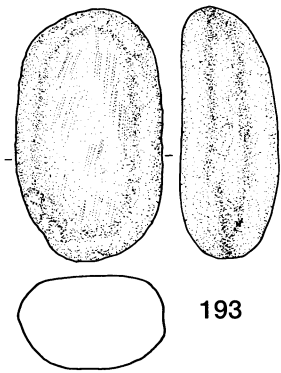
第34図 石器(5) スクレイパー・剥片・石斧



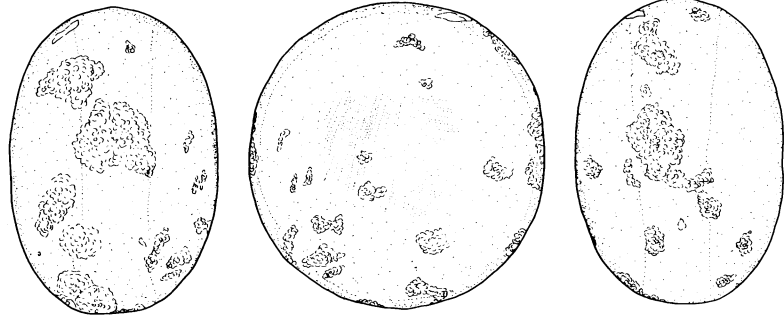
第35图 石器(6) 石斧·双角状石器·磨石



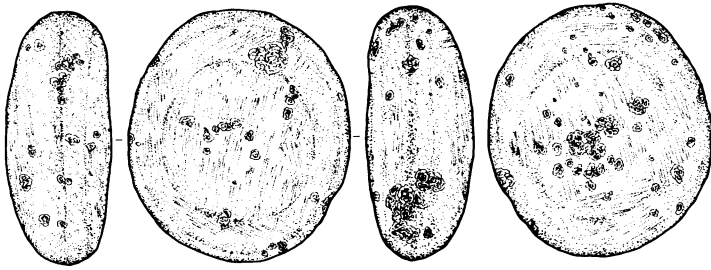
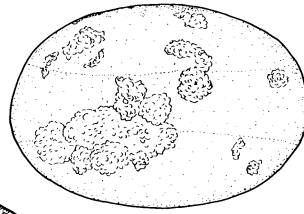
第36图 石器(7) 凹石·磨石



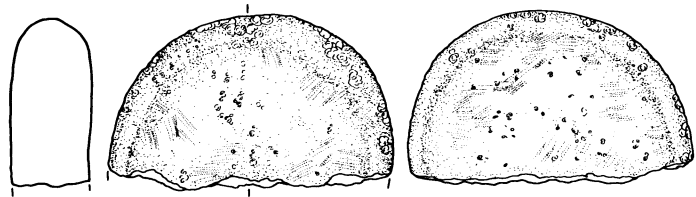
193



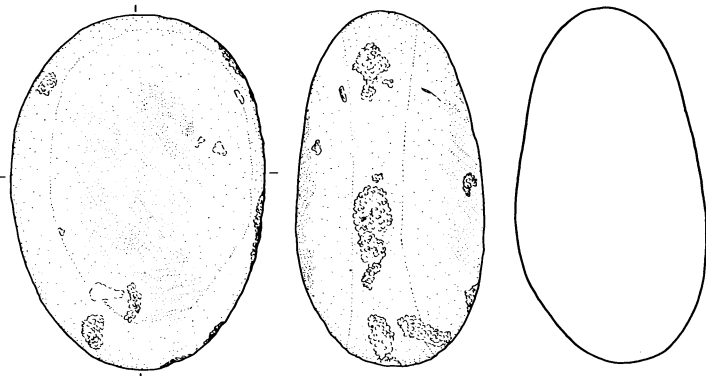
195



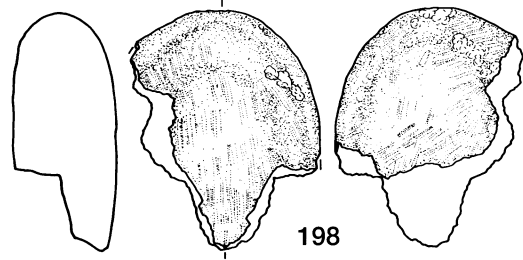
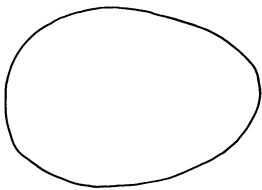
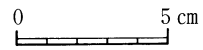
194



196

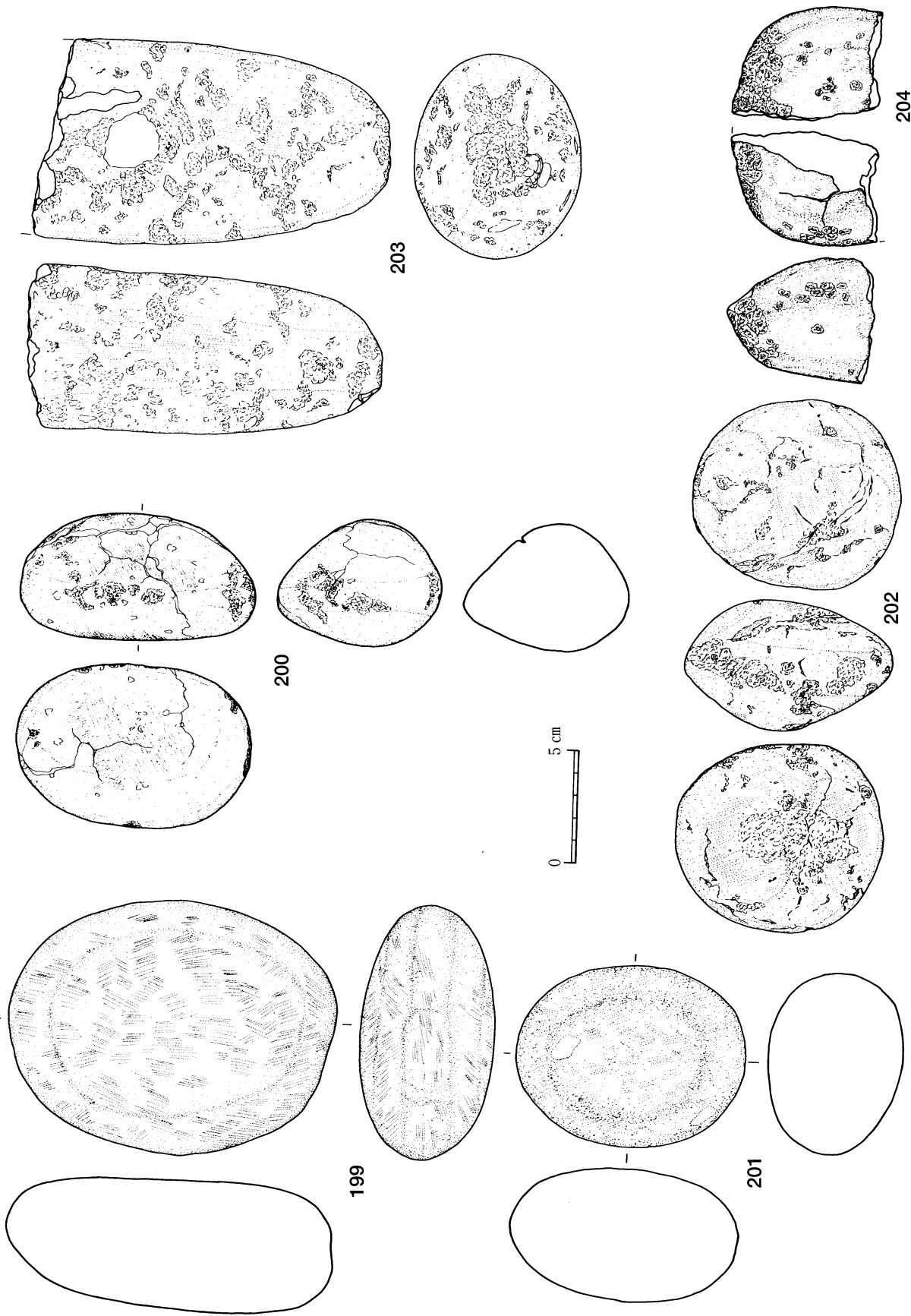


197

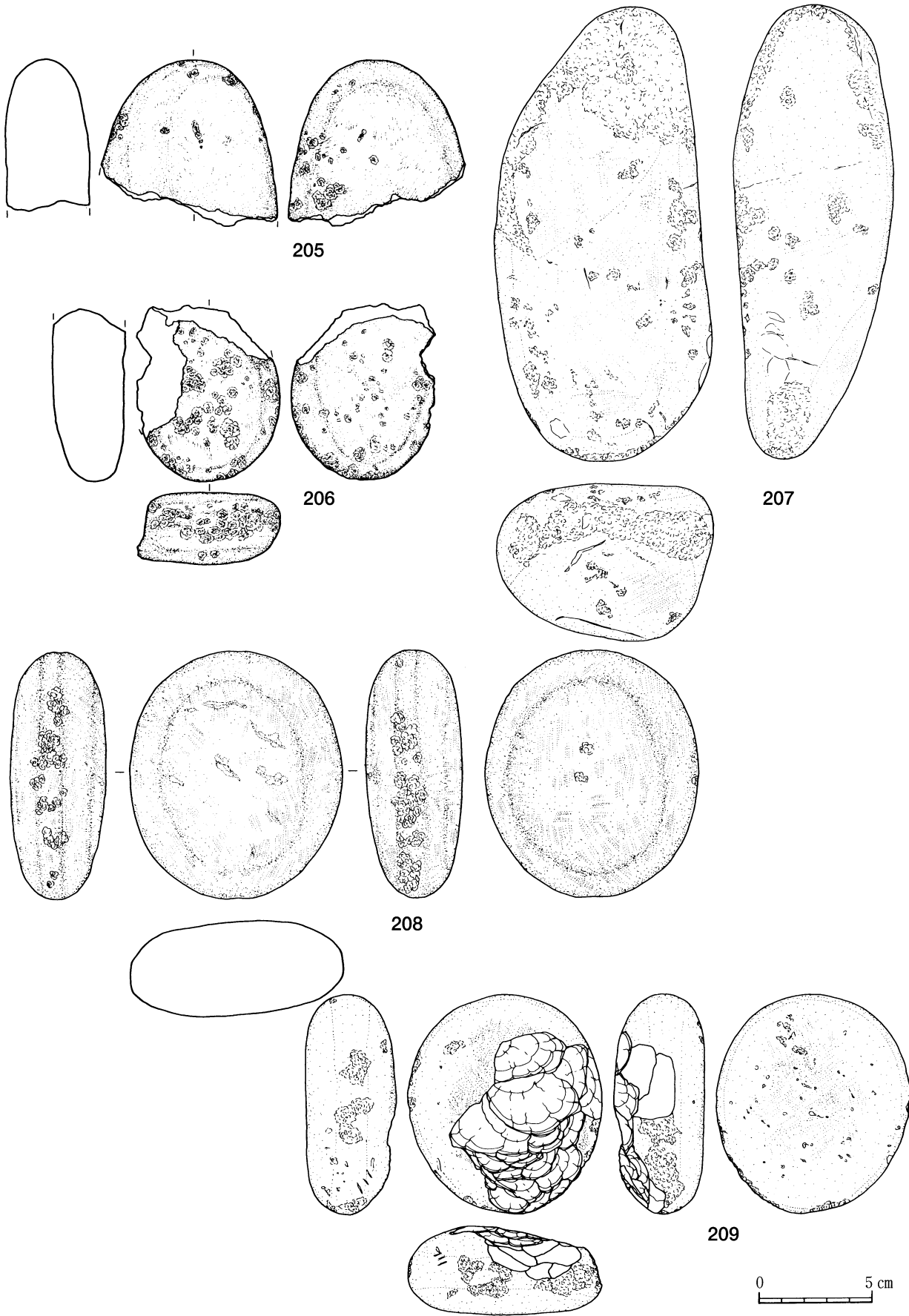


198

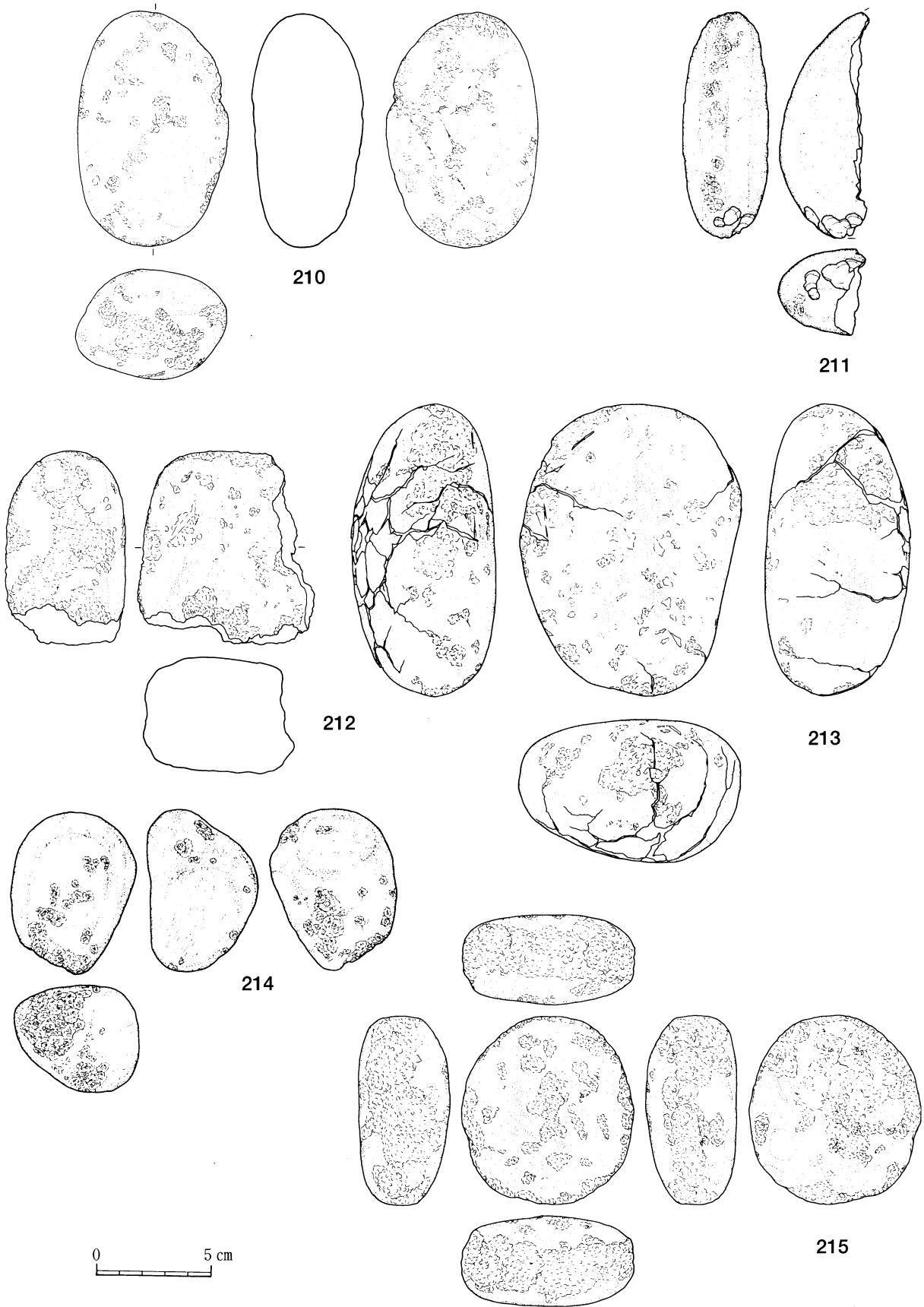
第37図 石器(8) 磨石



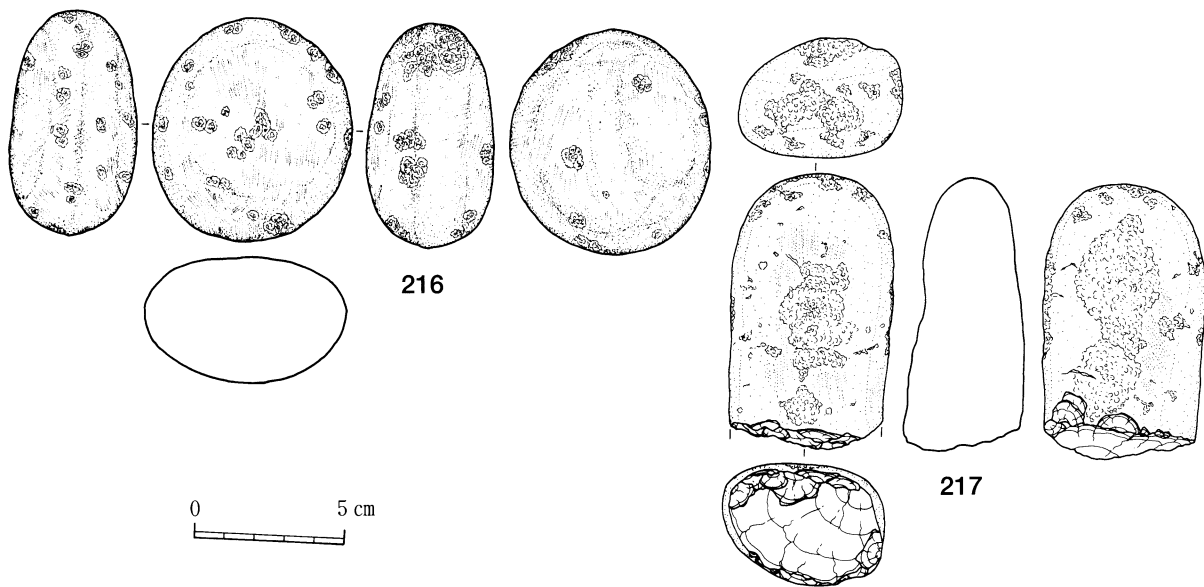
第38図 石器(9) 磨石・敲石



第39図 石器(10) 敲石



第40図 石器(11) 敲石



第41図 石器(12) 敲石

双角状石器 (185)

185は逆三角形の扁平な輝石安山岩の礫を石材として用いたもので、長軸部の側辺に両面剥離を施し、半円形の湾曲部を作りだすことによって、2か所の尖頭部を形作る石器で礫石器、尖頭状石器（双頭型）と呼ばれていて、有明海周辺の遺跡でよくみられるものである。

礫器 (186)

186は安山岩の自然礫を石材に用いたもので、一側縁部に粗い交互剥離がみられるものである。用途は不明である。

敲石 (187・204)

187は石英の自然礫を素材にした小型の敲石である。上端の側縁部に敲打痕がみられる。

凹石 (189・190)

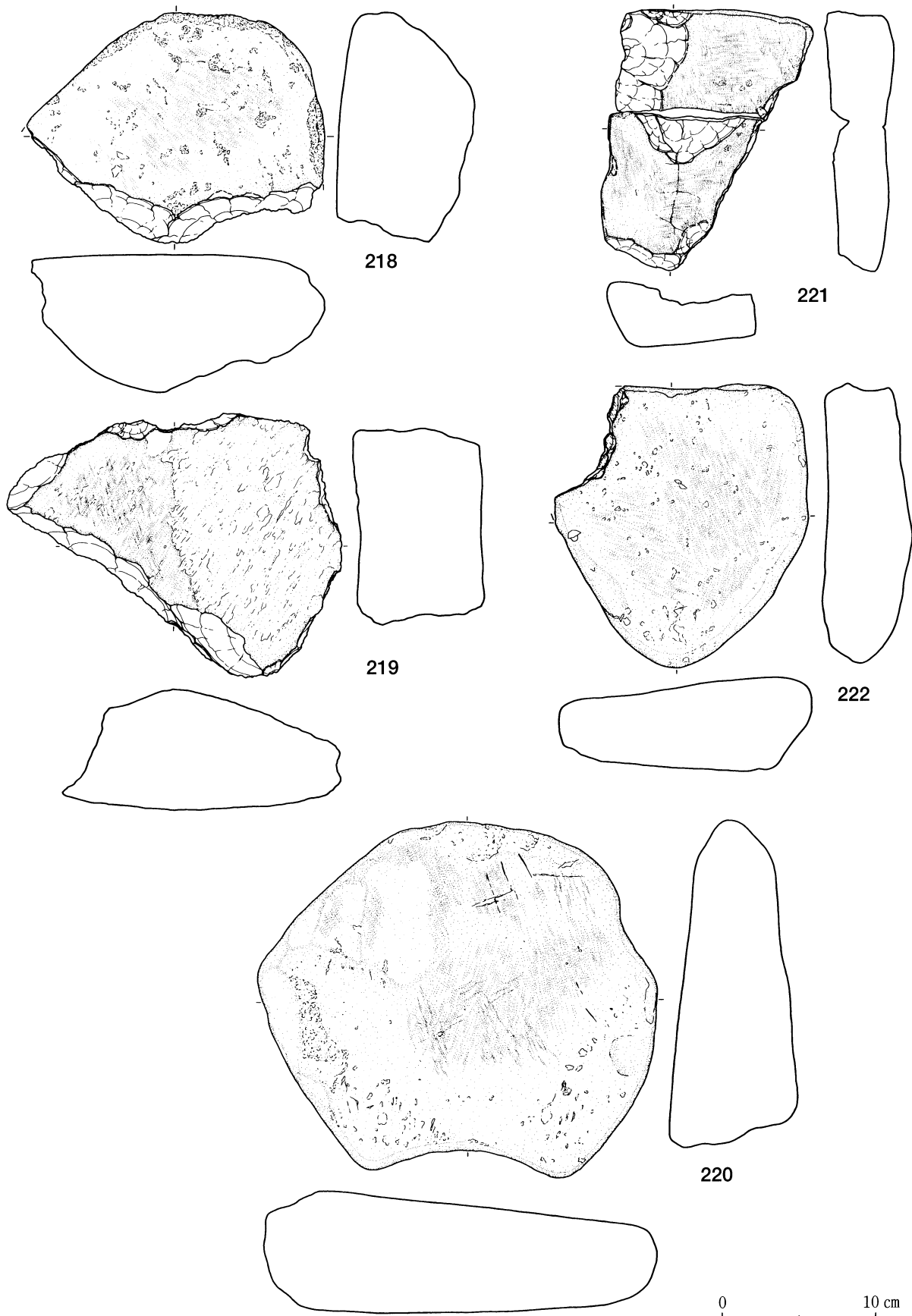
189は安山岩を石材に用いた凹石で、表裏に深さ1.4cmの2か所の凹みをもつもので、上端には敲打痕がみられる。190は砂岩で中央部表裏に敲打による浅い凹みをもつ凹石である。一側縁部にも敲打痕がみられ、全周は磨石としての利用が考えられる研磨痕がみられる。

磨石 (188・191～203)

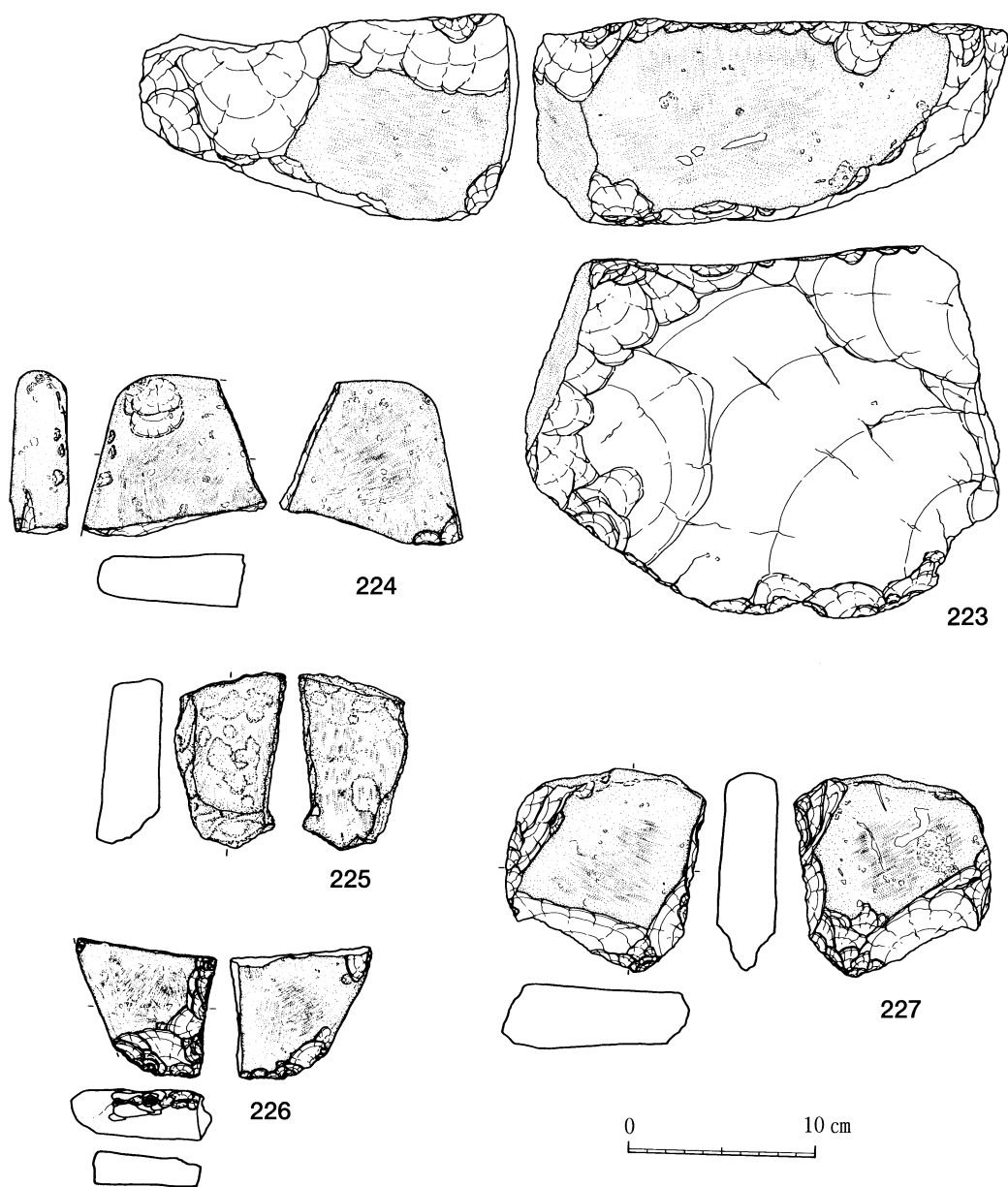
188は砂岩の大型自然礫の欠損品であるが、表面に研磨痕がみられる。191～203の石材は192が砂岩であとは全て安山岩を用いている。191・192・194～202は河原石の自然円礫を用い、全面に研磨痕がみられるものである。193は楕円形の河原石を使用している。197には一部敲打痕がみられる。203は大型の棒状磨石で破損しているが、端部に敲打痕がみられ重量は1.2kgを測る。

磨・敲石 (205～217)

205～217は磨石兼用の敲石である。208・209が砂岩で他は安山岩を石材に用いている。205・206は表裏面・側縁部に敲打痕がみられるもので、207は両端部に敲打痕がみられる。208～213は側縁部に敲打痕がみられ、また表裏には磨いた研磨痕がみられる。214は端部に敲打痕がみられ、摩耗



第42図 石器(13) 石皿



第43図 石器(14) 石皿

が著しい。215は全周に敲打痕がみられるもので、河原石の自然礫を用いたものである。217は一部欠損しているが楕円形の河原石を用いたもので、上端部と表裏面に敲打痕を残すものである。重量は300g前後のものとは500gを超える大型のものにわかれる。

石皿 (218～227)

218～227は石皿である。石材は全て安山岩であり、全て使用による凹みは観察されず平坦面をもつ石皿である。欠損品が多いが220のように17.6kgを測る大型のものもある。218～223は片面使用で、224～227は両面使用である。重量が1kg未満の小形のものとは5kg前後の大型のものにわかれる。

第6表 石器計測表(1)

番号	器種	石材	区	層	遺物番号	重量 g	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	備考
106	打製石斧	頁岩	B 4	土坑		210	13.1	5.6	1.9	
107	打製石斧	頁岩	B 4	土坑		380	14.5	6.7	2.7	
108	磨製石斧	頁岩	B 4	攪乱		280	14.0	5.9	2.6	
109	打製石斧	頁岩	B 4	攪乱		130	10.6	5.8	1.6	
110	打製石斧	頁岩	B 4	攪乱		320	15.3	5.9	3.1	
111	打製石斧	粘板岩	B 4	攪乱		140	13.1	4.7	1.8	
112	打製石斧	安山岩	B 4	攪乱		290	14.6	6.6	2.0	
113	三稜尖頭器	黒曜石上牛鼻	B 6	II b	2061	5.3	3.0	1.4	1.3	
114	石鏃	黒曜石腰岳	A 6	II b	899	0.4	1.6	1.1	0.3	
115	石鏃	黒曜石針尾	B 6	II b	2006	1.1	2.1	2.0	0.3	
116	石鏃	黒曜石上牛鼻	A 6	II b	1604	0.7	2.1	1.3	0.3	
117	石鏃	黒曜石上牛鼻	A 5	II b	359	0.9	2.4	1.0	0.4	
118	石鏃	黒曜石腰岳	A 5	II b	1041	0.6	2.1	1.3	0.3	
119	石鏃	黒曜石針尾	A 4	II b	1076	0.5	1.8	1.3	0.3	
120	石鏃	黒曜石針尾	A 6	II b	1555	2.6	2.9	3.1	0.4	
121	石鏃	黒曜石針尾	A 6	II b	1976	0.9	2.1	1.5	0.2	
122	石鏃	黒曜石針尾	A 6	II b	1680	1.5	2.4	1.3	0.3	
123	石鏃	黒曜石針尾	A 5	II b	1740	0.7	2.2	1.3	0.3	
124	石鏃	黒曜石針尾	B 6	II b	531	0.7	2.9	0.9	0.2	
125	石鏃	黒曜石針尾	A 4	II b	809	0.7	2.2	1.5	0.3	
126	石鏃	黒曜石針尾	A 5	II b	511	0.5	2.2	1.3	0.2	
127	石鏃	黒曜石針尾	B 6	II b	1722	1.0	2.6	0.9	0.3	
128	石鏃	黒曜石針尾	B 6	II a	460	1.0	2.4	1.8	0.3	
129	石鏃	黒曜石針尾	B 4	II b	462	1.4	2.8	1.7	0.4	
130	石鏃	黒曜石針尾	A 6	II a	2220	0.4	1.6	1.2	0.2	
131	石鏃	黒曜石針尾	B 5	II b	799	0.8	2.0	1.5	0.3	
132	石鏃	頁岩	A 6	II a	872	0.7	2.0	1.3	0.3	
133	石鏃	黒曜石針尾	A 6	II a	911	0.4	1.6	1.3	0.2	
134	石鏃	ハリ質安山岩	B 5	II b	2313	0.8	2.1	1.2	0.3	
135	石鏃	鉄石英	A 4	II a	940	0.9	2.3	1.2	0.3	
136	石鏃	ハリ質安山岩	A 6	II b	1318	1.3	2.1	1.7	0.4	
137	石鏃	ハリ質安山岩	B 4	II b	落ち込み	0.2	2.1	1.2	0.2	
138	石鏃	黒曜石針尾	B 5	II a	378	0.4	1.3	1.7	0.3	
139	石鏃	黒曜石上牛鼻	B 4	II b	463	0.9	2.2	1.4	0.3	
140	石鏃	ハリ質安山岩	A 5	II b	154	0.8	1.3	1.7	0.3	
141	石鏃	ハリ質安山岩	A 5	II a	193	1.2	1.6	1.8	0.4	
142	石鏃	黒曜石針尾	A 6	II a	267	1.1	2.3	1.6	0.4	
143	石鏃	ハリ質安山岩	A 6	II a	456	1.0	2.5	1.4	0.3	
144	石鏃	黒曜石針尾			表層	0.5	2.0	1.1	0.3	
145	石鏃	ハリ質安山岩			表層	1.4	2.9	1.3	0.4	
146	石鏃	黒曜石腰岳			表層	1.2	2.2	1.4	0.4	
147	石鏃	黒曜石針尾			表層	0.6	1.4	1.6	0.4	

第7表 石器計測表(2)

番号	器種	石材	区	層	遺物番号	重量g	長さcm	幅cm	厚さcm	備考
148	石鏃未製品	黒曜石針尾	A 5	II b	2268	2.0	1.9	1.9	0.6	
149	石鏃未製品	黒曜石針尾	B 5	II b	1898	3.6	2.6	2.3	0.7	
150	石鏃未製品	黒曜石針尾	A 4	II b	942	0.8	1.5	1.2	0.5	
151	石鏃未製品	ハリ質安山岩	A 6	II b	1633	3.3	3.2	2.2	0.4	
152	石槍	ハリ質安山岩	A 4	II b	2230	2.8	4.0	1.1	0.5	
153	石匙	黒曜石針尾	B 5	II b	619	8.4	4.2	2.8	0.8	
154	石匙	黒曜石針尾	A 4	II b	819	4.4	4.0	2.7	0.6	
155	石匙	ハリ質安山岩			表層	29.0	8.6	4.7	1.2	
156	石匙	ハリ質安山岩			表層	17.0	5.9	3.8	0.9	
157	石匙	ハリ質安山岩			表層	9.3	6.6	3.1	0.6	
158	スクレイパー	黒曜石針尾	A 6	II b	2047	13.0	4.5	3.4	0.7	
159	スクレイパー	黒曜石腰岳	B 3	II b	2349	2.5	2.3	2.0	0.6	
160	スクレイパー	黒曜石上牛鼻	B 4	II b	2044	4.5	2.9	2.1	0.8	
161	スクレイパー	ハリ質安山岩	A 5	II b	579	6.6	3.0	2.5	0.9	
162	スクレイパー	黒曜石針尾	A 6	II b	1260	75.4	9.8	5.9	1.0	
163	スクレイパー	ハリ質安山岩	A 5	II b	341	57.3	8.1	6.0	1.1	
164	スクレイパー	頁岩	A 6	II b	1787	11.0	4.0	3.7	0.8	
165	スクレイパー	安山岩	A 6	II b	2129	0.3	13.2	8.4	1.8	
166	スクレイパー	黒曜石上牛鼻	A 5	II a	153	4.0	2.5	2.5	0.7	
167	スクレイパー	ハリ質安山岩	A 4	II a	430	38.0	6.9	5.1	1.2	
168	スクレイパー	安山岩	A 5	II a	157	81.3	9.8	5.8	0.7	
169	二次加工剥片	黒曜石上牛鼻	A 4	II b	424	2.6	3.0	1.7	0.5	
170	二次加工剥片	黒曜石上牛鼻	B 3	II b	2359	5.8	3.2	2.3	0.8	
171	剥片	黒曜石上牛鼻	A 5	II b	2203	25.9	5.8	3.0	2.6	
172	剥片	黒曜石針尾	A 4	II a	438	2.1	2.9	2.1	0.5	
173	剥片	ハリ質安山岩	A 5	II a	99	9.4	5.9	2.7	0.6	
174	スクレイパー	安山岩	A 5	II a	235	30.8	7.0	5.0	0.9	
175	剥片	鉄石英	A 5	II a	228	1.6	2.2	1.6	0.3	
176	剥片	頁岩			表層	58.1	8.6	5.8	0.9	
177	打製石斧	安山岩	B 5	II b	587	178.6	10.4	5.8	1.9	
178	打製石斧	安山岩	A 5	II b	577	72.3	6.4	6.7	1.2	
179	打製石斧	安山岩	B 4	II b		70.4	6.9	5.1	1.2	
180	打製石斧	安山岩	B 4	II b		83.0	8.2	7.3	1.0	
181	磨製石斧	安山岩	B 2	II b		110.4	7.1	5.7	2.0	
182	打製石斧	安山岩	B 5	II a	380	102.3	7.8	6.4	1.2	
183	打製石斧	安山岩			表層	73.4	6.4	6.5	1.3	
184	打製石斧	頁岩			表層	167.5	9.1	6.0	1.7	
185	双角状石器	安山岩	A 5	II b	1442	154.1	7.5	7.2	2.2	
186	礫器	安山岩	A 5	II b	1158	261.3	9.2	7.4	3.4	
187	敲石	石英	B 3	II b	1008	25.8	3.7	2.7	1.9	
188	円礫	砂岩	B 5	II a	376	560.0	13.3	8.4	4.2	
189	凹石	砂岩	B 5	II a	377	590.5	12.0	7.5	3.9	

第8表 石器計測表 (3)

番号	器種	石材	区	層	遺物番号	重量 g	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	備考
190	凹・敲石	安山岩			3 T 2	1,100	12.1	10.1	4.1	
191	磨石	安山岩	B 4	Ⅲ	2263	102.0	6.8	5.2	2.1	
192	磨石	砂岩	A 6	Ⅱ b	1858	630.0	9.5	8.8	5.3	
193	磨石	安山岩	B 4	Ⅱ b	779	193.4	8.5	4.9	3.3	
194	磨石	安山岩	B 3	Ⅱ b	2346	340.0	8.6	7.7	3.3	
195	磨石	安山岩	B 3	Ⅱ b	754	980.5	10.1	9.7	6.9	
196	磨石	安山岩	A 6	Ⅱ b	1086	224.3	9.4	5.8	2.7	
197	磨石	安山岩	B 5	Ⅱ b	1491	840.5	12.0	9.9	6.1	
198	磨石	安山岩	A 4	Ⅱ b	968	180.0	8.1	5.6	3.4	
199	磨石	安山岩	B 4	Ⅱ a	468	1,550	12.1	11.6	5.8	
200	磨石	安山岩				520.5	10.2	7.0	5.7	
201	磨石	安山岩			表層	660.0	9.9	8.0	5.8	
202	磨石	安山岩			表層	580.0	9.0	8.9	5.5	
203	磨石	安山岩			表層	1,200	15.0	8.8	6.0	
204	敲石	安山岩			表層	191.9	6.2	3.9	4.1	
205	磨・敲石	安山岩	B 3	Ⅲ	2286	288.5	6.5	7.3	3.8	
206	磨・敲石	安山岩	A 5		828	170.4	8.4	6.3	3.1	
207	磨・敲石	砂岩	B 4	Ⅱ b	465	1,740	20.0	9.1	6.7	
208	磨・敲石	砂岩	B 5	Ⅱ b	1476	670.5	11.0	9.8	4.2	
209	磨・敲石	安山岩	A 6	Ⅱ b	1259	470.5	9.9	8.6	3.7	
210	磨・敲石	安山岩	A 2	Ⅱ b	2196	400.0	10.2	6.3	4.4	
211	磨・敲石	安山岩	A 4	Ⅱ b	939	148.3	9.9	3.3	3.6	
212	磨・敲石	安山岩	B 5	Ⅱ b		350.0	7.8	6.2	4.0	
213	磨・敲石	安山岩	A 4	Ⅱ a	3	940.0	12.9	9.2	5.7	
214	磨・敲石	安山岩			表層	214.1	6.8	5.7	4.7	
215	磨・敲石	安山岩			表層	333.1	8.2	7.9	3.8	
216	磨・敲石	安山岩			表層	286.1	7.3	6.6	4.1	
217	磨・敲石	安山岩			表層	289.5	9.0	5.3	3.3	
218	石皿	安山岩	A 5	Ⅱ a	112	6,800	25.9	16.0	9.8	
219	石皿	安山岩	B 6	Ⅱ b	1897	7,700	27.0	21.0	9.7	
220	石皿	安山岩	A 5	Ⅱ a	825	17,600	36.2	28.2	8.3	
221	石皿	安山岩	B 5	Ⅱ b	1106	2,400	23.4	12.1	4.1	
222	石皿	安山岩	A 5	Ⅱ a	121	5,300	25.7	21.0	6.1	
223	石皿	安山岩	B 5	Ⅱ b	1472	10,300	33.1	29.1	9.2	
224	石皿	安山岩	A 3	Ⅱ b	642	900.0	10.2	10.1	3.6	
225	石皿	安山岩	B 2	Ⅱ b		650.0	11.1	7.1	3.9	
226	石皿 (磔器)	安山岩	B 6	Ⅱ b	1990	350.0	10.2	9.3	2.2	
227	石皿	安山岩			表層	1,290	13.3	13.4	4.2	

第4節 古墳時代

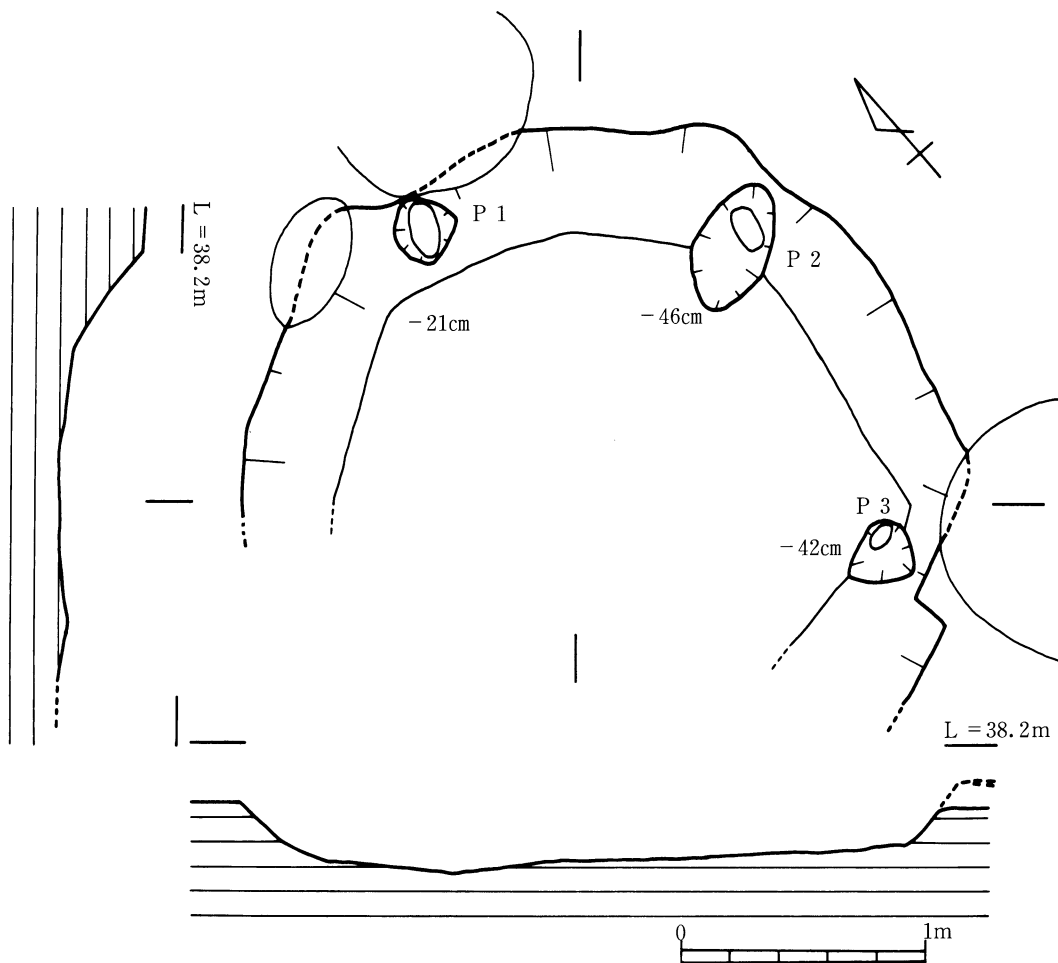
1 遺構

古墳時代の遺構として、竪穴および貝殻混在の土坑が検出された。

(1) 竪穴遺構 (第44図)

B-4区で、Ⅲ層に掘り込まれた遺構として検出された。埋土は黄褐色であることからⅡb層と考えられる。西側は後世の攪乱によって削られているが、直径297cmのほぼ円形のプランと考えて大過ないと思われる。深さは30~34cmあり、掘り方の内側に柱穴と考えられる小ピットが3基検出された。それぞれの深さは、北側のものからそれぞれ21cm, 46cm, 42cmである。

埋土中から出土した遺物で図化できたのは3点である。(第46図 228~230) 228は甕形土器の口縁部である。くの字状に外反しており、口唇部は尖り気味である。外面は刷毛目調整、内面は縦方向のナデ調整である。229は甕形土器の胴部である。外面刷毛目、内面横方向のナデ調整が行なわれている。230は壺形土器の口縁部である。大きく外反しており、口唇端部は四角である。調整は、外面が口唇付近が横方向、それより下部は縦方向の細かな刷毛目、内面が横~斜め方向の刷毛目である。いずれも焼成は良い。これらの遺物はすべて成川式土器であることから、この竪穴遺構も古墳時代のものと考えて支障ないと思われる。



第44図 Ⅱb層検出竪穴遺構

(2) 貝殻混在の土坑 (第45図)

B-2・3区に2.2m×1.6mの長円形の掘り込みをもつ土坑が検出された。埋土はⅡ層の黄褐色土であり、深さ50cmを測る。土坑は二段に分かれ、上段は深さ40cmで、下段部には貝殻約43.4kgが検出された。貝殻中には成川式土器片が混在していることから、古墳時代の遺構と考えられる。土坑内に混入された貝殻には特別なものはなく、下記の2網12科24種が確認された。

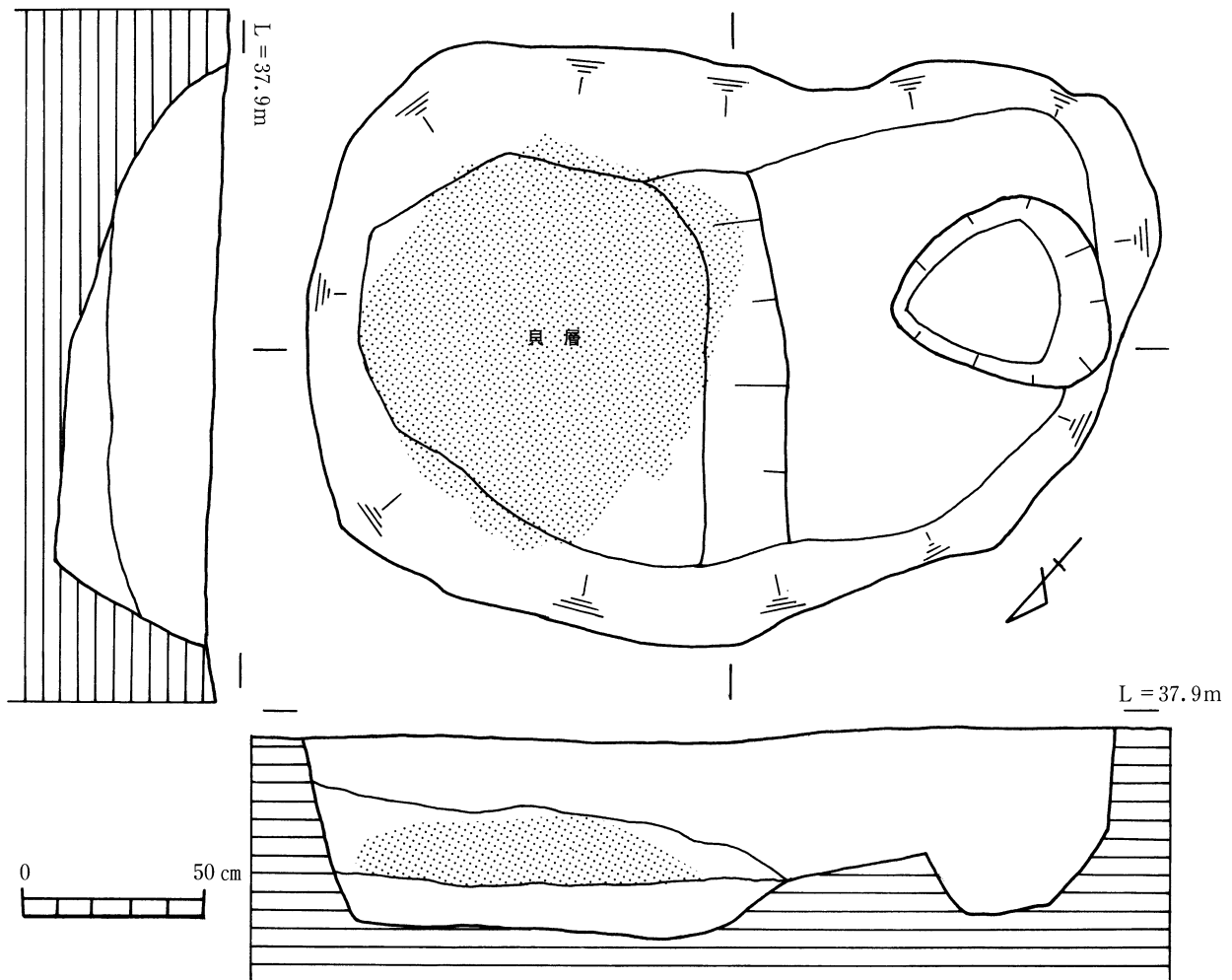
復足網

みみがい科 (トコブシ), ゆきのかさ科 (ウノアシ), りゅうてん科 (スガイ・コシダカサザエ), あまおぶね科 (アマガイ・アマオブネ), あっきがい科 (レイシ・イボシイシ), えぞばい科 (イソニナ), にしきうず科 (クボガイ・ヒメクボガイ・ウズイチモンジ・オオコシダカガンガラ・クマノコガイ・イシダタミ・ギンタカハマ)

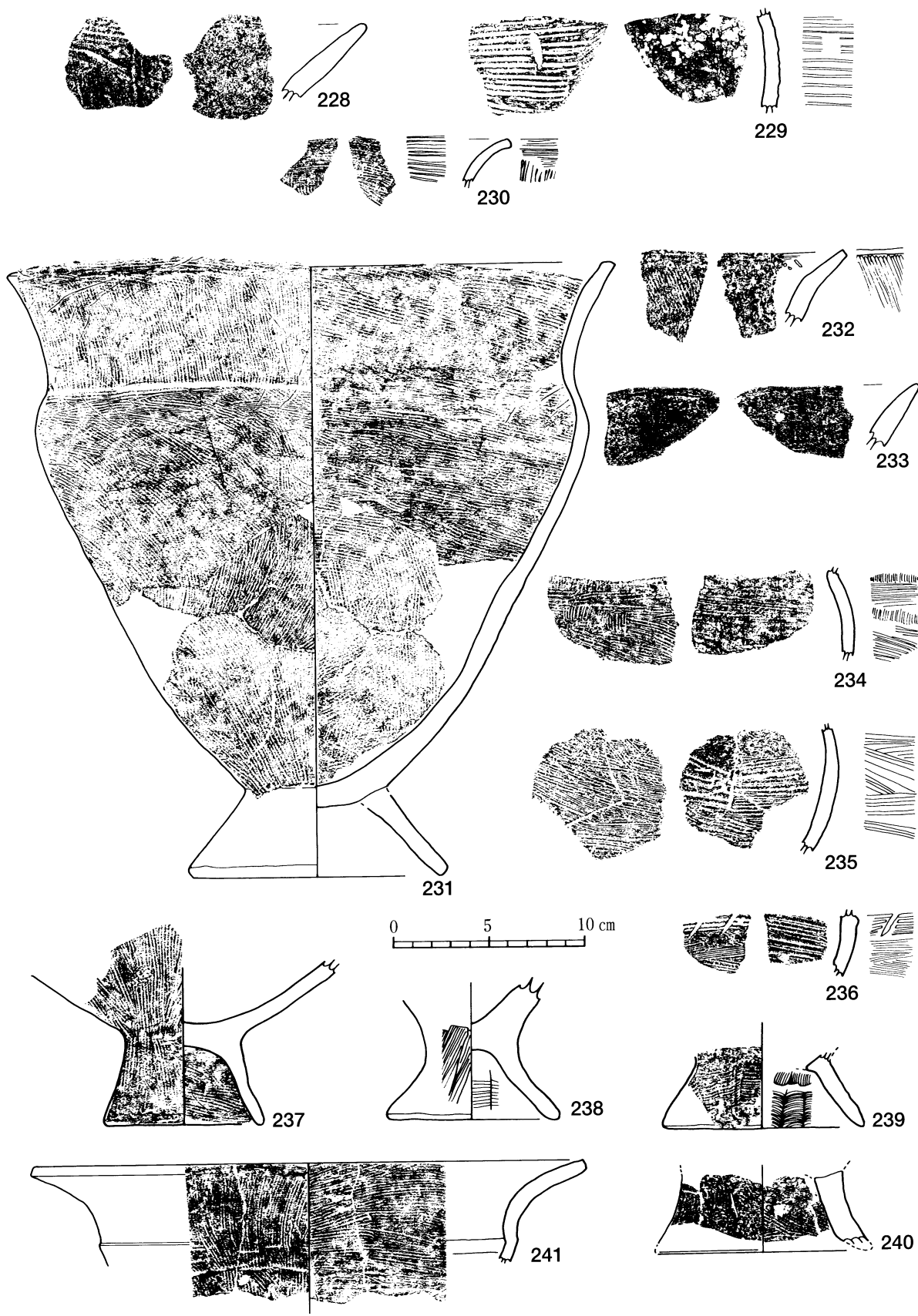
斧足網

ふねがい科 (カリガネエガイ・サルボウ), いがい科 (ムラサキイガイ), いたぼがき科 (マガキ・オハグロガキ), ふじのはながい科 (ナミノコガイ), まるすだれがい科 (ハマグリ)

その他, ムラサキウニの棘やフジツボがあり, これらは, 現在でも吹上浜では普通に採集されるものである。



第45図 Ⅱ b層検出貝殻混在の土坑



第46図 遺構出土の土器(1)

土坑から出土した遺物は第46・47図に載せた。いずれも成川式土器と考えられる。

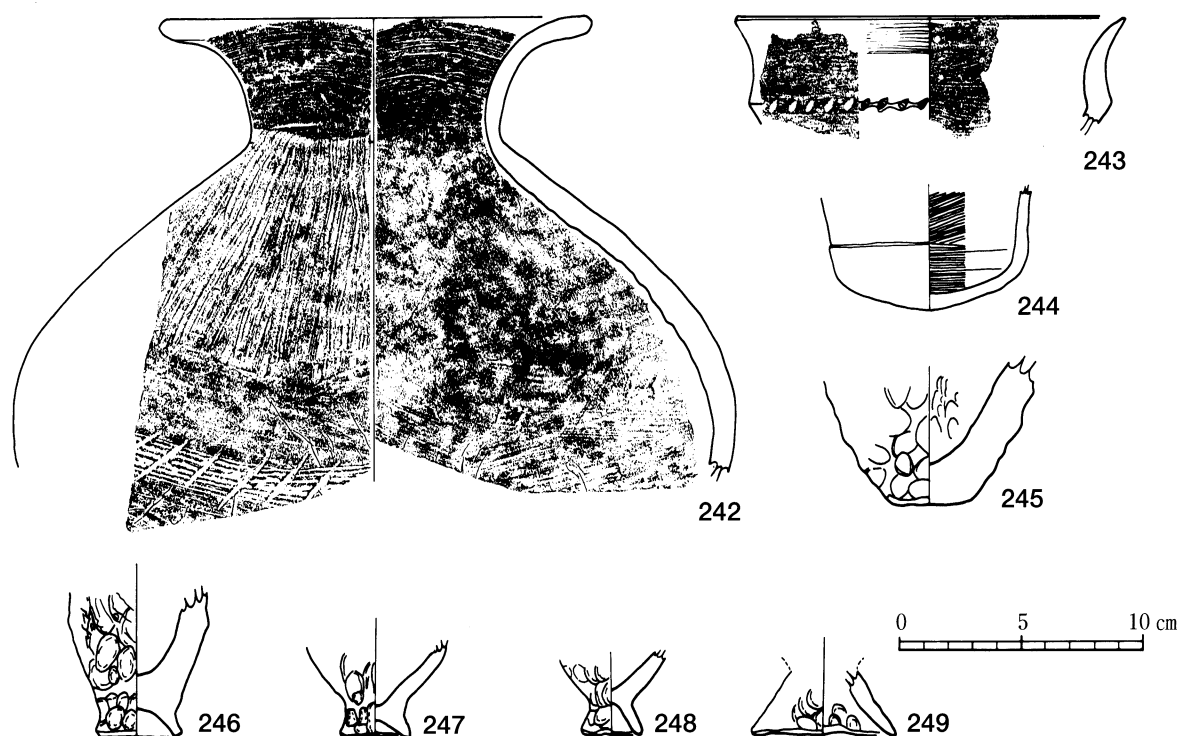
231は甕形土器である。底部（脚部）を欠くが、ほぼ完形といえる。口縁径は32.4cm、推定高さは32.5cmであり、内外面共に細かな刷毛目による調整が行なわれている。232～240も甕形土器である。

232と233は口縁部であるが、前者は口唇端部が角張って外面の調整は刷毛目であるのに対して、後者は端部が尖り気味で、調整は内外面共にナデである。234～240は胴部である。3点とも内外面共に刷毛目調整である。236は低い突帯に刻みが入っている。237～240は底部である。いずれも高い脚台を持っており、内外面共に刷毛目による調整が見られる。

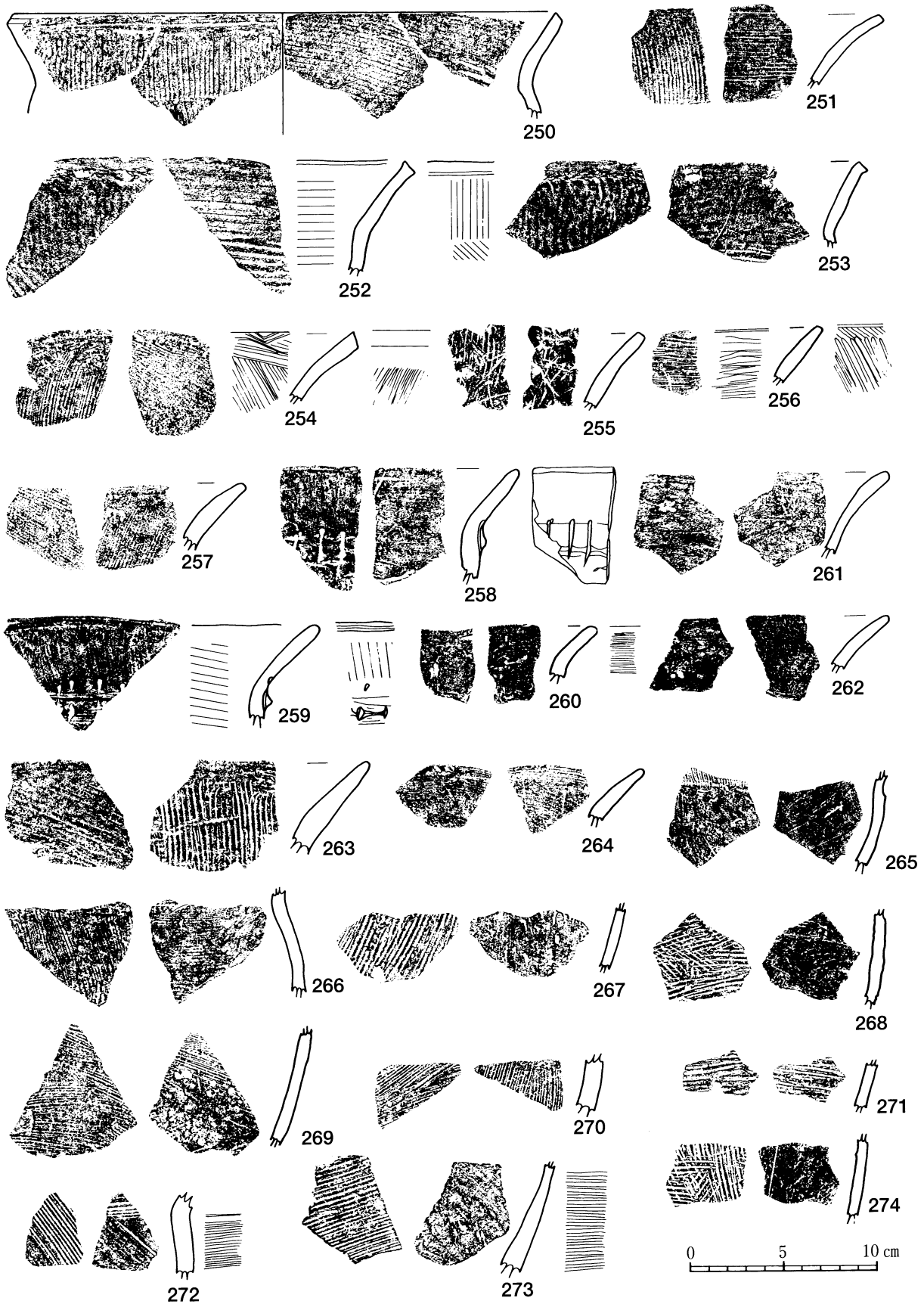
241は高杯の坏部である。口縁径が23.0cmあり、内外面共に刷毛目が見られる。

242は壺形土器である。口縁部が大きく外反し、すぼまった頸部から胴部にかけては大きく膨らむ。胴部最大径付近に横方向の刷毛目が巡り、その上に斜め方向の刻みを施している。調整は刷毛目およびナデである。243は複合口縁をもつ壺形土器の口縁部である。口唇端部は鋭く尖り、袋状となった口縁部下の張り出しには、板目による刻みが施される。244は小型丸底壺（埴）である。胴部と底部との間には明瞭な段が付く。245は手捏ねの壺である。平底を表している。

246～249はいずれも手捏ねの甕形および鉢形土器であり、脚を持つ底部を表している。245の壺形土器も含めて、手捏ねの土器は胎土・焼成共に良好である。



第47図 遺構出土の土器(2)



第48図 古墳時代の土器(1)

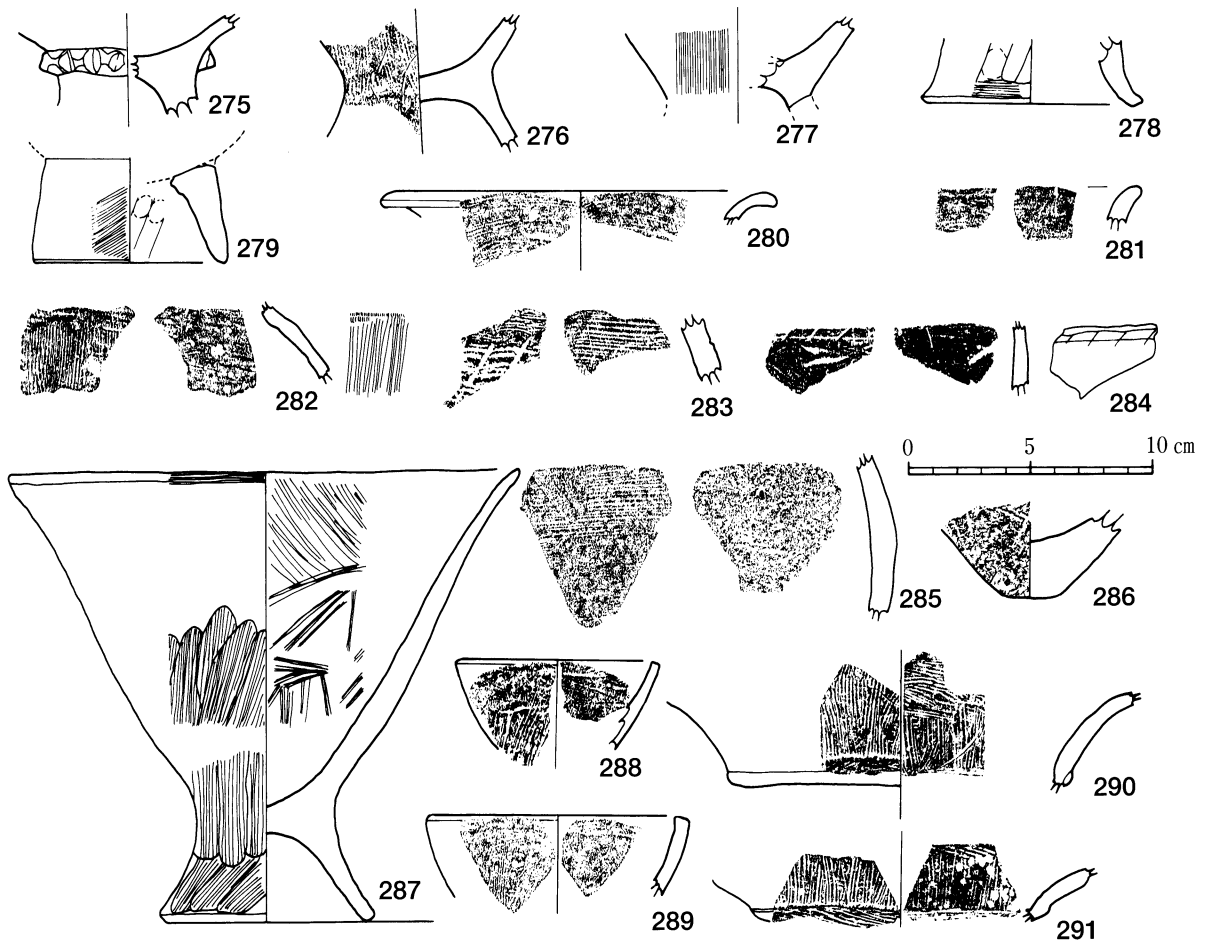
2 土器

遺構に伴わない遺物を第48・49図に載せた。いずれも成川式土器である。

250～279は甕形土器である。250～264は口縁部である。口唇端部の形状によって配列してある。251～254は四角く角張るもの、255～261はやや丸まるもの、262～264はやや尖るものである。全体的に刷毛目による調整が多く見られるが、口唇端部がやや丸まるものはナデ調整が優位と考えられる。258と259は頸部に低い突帯を巡らし、鋭い刻みを長く施す。265・266は頸部、267～274は胴部である。275～279は底部である。275は底部と脚部のつなぎ目に刻み目突帯を巡らしている。脚部の端部は、278が広がるのに対して、279は真っすぐである。刷毛目による調整が施されるものがほとんどである。

280～286は壺形土器である。280は大きく外反する口縁部を持つタイプで、281は同じく外反するタイプでもその程度は極めて小さいものである。282は頸部であるが、外面には縦方向の刷毛目が見られる。283と284は胴部に付された刻み目である。いずれも突帯を巡らさずに直接刻みを施している。前者は太い刷毛目の上に、後者は細い沈線の上に、それぞれ刻みが見られる。

285は胴部最大径付近に横方向の刷毛目が施される。286は丸底気味の平底である。



49図 古墳時代の土器(2)

287～289は鉢形土器である。このうち、287は完形品である。口縁部が21.6cm、高さは18.2cm、底部径は8.8cmである。外面には胴部から底部にかけて縦方向を主体とする刷毛目が見られる。288と289は口縁部である。口縁はやや内傾する。

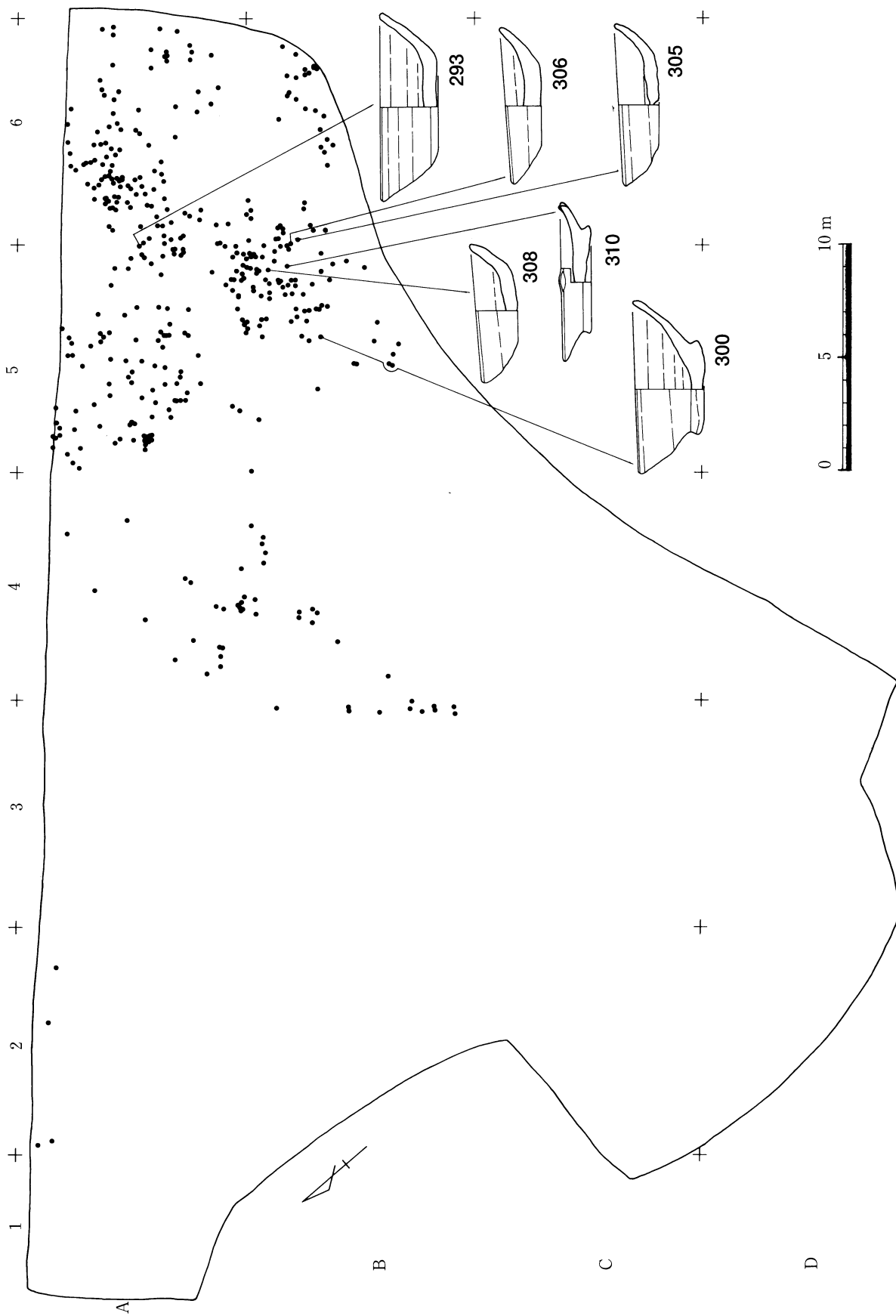
290と291は罎の胴部である。内外両面には全体的に刷毛目が見られ、底部にかけては段が付いている。

第9表 古墳時代土器観察表(1) - 遺構出土

番号	出土区	層位	器形	部位	法 量			色 調		調 整		胎 土	備 考
					口径cm	高さcm	底径cm	外 面	内 面	外 面	内 面		
228	竪穴	埋土	甕	口縁部	-	3.5	-	淡黄色	淡黄色	ナデ	タタキ・ナデ	砂粒・輝石	
229	竪穴	埋土	甕	胴部	-	5.0	-	淡褐色	淡褐色	ハケ目	ナデ	輝石・石英・砂粒	
230	竪穴	埋土	甕	口縁部	-	2.2	-	淡黄色	淡黄色	ハケ目	ハケ目	石粒・石英	
231	土坑1	埋土	甕	完形	32.4	(32.5)	(13.0)	黄橙色	黄橙色	ハケ目	ハケ目	砂粒・石英	
232	土坑1	埋土	甕	口縁部	-	3.8	-	淡黄色	淡黄色	ナデ	ハケ	砂粒・長石	
233	土坑1	埋土	甕	口縁部	-	3.3	-	灰黄黒褐色	灰黄黒褐色	ナデ	ナデ	砂粒・石英	糊痕・スス
234	土坑1	埋土	甕	胴部	-	4.6	-	淡黄褐色	淡黄色	ハケ目	ナデ	砂粒・石英・長石	
235	土坑1	埋土	甕	胴部	-	6.4	-	淡黄色	明黄褐色	ナデ	ハケ目	砂粒・石英・輝石	
236	土坑1	埋土	甕	胴部	-	3.4	-	明黄褐色	明黄褐色	ハケ目	ハケ目	砂粒・石英・輝石	
237	土坑1	埋土	甕	胴部～底部	-	3.9	8.4	淡黄色	淡黄色	ナデ・ハケ目	ナデ	砂粒・長石・石英	
238	土坑1	埋土	甕	底部	-	7.2	(9.0)	淡黄色	淡黄色	ハケ目	ナデ	砂粒・輝石・石英・長石	
239	土坑1	埋土	甕	底部	-	13.9	(11.0)	黄橙色	黄橙色	ナデ	ハケ目	長石・石英	
240	土坑1	埋土	甕	底部	-	(4.9)	(9.0)	明褐色	明褐色	ハケ目	ハケ目	砂粒・石英・角閃石	
241	土坑1	埋土	高坏	口縁部	23.0	5.5	-	明黄褐色	明黄褐色	ハケ目	ハケ目	砂粒・石英	
242	土坑1	埋土	壺	口縁～胴部	17.7	18.7	-	淡黄色	灰黄褐色	ナデ	ナデ	砂粒・石英・長石	
243	土坑1	埋土	壺	口縁部	(16.0)	4.4	-	淡黄色	淡黄色	板目によるキザミ・ハケ目	ハケ目	砂粒・石英・長石・角閃石	
244	土坑1	埋土	罎	胴部～底部	-	5.1	8.1	淡黄色	淡黄色	ハケ目	ハケ目	砂粒・石英	手捏ね
245	土坑1	埋土	壺	胴部～底部	-	5.7	3.0	灰黄褐色	茶褐色	ナデ	指ナデ	砂粒・石英・長石・角閃石	
246	土坑1	埋土	甕	胴部～底部	-	5.9	3.3	淡赤褐色	明褐色	ナデ	ナデ	砂粒・石英・輝石	手捏ね
247	土坑1	埋土	甕	胴部～底部	-	4.0	3.0	淡黄色	淡黄色	ナデ	ナデ	砂粒・石英	手捏ね
248	土坑1	埋土	鉢	胴部～底部	-	3.5	2.7	暗黄色	淡黄褐色	ナデ	ナデ	砂粒・石英	手捏ね
249	土坑1	埋土	鉢	底部	-	2.6	(6.0)	灰黄褐色	灰黄褐色	ナデ	ナデ	砂粒・石英	手捏ね

第10表 古墳時代土器観察表(2)

番号	出土区	層位	器形	部位	法 量			色 調		調 整		胎 土	備 考
					口径cm	高さcm	底径cm	外 面	内 面	外 面	内 面		
250	A-5	II b	甕	口縁部	30.3	5.4	-	淡褐色	明褐色	ハケ目	ケズリ	石英・輝石	
251	表採	-	甕	口縁部	-	4.9	-	暗褐色	褐色	ハケ目	ハケ目	石英・輝石	
252	A-6	II a	甕	口縁部	-	6.0	-	黄褐色	黄褐色	ハケ目	ハケ目	石英・輝石	
253	表採	-	甕	口縁部	-	4.4	-	淡黄色	淡黄色	ナデ	ナデ	石英・輝石	
254	表採	-	甕	口縁部	-	3.8	-	淡黄色	淡黄色	ヘラ	ヘラ	石英・輝石・ 長石・角閃石	
255	表採	-	甕	口縁部	-	4.0	-	黒褐色	淡褐色	ハケ目	ナデ	石英・長石	
256	表採	-	甕	口縁部	-	3.0	-	茶褐色	茶褐色	ハケ目	ハケ目	石英	
257	表採	-	甕	口縁部	-	3.6	-	灰黄褐色	灰黄褐色	ハケ目	ハケ目	長石・角閃石	
258	表採	-	甕	口縁部	-	6.0	-	淡黄色	淡黄色	ナデ	ナデ	石英・角閃石	
259	B-4	II b	甕	口縁部	-	5.1	-	黄褐色	黄褐色	ナデ	ナデ	石英・長石	
260	A-4	II b	甕	口縁部	-	2.6	-	橙色	明黄色	ナデ	ナデ	石英・輝石	
261	B-5	II a	甕	口縁部	-	4.5	-	淡黄色	淡黄色	ナデ	ナデ	石英・輝石	
262	-	-	甕	口縁部	-	3.0	-	淡黄色	淡黄褐色	ナデ	ナデ	石英・輝石	
263	A-4	II b	甕	口縁部	-	5.0	-	淡黄色	淡黄色	ナデ	ナデ	石英・長石・ 角閃石	
264	B-4	II b	甕	口縁部	-	2.8	-	明褐色	明褐色	ナデ	ナデ	長石・角閃石	
265	表採	-	甕	頸部	-	4.9	-	淡黄色	淡黄色	ナデ	ナデ	長石・輝石	スス付着
266	A-5	II b	甕	頸部	-	5.5	-	明黄褐色	明黄褐色	ハケ目	ハケ目	石英・輝石	
267	A-5	II b	甕	胴部	-	3.4	-	淡黄褐色	淡黄褐色	ケズリ	ケズリ	石英	
268	A-5	II a	甕	胴部	-	4.9	-	灰褐色	灰褐色	ケズリ	ハケ目	石英・長石	
269	表採	-	甕	胴部	-	6.8	-	淡黄色	淡黄色	ハケ目	ハケ目・ナデ	石英・長石	
270	表採	-	甕	胴部	-	2.7	-	明褐色	淡黄色	ハケ目	ハケ目	長石	
271	B-5	II b	甕	胴部	-	2.4	-	黒褐色	黒褐色	ナデ	ナデ	石英	
272	A-5	II a	甕	頸部	-	4.1	-	淡黄色	淡黄色	ナデ・ハケ目	ナデ・ヘラ	輝石	
273	A-3	II a	甕	胴部	-	5.8	-	淡黄色	淡黄色	ケズリ	ナデ・ヘラ	長石	
274	A-3	II a	甕	胴部	-	4.2	-	淡黄色	淡黄色	ケズリ	ハケ目	石英・輝石	
275	表採	-	甕	底部	-	4.0	胴径 (5.6)	淡黄色	黒褐色	ナデ	ナデ	石英	
276	表採	-	甕	底部	-	5.2	胴径 (6.0)	淡黄色	黄橙色	ナデ・ハケ目	ナデ	長石・輝石	
277	表採	-	甕	底部	-	3.8	胴径 (4.2)	黒褐色	灰黄褐色	ナデ	ナデ	石英・輝石	
278	B-4	II b	甕	底部	-	2.6	9.0	灰黄明褐色	灰黄明褐色	ナデ	ナデ	輝石	
279	B-4	II b	甕	底部	-	4.0	8.0	茶褐色	茶褐色	ナデ	ナデ	石英・角閃石	
280	-	-	壺	口縁部	(16.4)	0.8	-	淡黄色	淡黄色	ハケ目	ハケ目	石英	
281	B-5	II b	壺	口縁部	-	1.9	-	暗黄褐色	暗黄褐色	ナデ	ナデ	石英・長石	
282	B-4	II b	壺	頸部	-	3.7	-	淡黄色	淡黄色	ハケ目	ハケ目	石英	
283	表採	-	壺	胴部	-	2.4	-	淡黄色	淡黄色	ナデ	ナデ	砂粒	
284	表採	-	壺	胴部	-	2.5	-	淡黄色	淡黄色	ナデ	ナデ	石英	
285	表採	-	壺	胴部	-	6.6	-	淡赤褐色	淡黄色	ケズリ	ハケ目	石英・輝石	
286	B-4	II b	壺	底部	-	3.2	2.0	淡黄色	灰黄褐色	ナデ	ナデ	石英	
287	表採	-	鉢	完形品	21.6	18.2	8.8	明褐色	茶褐色	ナデ	ナデ	石英・輝石	
288	B-4	II b	鉢	口縁部	(8.4)	3.6	-	淡黄色	淡黄色	ナデ・ハケ目	ナデ	石英・角閃石	
289	B-4	II b	鉢	口縁部	(10.6)	3.4	-	淡黄色	淡黄色	ハケ目・ナデ	ナデ	石英	
290	B-4	II b	埴	胴部	(14.2)	3.8	-	淡黄橙色	淡黄褐色	ハケ目	ハケ目	石英	
291	B-4	II b	埴	胴部	(12.3)	2.1	-	淡黄色	黄橙色	ハケ目	ハケ目	長石	



第50图 II a層出土遺物分布图

第5節 古 代

1 調査の概要

Ⅱ層中から古代に属する土師器が出土した。遺構は検出されなかった。

2 出土遺物(第51図)

土師器の坏, 埴, 皿, 甕, 黒色土器, 赤色土器, 墨書土器などが出土している。

①土師器坏(292～297)

高台を有さないもので, 深さのあるものを「坏」として分類した。坏は, 底部形態によって2種類に分類した。底部切り離しは全てヘラ切りである。

- ・坏Ⅰ類 円盤状の底部を有さないもの。
- ・坏Ⅱ類 円盤状の底部を有するもの。
- ・坏Ⅰ類(292～295)

292は, 直線的な体部を有する。ローリングを受けている。293・294は, 直線的な体部を有する。底部側面に回転ヘラ削りが施されている。焼成は良好である。295は, 体部はまっすぐのびたあと内湾する。口径が8.4cmと小さい。

- ・坏Ⅱ類(296・297)

296は, 底部の一部が段を有し, 円盤状を呈しているが, まっすぐに立ち上がっている部分もある。内外面にミガキが施されている。器壁が剥落している。297は, 底部切り離しの際にヘラ切りの跡がくぼみ, 底面の周辺部だけを調整しているために高台状を呈している。曲線的な体部を有する。

②土師器埴(298～300)

高台を有する土師器を「埴」として分類した。南九州に独特な充実高台を有する土師器も埴として分類した。ただし, 黒色土器については, 別に分類している。

埴は, 高台の形態によって2種類に分類した。

- ・埴Ⅰ類 比較的長く「ハ」の字にひらいた高台を有するもの。
- ・埴Ⅱ類 充実高台を有するもの。
- ・埴Ⅰ類(298・299)

298は, 高台の内面まで丁寧な調整が施されている。体部は横に張り出すが, 上部が欠損しているため詳細は不明である。299は, 高台内の中央部は調整が粗い。内面にミガキが施されている。内面は, 赤色を呈しており赤色土器の可能性もある。

- ・埴Ⅱ類(300)

300は, 充実高台の底面が横に張り出している。体部は横に張り出したあと内湾してのびる。ほぼ完形で出土している。

③土師器坏・埴(301～304)

301～304は, 底部が欠損しているため坏か埴か判断できなかった土師器である。

301は, やや曲線的な体部を有する。内面のナデ調整の際に生じる稜線が磨れて, ミガキ状を呈している。外面にススが付着している。302は, 残存部は直線的な体部を呈している。外面全面と内面の一部にススが付着している。301・302は, 灯明皿として使用されたと思われる。303は, 体

部は直線的であるが、口縁部でやや内湾する。304は、直線的な体部を有する。

④土師器皿（305～309）

305は、底部からの立ち上がりに段を有している。曲線的な体部を有する。完形で出土している。306は、底部の厚さが1.1cmとやや厚い。底面の調整は粗く施されている。曲線的な体部を有している。ほぼ完形で出土している。307は、体部が直線的に立ち上がるが、口縁部でやや内湾する。308は、底面の調整が粗く施されている。曲線的な体部を有する。ほぼ完形で出土している。309は、比較的薄い、曲線的な体部を有する。ほぼ完形で出土している。

⑤土師器充実高台付片耳皿（310）

310は、口縁部の1か所が押圧されてくぼんでいる。全体的に丁寧に調整が施されている。内面中央部が磨れており、硯として使用された可能性もある。

⑥土師器甕（311～314）

311は、胴部が口縁部で「く」の字状に外反する。外面は、横位のナデ調整が施されている。内面は、横位を基本としたケズリが施され、屈曲部より上部はミガキが施されている。312は、胴部が口縁部で「く」の字状に外反する。外面は、横位のナデ調整が施されている。内面は、横位を基本としたケズリが施され、屈曲部より上部はナデ調整が施されている。313は、胴部が口縁部でゆるやかに外反する。外面は、横位のナデ調整が施されている。内面は、横位と斜位の削りが施され、屈曲部より上部はナデ調整が施されている。314は、胴部が口縁部でゆるやかに外反する。屈曲部が若干肥厚している。外面は、横位のナデ調整が施されている。内面は、横位と斜位の削りが施され、屈曲部より上部はナデ調整が施されている。

⑦黒色土器A類（315～317）

内面のみ黒色化している土師器をA類として分類した。315・316については、底部が欠損しているため坏か壊かの判断ができない。

315は、曲線的な体部を有する。外面は横位のミガキ、内面は横位と斜位のミガキが施されている。外面も大部分は黒色化している。316は、内外面とも横位を基本としたミガキが施されている。外面は口縁部の一部が黒色化している。317は、壊の底部である。横に張り出す高台を有し、体部も横に張り出している。外面は、丁寧なナデ調整が施されている。内面は、ランダムな方向へのミガキが施されている。

⑧黒色土器B類（318）

内外面とも黒色化している土師器をB類として分類した。

318は、壊である。高台は比較的短く、曲線的な底部を有する。高台内面の調整は粗い。内外面とも体部は横位を基本としたミガキが施されている。見込みはローリングのためミガキの痕跡が明瞭ではない。

⑨赤色土器（319）

319は、底部周辺部にケズリが施されている。直線的な体部を有する。内外面にミガキが施され、赤色顔料が塗られている。

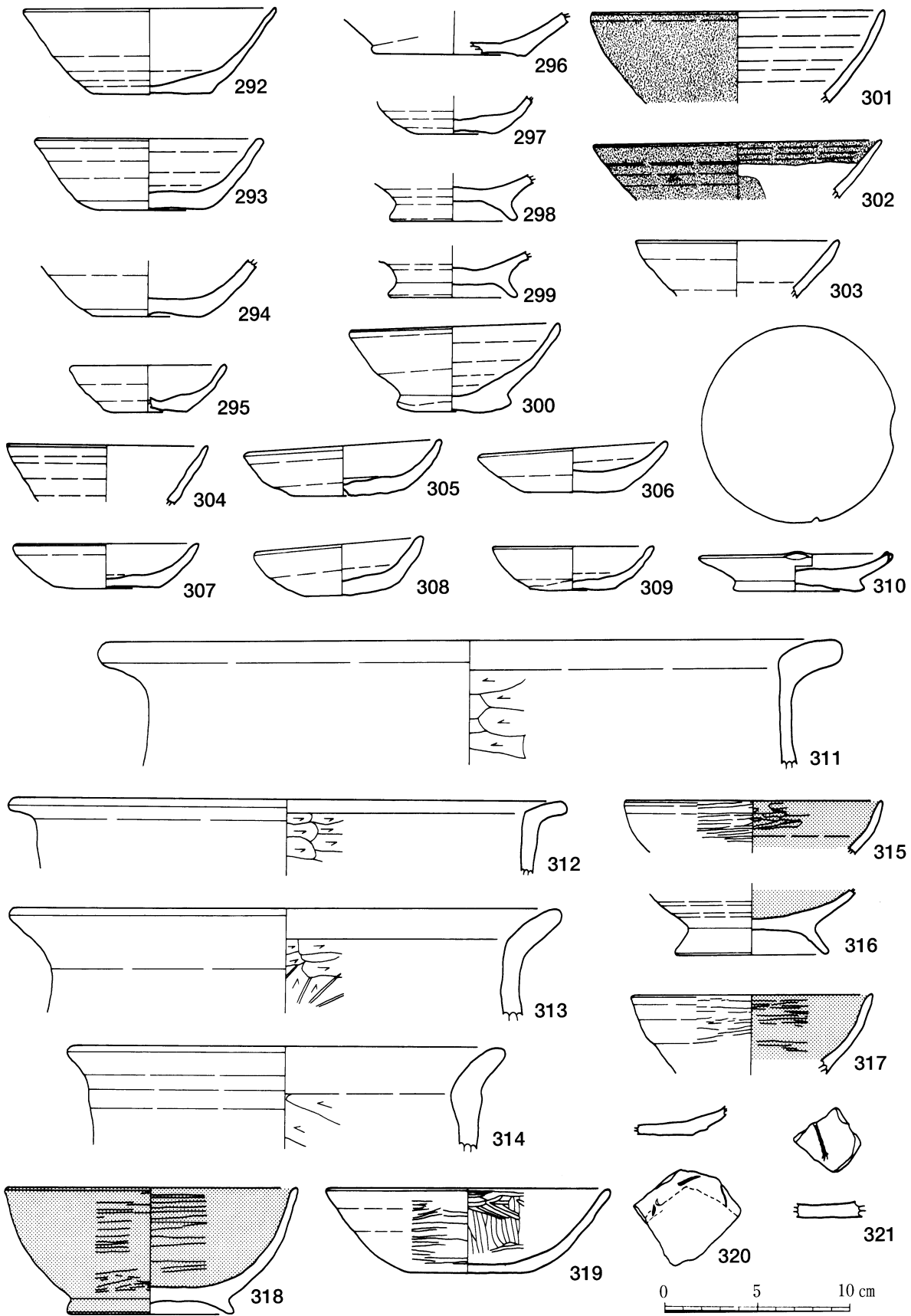
⑩墨書・線刻土器（320・321）

320は、底部外面に墨書と線刻がみられる土師器坏である。墨書は「一」とみえるが、大部分は欠

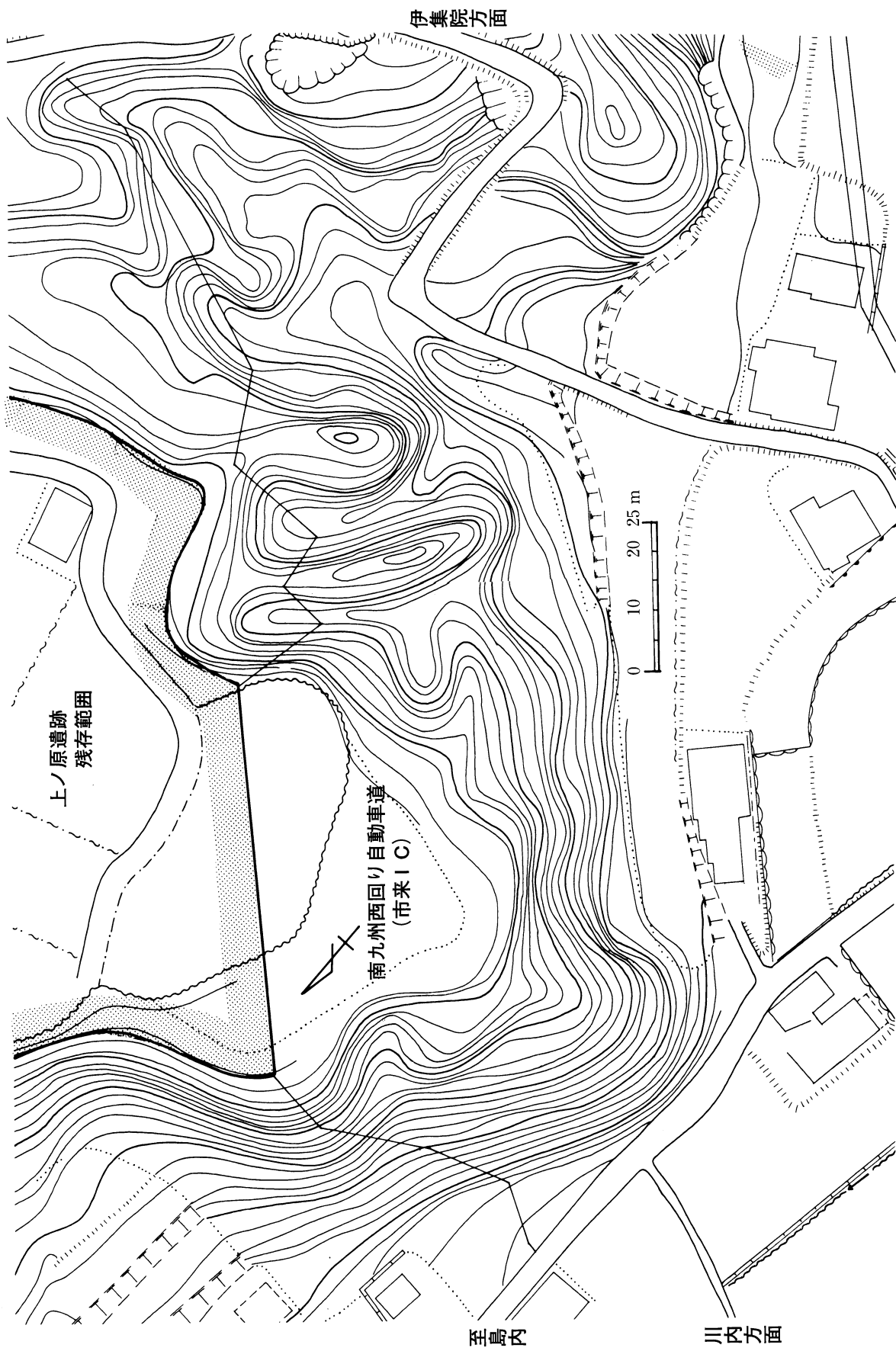
損していると思われる。線刻は2か所にみられ、1か所は、爪形様の2本の線刻がみられる。他方は、ゆるい「S」字状を呈する沈線が施されている。321は、墨書のはねている部分が残存している。

第11表 古代の遺物（土師器）観察表

番号	注記 番号	出土区	層	器種分類	胎 土	色調	口径	器高	底径	高台高	備 考
292	2112	A-5	II a	坏I類	茶粒	浅黄橙	13.4	4.5	6.5		
293	118	A-5	II a	坏I類	角閃石・長石	黄橙	12.3	3.8	5.8		
294			表土	坏I類	角閃石・茶粒	浅黄			6.0		
295	445	A-4	II a	坏I類	角閃石・石英・茶粒	黄橙	8.4	2.5	4.4		
296	382	B-5	II a	坏II類	角閃石・石英・長石	橙			8.3		
297	100	B-5	II a	坏II類	茶粒・長石	浅黄橙			4.7		
298	446	A-4	II a	碗I類	角閃石・茶粒	浅黄橙			6.8		
299			表土	碗I類	石英	浅黄橙			7.0	0.7	赤色土器の可能性有
300	243	B-5	II a	碗II類	長石	浅黄	11.3	4.5	6.2		
301		トレンチ	II	坏か碗	石英	黄橙	15.6				
302		A-3	II a	坏か碗	茶粒	黄橙	15.4				
303			表土	坏か碗	石英・茶粒	黄橙	10.8				
304			表土	坏か碗	石英	黄橙	10.7				
305	38	B-6	II a	皿	角閃石・石英	黄橙	10.7	2.7	5.9		
306	39	B-6	II a	皿	茶粒	浅黄橙	10.1	2.4	5.7		
307			表土	皿	角閃石・石英	浅黄橙	10.0	2.4	6.0		
308	62	B-5	II a	皿	角閃石・石英	黄橙	9.1	2.2	5.0		
309			表土	皿	石英・茶粒	橙	8.6	4.6	2.4		
310	461	B-5	II a	皿	石英・茶粒	黄橙	10.4	2.1	7.0		充実高台付片耳皿
311	385	B-5	II a	甕	角閃石・石英	橙	40.0				
312	2206	A-5	II b	甕	茶粒・長石	橙	30.0				
313	131	A-5	II a	甕	角閃石・長石	黄橙	29.6				
314	117	A-6	II a	甕	角閃石・茶粒	黄橙	23.6				
315	82	B-5	II a	黒色土器	茶粒	浅黄	13.8				A類
316		A-4	II a	黒色土器	角閃石・茶粒	浅黄			8.2	1.3	A類
317	37	B-6	II a	黒色土器	茶粒	浅黄	13.0				A類
318	578	A-5	II b	黒色土器	茶粒・長石	灰	15.8	6.7	9.2	0.5	B類
319	164	A-5	II a	赤色土器	石英・長石	橙	15.1	4.5	7.0		
320	837	A-5	II b	墨書土器	角閃石・茶粒	浅黄橙					線刻有り
321			表土	墨書土器	茶粒	黄橙					



第51図 古代の土器



第52図 上ノ原遺跡残存範囲図

第5章 ま と め

上ノ原遺跡は日置郡市来町島内にあり、平成8年度に確認調査、同10年度に本調査が行なわれた。調査により、縄文時代、古墳時代、古代の遺構・遺物が発見された。以下、概要を述べる。

1 縄文時代

早期では、集石1基と土坑8基が検出された。集石は約80個からなるもので、火熱を受けており、中には破碎礫も含まれていることから、一般的に言われているように石蒸しの調理に使用されたものと考えられる。掘り込みは確認できなかったが、礫の位置の高低差が約20cm程度あることから、本来は若干なり掘り窪めて使用された可能性はあると考えられる。土坑は、楕円形の平面プランを主としており、深さ40～120cmとバラツキがあることから、いろいろな性格があるものと考えられる。中には、埋土中に礫を含むものがあり、ごみ捨て場的なものとみられる。そのほか、二段になった土坑もあり、複合と見て時期差を考えるのか、それとも同時期と見て形態差と考えるのか、いずれとも言い難い。この時期の遺物としては、口縁部下に貝殻の腹縁による押圧が見られ、器壁には粗い条痕が施されるタイプの前平式土器と、口縁部に貝殻腹縁の押圧を連続的に施して文様とするタイプの塞ノ神式土器がある。

前期以降では、集石2基と土坑5基が検出された。集石は、いずれも直径60×100cmと60×80cm程度の、割合に小さくまとまったものである。礫の位置の高低差が20cm程度あることから、本来は浅い掘り込みを伴うものかと考えられる。土坑のうち2基は掘り込みのほぼ中央に小ピットをもつものであることから、落とし穴の可能性が考えられる。それ以外の土坑は楕円形を基本として、そのほかにはほぼ円形のものが見られ、深さは40～60cm程度ある。円形のもの横には楕円形の土坑が見られるが、形態などを考えると、楕円形のを円形の土坑が切っているといえる。この時期の遺物としては、前期のものとして内外両面に貝殻による条痕が粗く施され、口縁部下に刻みのある突帯を巡らし、中にはさらに粗い沈線が格子状または波状に施されているものも見られる。轟式土器であろう。晩期の土器としては、粗い条痕が施され、口縁部が内傾し、肩部が強く張り、底部は平底となる器形の深鉢形土器（入佐式土器）と、口縁部および張り出した肩部に刻みを持つ深鉢形土器（突帯文土器）とが見られる。

石器は同一層でも時期が異なることがあることから、時期の比定はできなかった。1点だけではあったが旧石器時代の三稜尖頭器も出土している。石鏃は総数38点中、鋸歯状を呈するものが23点あり、この遺跡での特徴を示している。また石材も長崎県の針尾原産の黒曜石を用いているものが多い。石匙・スクレイパー類も多く出土している。1点石槍が出土しているが、県内での出土は少なく貴重なものである。石斧は土掘具と考えられている縄文時代晩期の有肩石斧が多いのが特徴である。双角状石器はアワビ起こしであるという説のあるもので、有明湾沿岸から長崎県の海岸地帯の遺跡に多くみられるもので、当地で発見されたことは重要なことである。また、この遺跡では磨石・石皿が多量に出土したことも特徴としてあげられる。磨石は凹部のあるものや敲打痕がみられるものなども出土している。

2 古墳時代

遺構としては、竪穴遺構と貝殻混在の土坑がそれぞれ1基ずつ検出された。竪穴遺構は、直径が約3mあり、掘り方の内側に柱穴と推定されるピットが3基検出されており、住居跡の可能性が考えられる。貝殻混在の土坑は楕円形に近いもので、完形品を含む多くの土器が見られるほかに貝層があった。貝の種類は、二枚貝を主体として巻貝も見られた。土器は、甕形土器の口縁部がくの字状となり、器面には両面に刷毛目による調整痕が残り、底部は高い脚台を持つ。壺形土器は、口縁部が大きく外反し、器面は刷毛目による調整痕が残り、胴部最大径付近に突帯を伴わない刻みを巡らし、底部は丸底に近い平底である。高坏形土器は坏部が大きく開き、外面に段を有するものである。底部は出土しなかった。そのほか、小型丸底壺（埴）や手捏ね土器も見られる。これらのことから、この土器群は、在地性の強い成川式土器で、前期のものと思われる。

3 古代

遺構は検出されなかったが、遺物が出土している。土師器には、坏や埴、皿のほか、甕も見られる。坏は底部が平らなものと、若干上げ底となるものが見られる。埴には、高台の付くものと充実高台付きのものがある。皿は、直径が12cm程度のものが多く、規格性に富んでいる。皿の中には、充実高台の付いた片耳の皿もあり、特筆に値する。坏や埴の中には、黒色土器や赤色土器、内黒や内赤の土器も見られる。

甕は口縁部が厚く、外反している。内面に明瞭な稜をもつものとそうでないものが見られる。

そのほか、外面に線刻の見られる坏や墨書土器も出土しており、遺跡の性格の一端が垣間見えるように思われる。

以上、概略を述べてきたが、最後に上ノ原遺跡の性格について考えてみたい。調査面積が2,000㎡程度であるのに加えて、台地の縁辺にあっていたことから、遺跡の主体部とはどうてい考えられず、したがって遺跡の中心的な性格も不明とせざるを得ないというのが実際のところである。

縄文時代には、早期・前期および晩期に生活の痕跡がうかがえるものの、住居跡などは検出されていないことから、生活根拠地と考えることには無理があると思われる。しかし、それでも単に狩猟などで立ち寄ったとするには、多くの石皿が出土することから否定的である。各時期の生活根拠地（住居跡など）を近隣に考えるほうが無理がないように思われる。

古墳時代には住居跡と考えられる遺構や貝殻を遺棄したと思われる遺構があることから、小規模な集落ではあろうが生活域を考えても良いように思われる。

古代には遺構は確認されていないものの、南側に隣接する市ノ原遺跡（第1地点）に四面廂建物跡を伴う14棟の建物群が存在することを考慮すれば、本遺跡も何らかの関わりをもっていた可能性がないとはいえないと考えられる。墨書土器の出土からは、官衙的な性格も候補のひとつに入れてよからう。

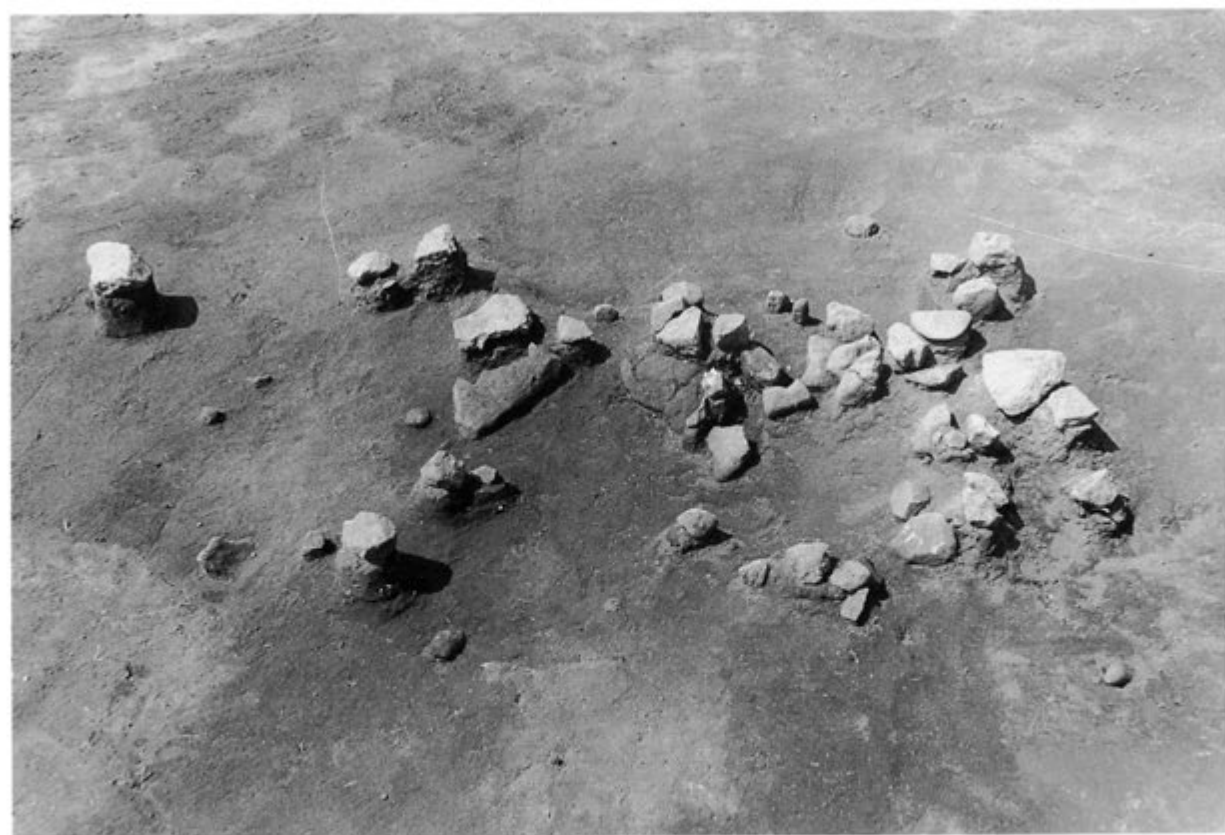
参考 『市ノ原遺跡（第1地点）』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（49）

2003年3月 鹿児島県立埋蔵文化財センター

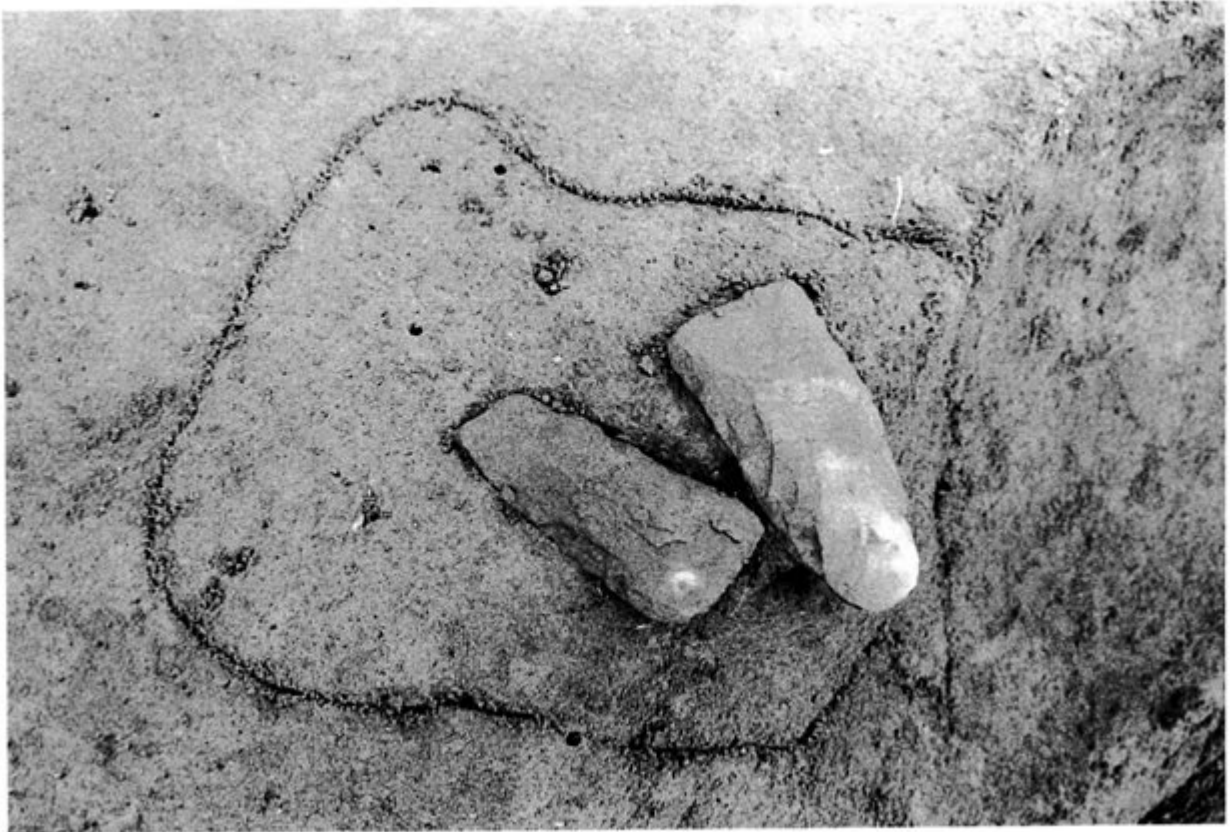
版 圖



遺構検出状況



2号集石



石斧デボ検出状況



石斧デボ断面



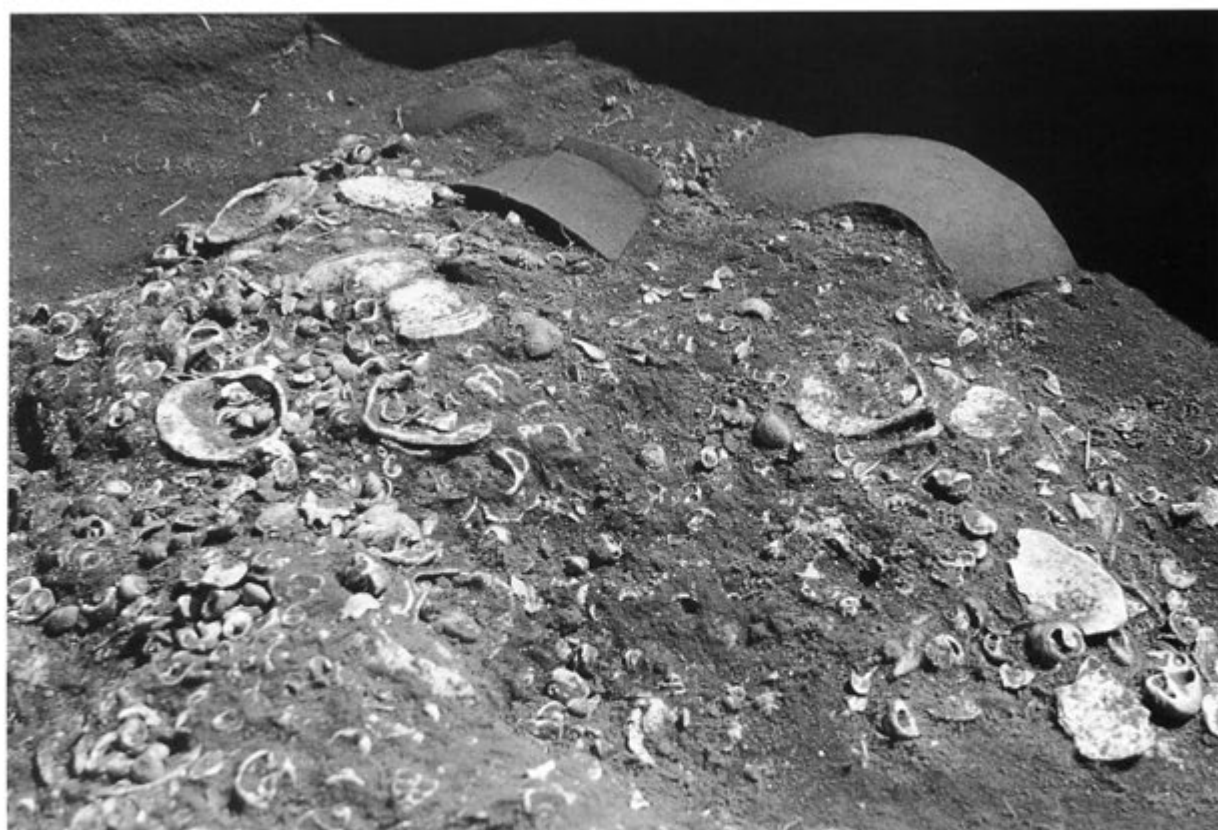
土層断面



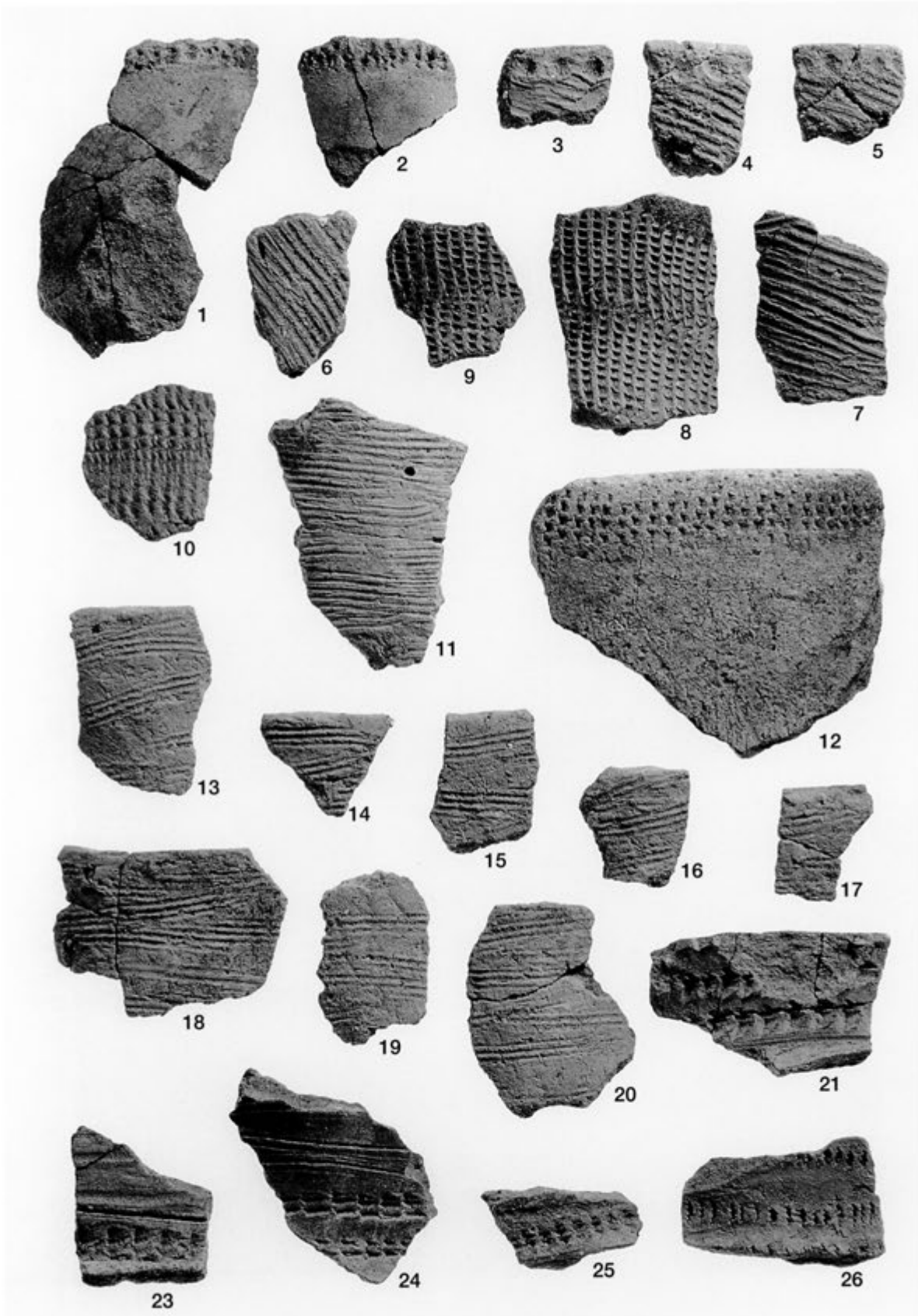
土層断面



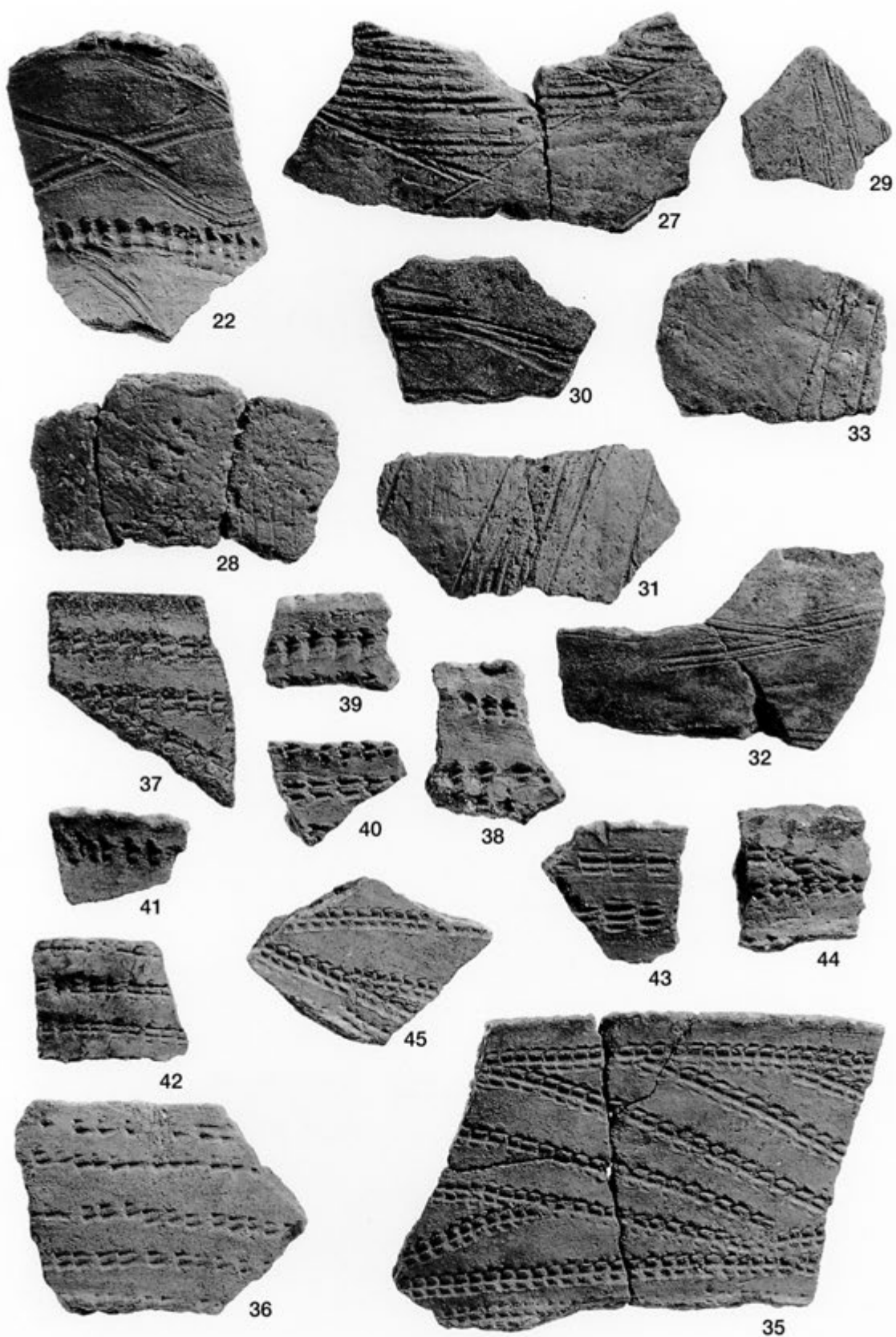
貝殻混在の土坑



貝殻検出状況



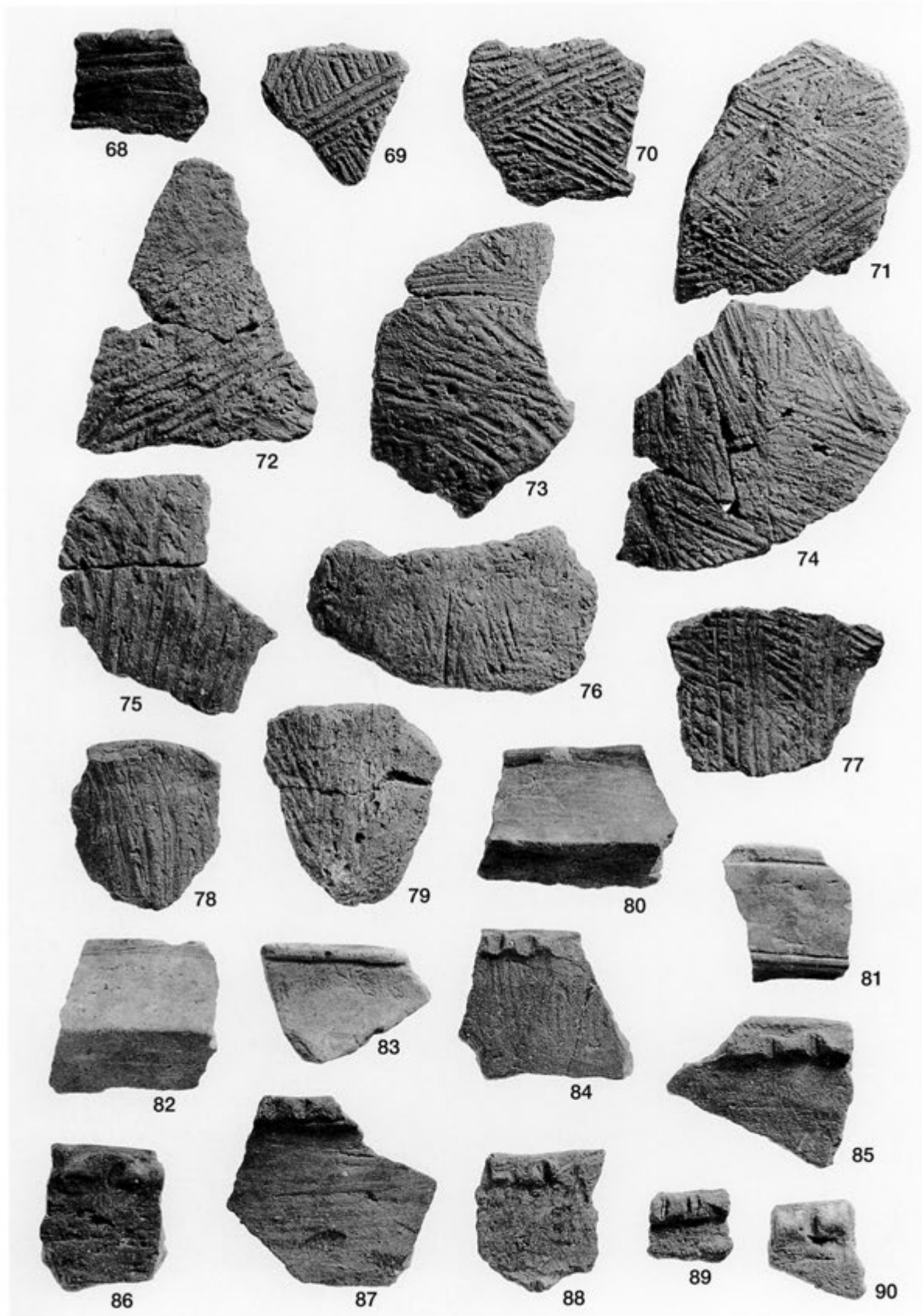
縄文土器 (1)



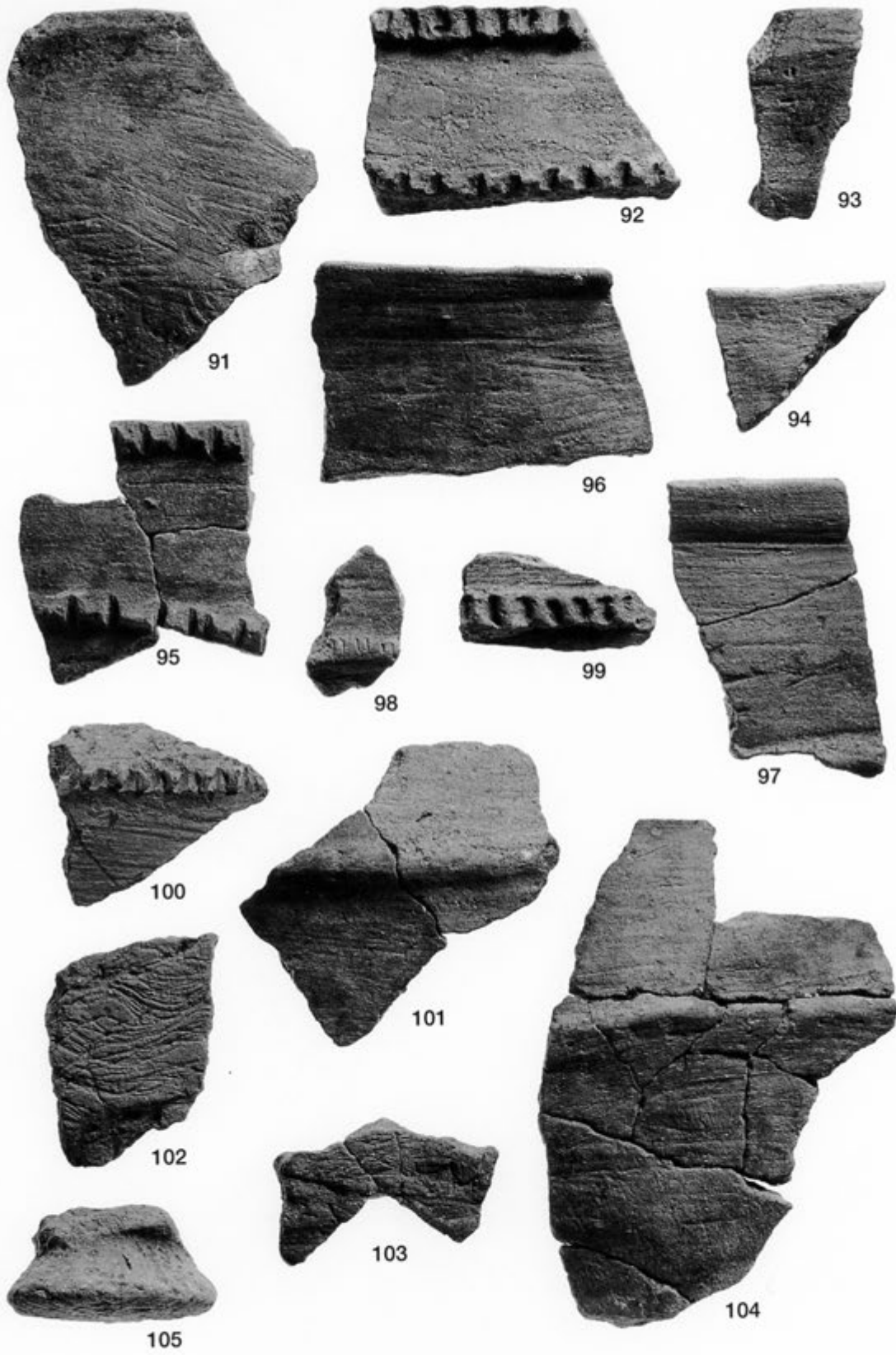
縄文土器 (2)



縄文土器 (3)



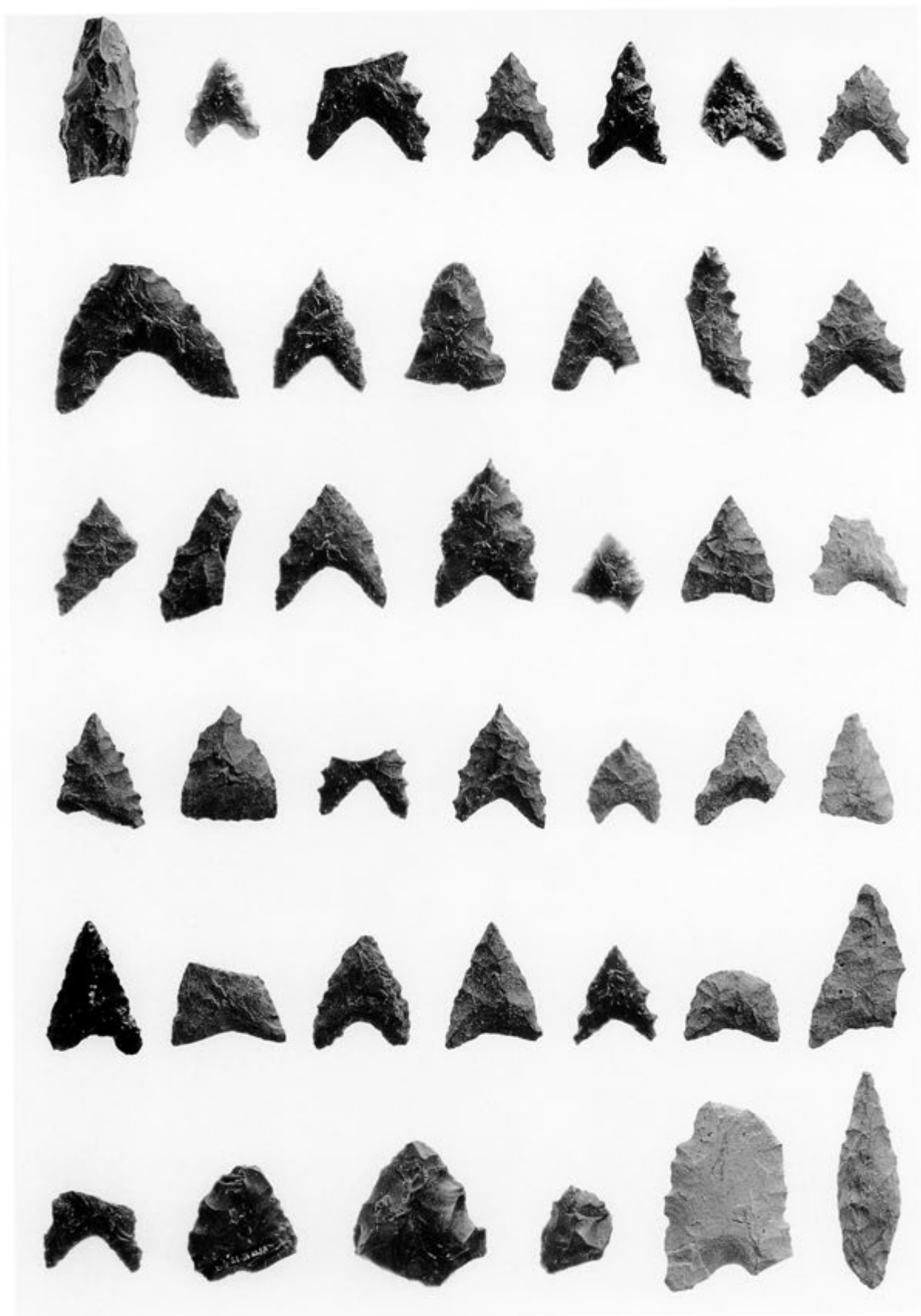
縄文土器 (4)



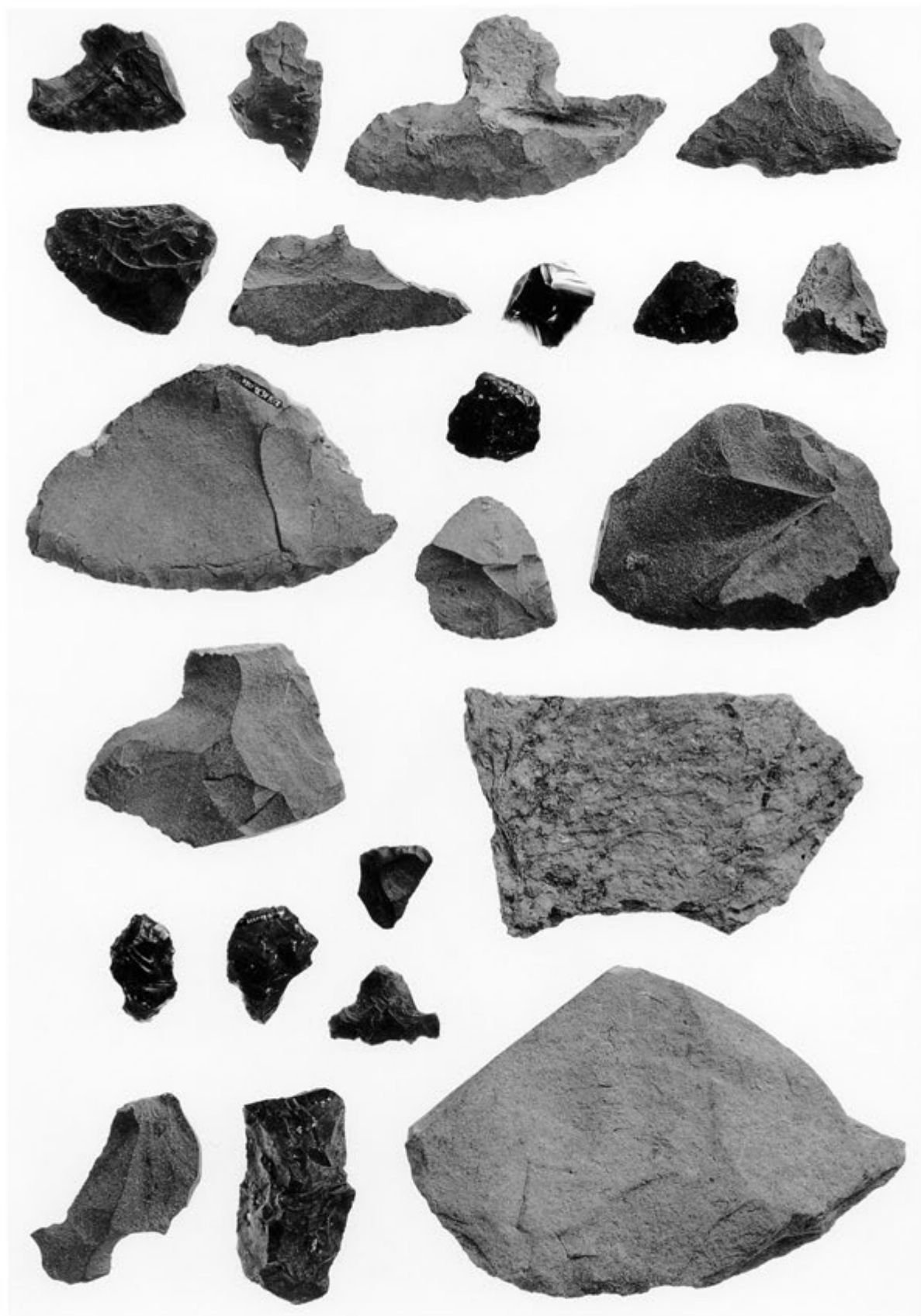
縄文土器 (5)



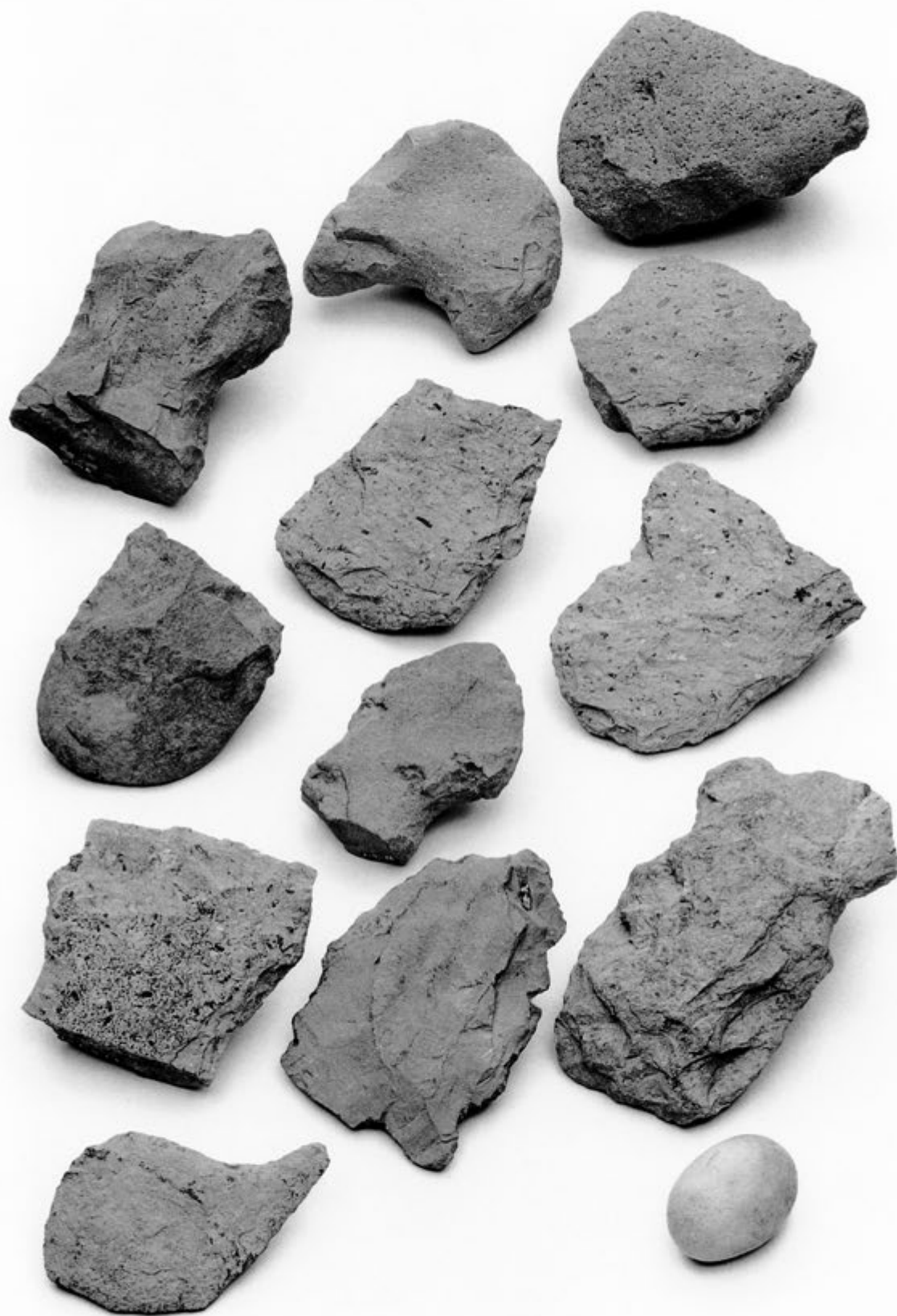
石 器 (1)



石 器 (2)



石 器 (3)



石 器 (4)



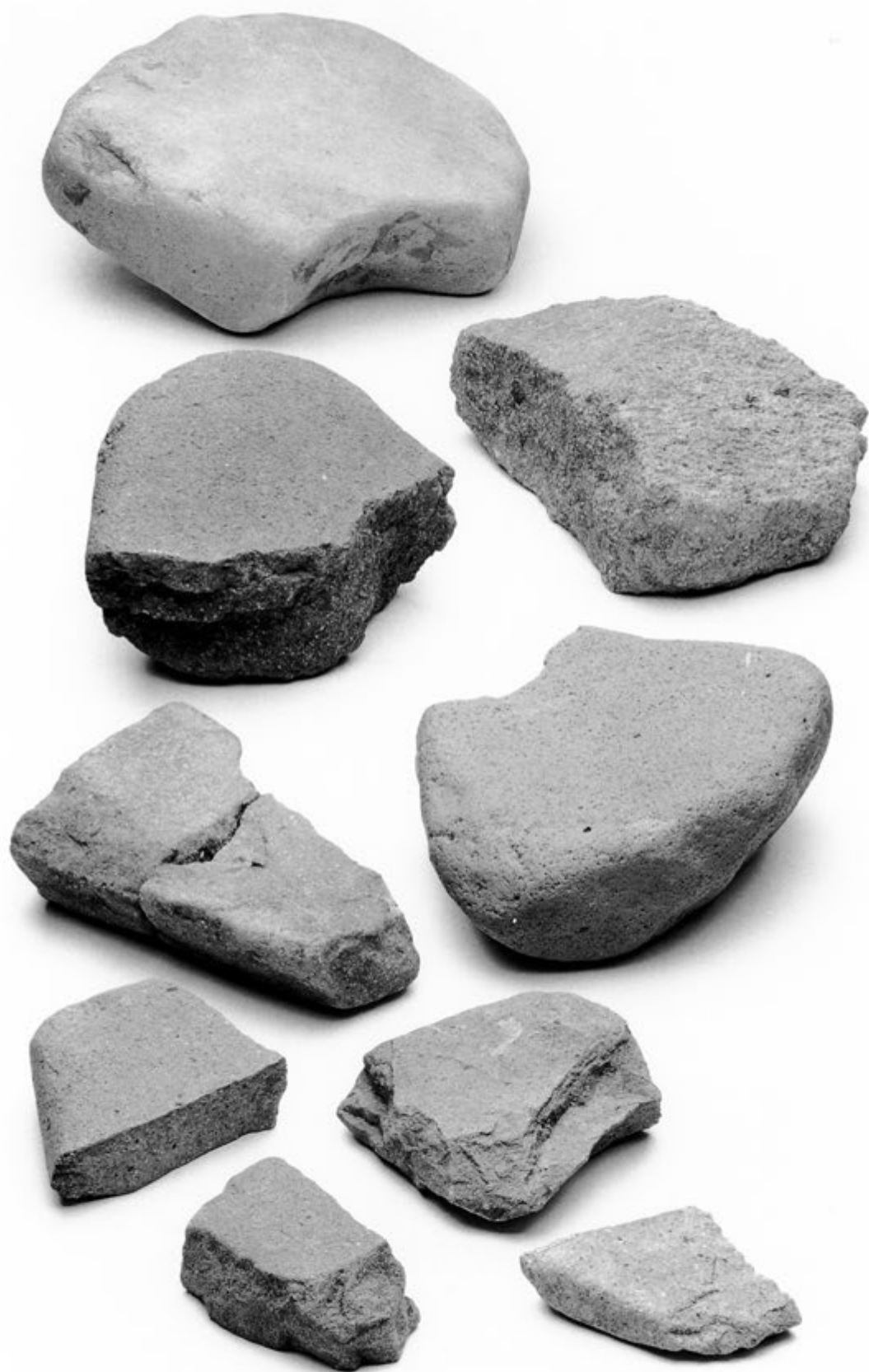
石 器 (5)



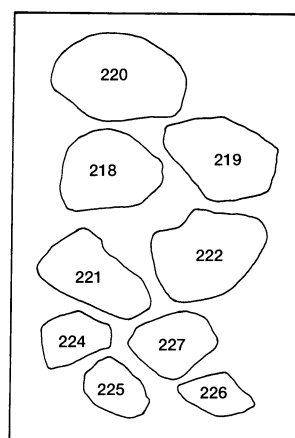
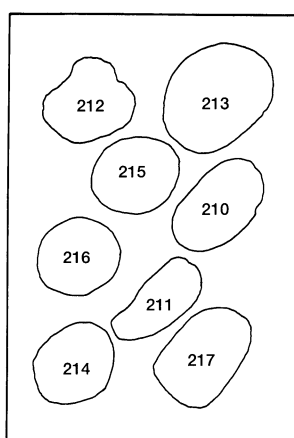
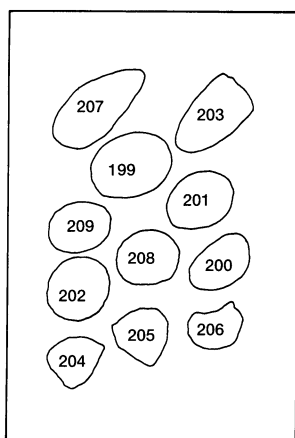
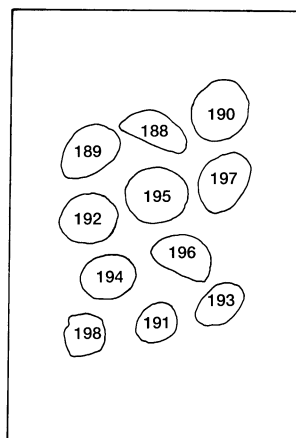
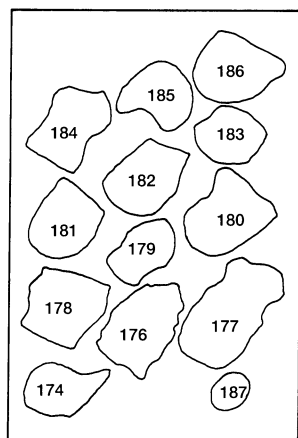
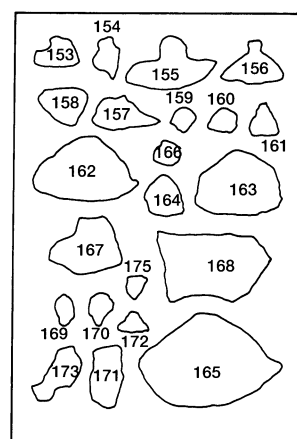
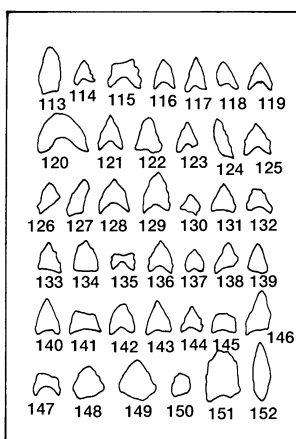
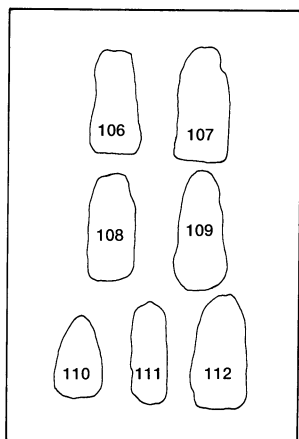
石 器 (6)



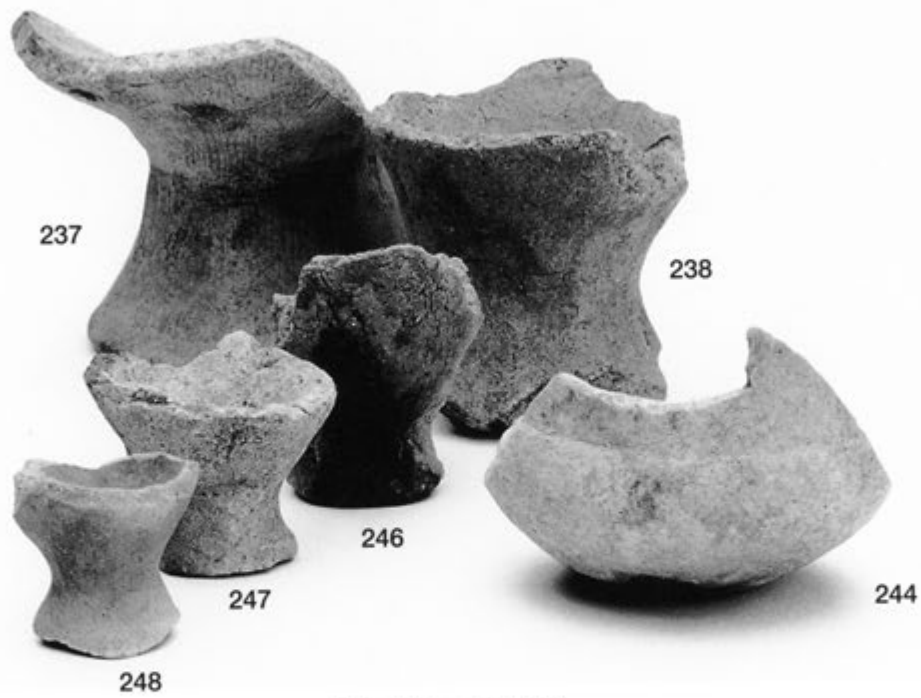
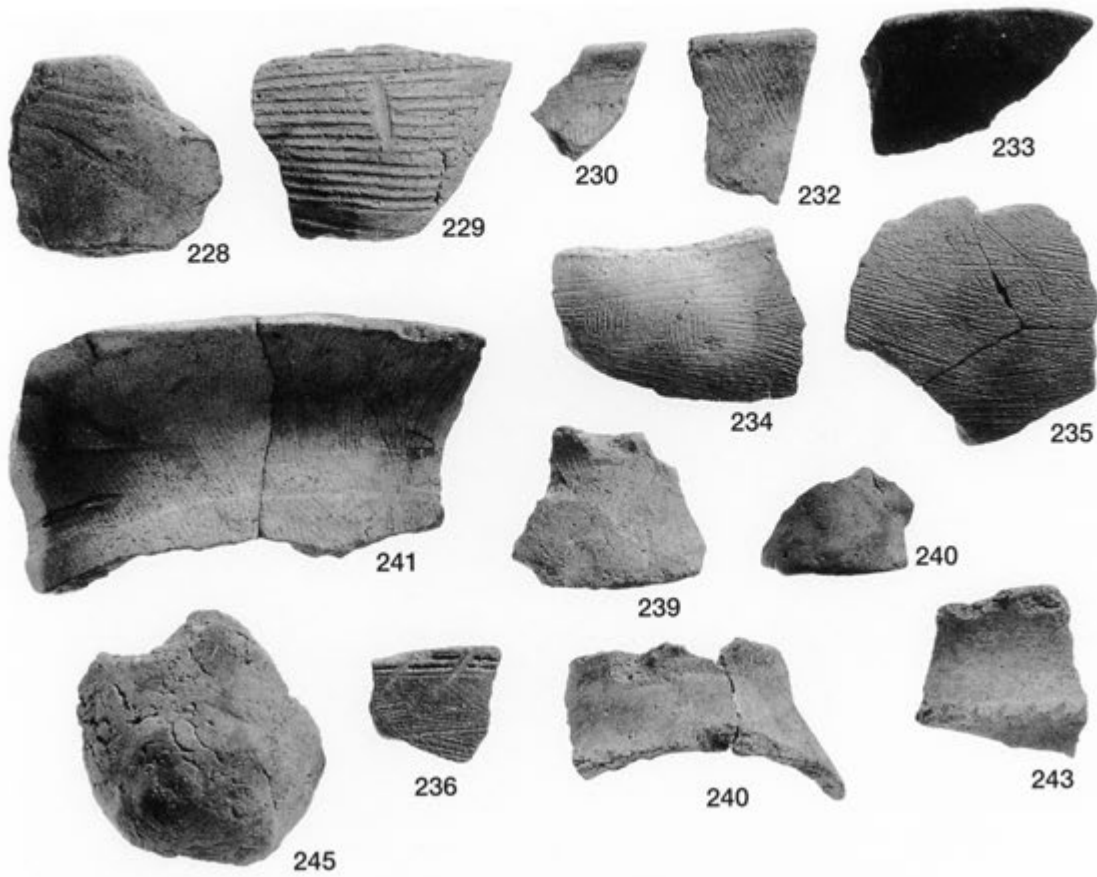
石 器 (7)



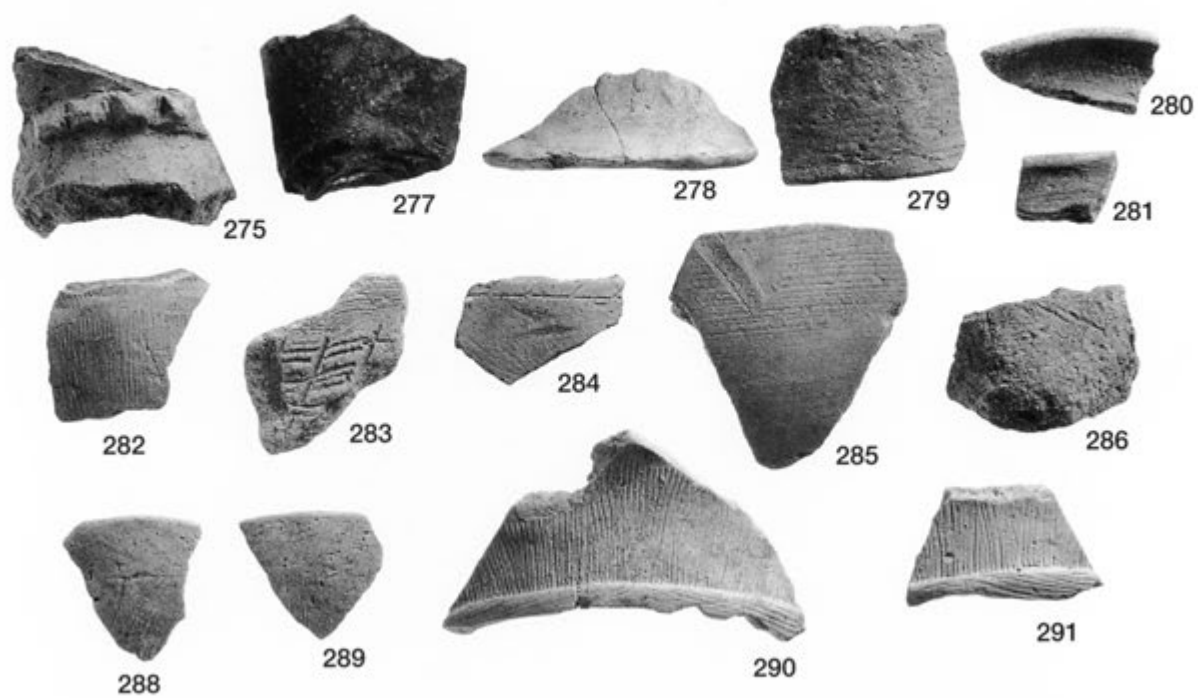
石 器 (8)



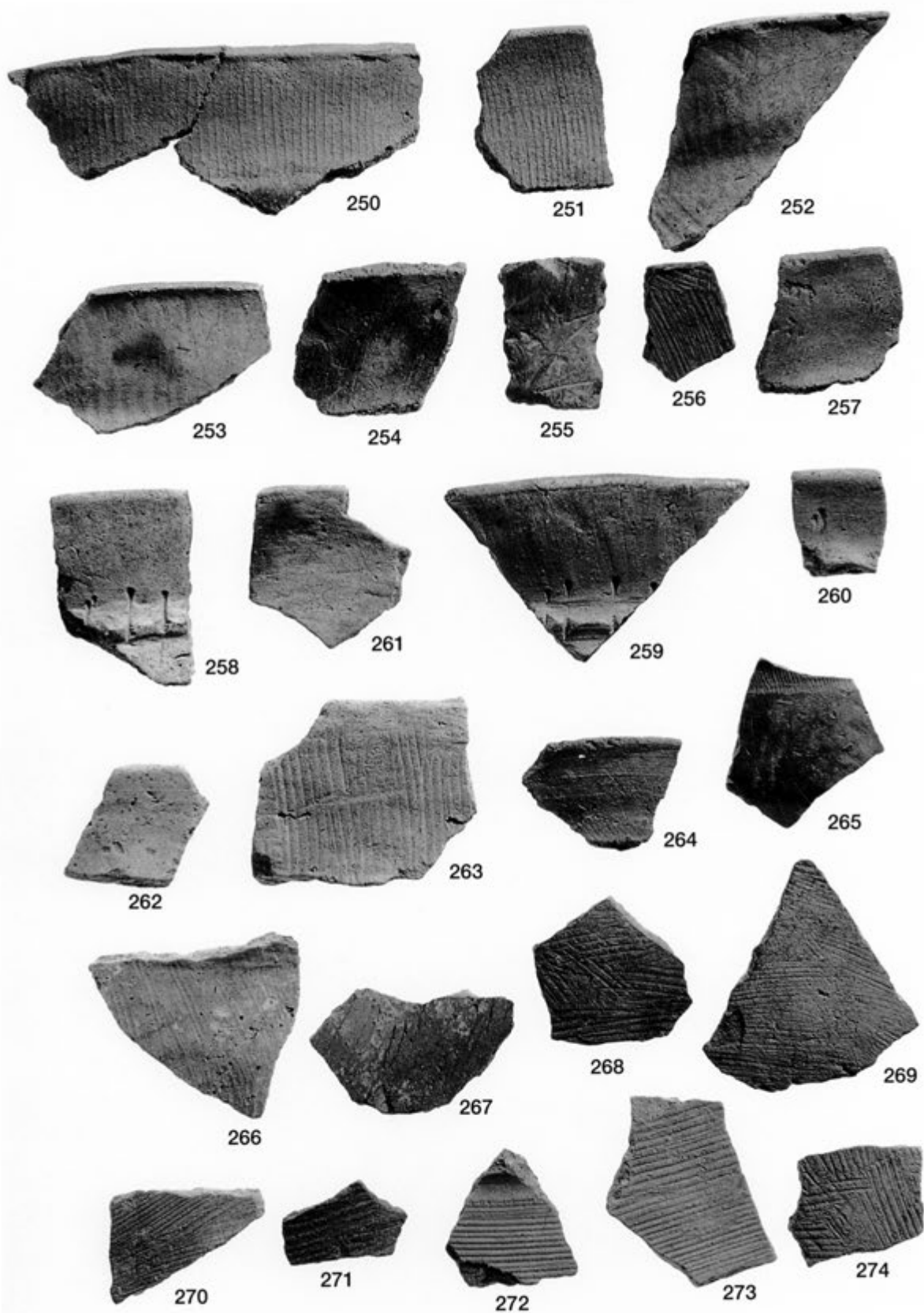
石器 (9)



古墳時代の土器 (1)



古墳時代の土器 (2)



古墳時代の土器 (3)



古代の土器

あ と が き

いろいろなことが起こった1年であった。

国民共有の財産である埋蔵文化財を発掘調査し、報告書を作成する仕事の重さを改めて認識し、少しでもよい報告書を作成しようと努力する日々であった。

さて、上ノ原遺跡の発掘調査当時の担当者は異動してしまったが、残された職員が、残された記録と記憶を総動員して作成したのが、本報告書である。

埋蔵文化財行政を取り囲む状況は厳しいものとなりつつある。しかしながら、過去を振り返り、それをふまえて未来を切り開いていくことは、こんな時代だからこそ重要であると考えます。私たちは、これからも少しでもよい記録を残し続けていくために努力していきたい。

最後に、埋蔵文化財の重要性を認識して整理作業を見守っていただいた国土交通省に感謝の意を表するとともに、短期間に集中して報告書作成作業に取り組んでくれた整理作業員の取り組みにお礼を述べたい。

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (62)

上 ノ 原 遺 跡

発行日 2003年3月24日

発 行 鹿児島県立埋蔵文化財センター

〒899-4461 鹿児島県国分市上之段1175番地1

印 刷 株式会社 朝日印刷